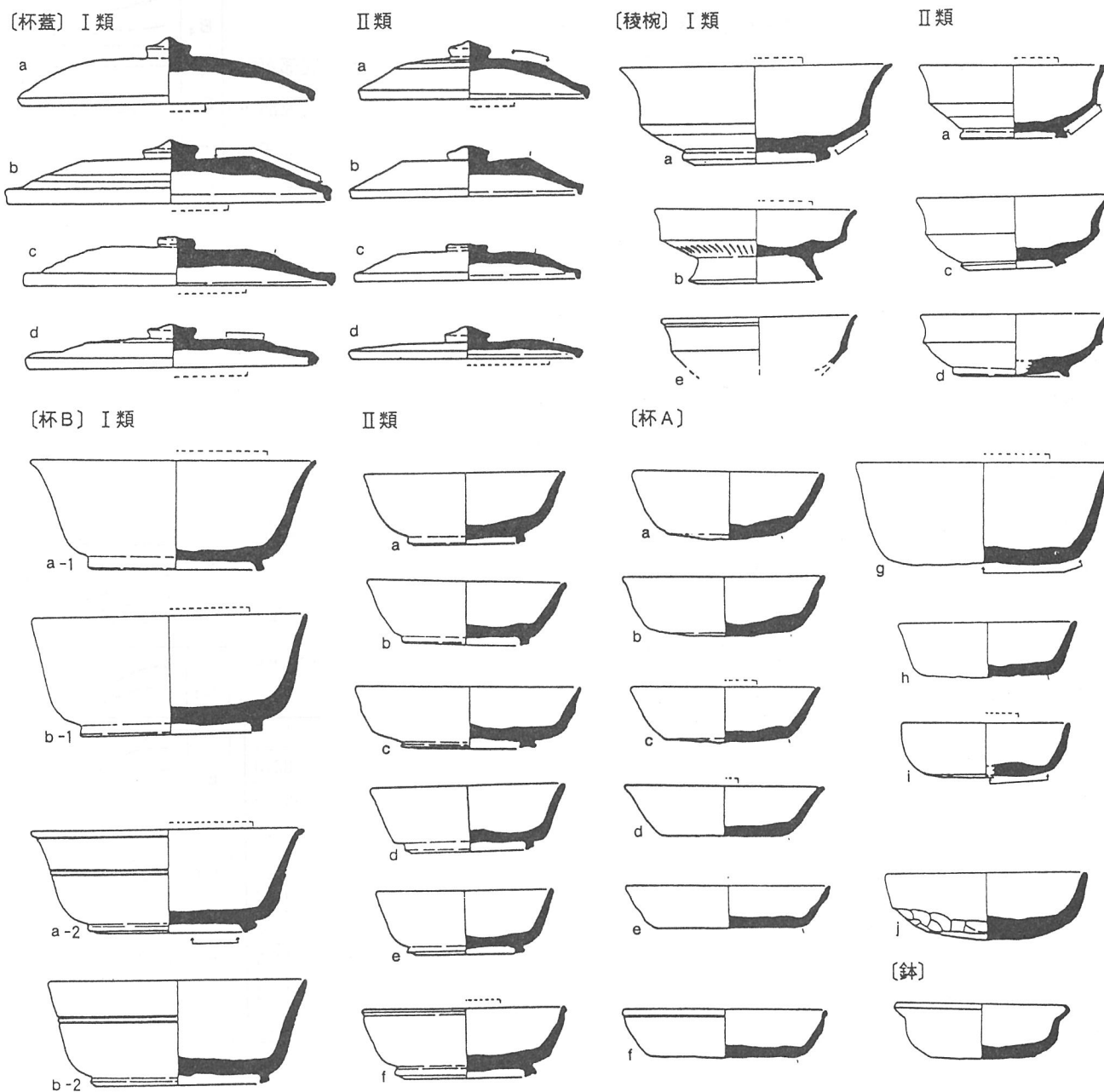


### 3 I地区 出土遺物

出土遺物には須恵器と土師器、鉄滓等がある。須恵器の器種には、第65図のような各種の器種と法量差による種類がある。これらの出土遺物は、須恵器窯跡の操業に伴う奈良時代後半の須恵器が主体であり、製鉄の操業に関連する製鉄炉や炭焼窯に伴う時期の土器は少なくわずかな量である。

#### (1) 杯類の形態分類

**杯蓋** 法量には、口径が19.5~15.1cmのⅠ類と口径が15.0~11.0cmのⅡ類がある。形態は便宜上4つのタイプに分類できる。aは天井部の器高が高く笠型をなすもの。bは天井部を平坦に成形し、天井部と口縁部との境が角張るもの。cは天井部をほぼ平坦に成形するが、天井部と口縁部との境が緩やかに屈曲するもの。dは天井部までの器高が低く扁平な形態になるものである。Ⅰ種の器面調整は、外面の天井部を切り離れた後につまみを付けロクロナデを軽くするものと、左回りのヘラ削りを二から三面行うものがある。内面の天井部には、ナデを不定形な方向に加えるものが多い。Ⅱ種の調整は天井部外面にロクロナデを行うものが一般的で、内面中央に一二回程度の軽いナデを行うものと、



第65図 I地区出土の杯の形態分類 (1/4)

ロクロナデのみの調整がある。

**杯B** 法量はI類が口径16.0~14.7cmと、II類が口径14.4~11.0cmのものであるが、口径に大きな幅があり細分できない。I類の形態にはa・bがあり、更に体部に沈線を引かないものと、沈線を巡らせる有文のものがある。aは口縁部の大きく外反するもので、bは少ししか外反しないものである。II類では高台の取り付け位置や体部の立ち上がり及び外反等から形態を7つのタイプに区分した。aは口縁部が緩やかに外反するもの。bは高台から直ぐに外反しながら口縁部にいたるもの。cは底面のかかなり内側に小さな高台を取り付けるものである。d・eは底面から強く折れて立ち上がり、dは口縁部が外反するもの。eは端部が外反しないものである。gは口縁端部の外面に沈線が入るものである。

I種の器面調整は、内面を不定形な方向または二・三方向にナデを加え、底部外面はヘラ切り後に軽くナデを加えたり、一部ヘラ削りを行うものもある。II種では内外面ともにロクロナデを行うものが多く、わずかにナデを施すものもある。

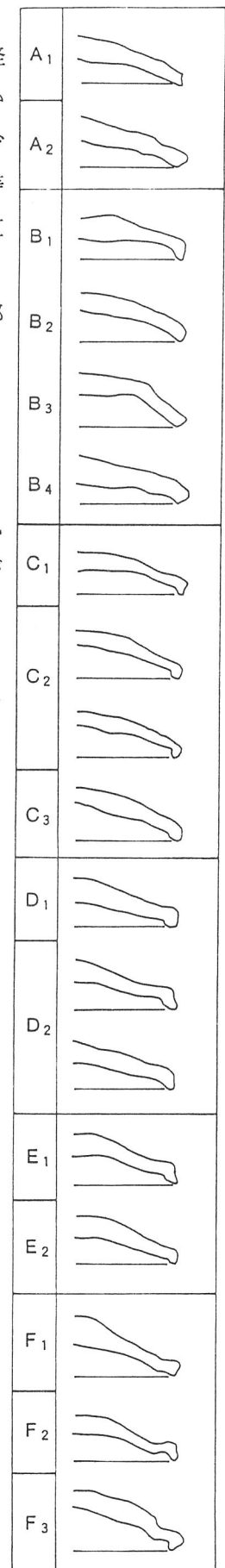
**杯A** 形態を11のタイプに区分した。aは底部が少し尖り気味になるもの。bは底部が丸底状になるもの。cは平底状をなし立ち上がりが外傾するもの。dは底部が平坦で口縁部が外反するもの。eは平底で器高が低いもの。fは口縁端部に沈線を引くもの。g・hは杯Bの高台を欠く形態をなすもので、法量からgはI類であり、hはII類にあたるものである。iは底部から丸みをもって立ち上がり口縁部が外反するもの。jは分厚い作りで外底面をヘラ削りするもの。kは口縁部がくびれ外反する特殊な形態をなすものであり、一部で焼台と報告されているものにあたる。調整は内面の中央にナデを1回行うものと、ロクロナデのみのものがある。底部はヘラ切り未調整のままか、または少し軽くナデたものがある。

**稜椀** 法量では口径16.7cmの面取りされた口縁端部をもつI類と、口径13.0~10.7cmのII類がある。II類は形態の違いにより更に5つのタイプに区分される。aはI類と同じ面取りした口縁端部をもつ。bは体部中程が角張るものと少し丸みをもって屈曲するものがある。cは体部中程が少し突出して屈曲するもの。dは高さ1.5cmの高い高台をもつもので体部下半に浅い刻み目が入るもの。eは口縁端部に沈線を巡らすものに区分できる。

器面の調整はロクロナデを行い、底部内面を更にナデるものがあり、体部外面の下半をヘラ削りするものもあり、底部外面はヘラ切り後に未調整か、または軽くナデを行っている。

表15 I地区 杯蓋口縁部の形態比率

	区分	A	B	C	D	E	F	G	計
小	／36	171.5	379.0	12,479.0	1,589.5	2,054.0	201.5	7.5	16,882.0
	÷36	4.8	10.5	346.6	44.2	57.1	5.6	0.2	469.0
	%	1.02	2.24	73.92	9.42	12.17	1.19	0.04	100.0
大	／36	—	302.5	1,897.0	731.0	566.0	148.0	—	3,644.5
	÷36	—	8.4	52.7	20.3	15.7	4.1	—	101.2
	%	—	8.30	52.05	20.06	15.53	4.06	—	100.0
全	／36	171.5	681.5	14,376.0	2,320.5	2,620.0	349.5	7.5	20,526.5
	÷36	4.8	18.9	399.3	64.5	72.8	9.7	0.2	570.2
	%	0.84	3.32	70.04	11.30	12.76	1.70	0.04	100.0



第66図 杯蓋の形態

### 杯蓋の口縁部形態区分（第66図）

以下の特色から7種に区分し更に細部の成形形態の相違から細分した。Aは口縁端部が角張るだけで肥厚しないもの。Bは口縁部が緩やかに下方に丸く少し伸びるもので、端部内面に稜線の入らないもの。Cは口縁部が下方に三角状に尖るもの、幅広いもの、狭いもの、内面に沈線が入るもの、強い稜線が巡るものなど変化がある。赤坂C遺跡XV地区にはほぼ準じ変化がみられるが、C4に対応するものはみられない。Dは口縁端部が幅広く下方に折れるもの。Eは口縁端部が下方に肥厚し、Cに比べ極端に少なく内面に弱い稜線が入るもの。Fは口縁部近くが外方に折曲するもので、口縁端部がC及びEと同様に下方にのびるものである。

表15は口縁部の形態分類による比率である。表左欄の大は法量がI種であり、小はII種を表している。個体数は口縁部を36分割したものの集計から求め、その割合から比率を示した。I・II種を合計した全体平均は、CがI・II種とも最も割合が高く、平均で70.0%と多く主体をなす。次いでD・Eが11~13%と少なくなり、Bでは3.3%と更に減少し、A・F・Gでは1.7%以下に激減し希な存在である。またI種ではA・Gが確認できていない。なお、I・II種ではC・D類に比率の多少の相違があるが、杯蓋の極端な比率の逆転はみられない。

### (2) 杯の重ね焼き（第67図）

蓋・杯の重ね焼きの分類は、北野博司氏 [北野1988] や木立雅明氏 [木立1998] の研究成果に基づき、蓋に残る釉の痕跡から図のような焼成方法に細分した。

A種は使用状態で正位の重ね焼き、B I種は身が正位で蓋が逆位としての積み重ねである。B II種は身が正位で蓋が逆位を一単位とし、蓋と蓋を合わせ積み重ねるものである。C種は身または蓋だけの積み重ねをして焼成したものである。A種では蓋の内面は無釉の状態であり、A I種が正位で交互にずらして積み重ねるもの。A II種は上方に積み重ねるもので、1が同法量のもの、2の下が大きな法量の杯Bで上に小さな法量の杯Bをのせる。B II-2は杯Bを逆位にして積み重ねたものがずれて焼成されたと考えられる。

I地区出土の杯Bの重ね焼きは、杯蓋の観察結果から表16のとおりである。表の作成は蓋の実測に際し焼成の際の痕跡をみた。I種では実測した76点の内52点に重ね焼きの痕跡があり、II種では実測した305点の内166点で痕跡を確認した。これは図化した杯蓋の約43%にあたり、I地区全体の重ね焼きの状態を正確に示していないが、おおよその傾向を表しているとみられる。I地区の杯B蓋は、表の右端の総括表から法量によるI・II種には大差がみられない。A種の痕跡は154点で全体の95.1%と圧倒的多数を占め、B種がわずか8点の4.9%にすぎない。A種の内訳はA I種が65.4%と主体をなし、A II種が11.8%の少ない割合である。

杯AはいずれもC II種の重ね焼きが口縁部よりに痕跡があり、杯Bでも蓋を伴わない口径10.0cm程（604・647・633）の大きさのものにC I種の重ね焼きが少数であるが確認される。

表16 I地区 杯蓋の重ね焼き割合

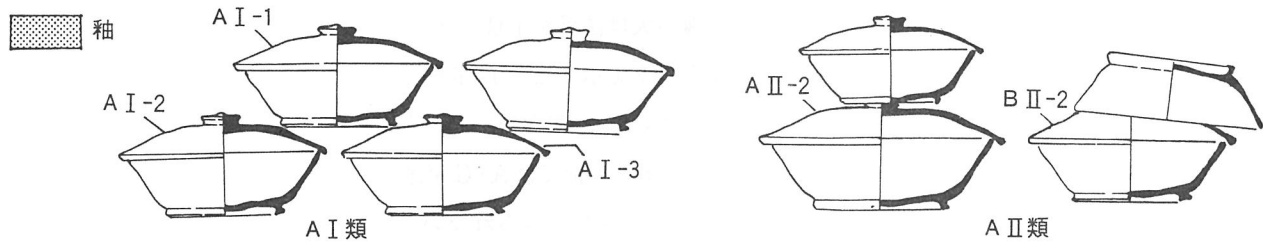
焼成法 法量	A						B					計	A	B
	I-1	I-2	I-3	II-1	II-2	不明	I-1	I-2	II-1	II-2	不明			
I種 (14.6cm以上)	15 28.8	12 23.1	1 1.9	5 9.6	8 15.4	8 15.4	—	—	3 5.8	—	—	52点 100.0%	49点 94.2%	3点 5.8%
II種 (14.3cm以下)	60 54.6	18 16.4	—	3 2.7	3 2.7	21 19.1	—	1 0.9	2 1.8	2 1.8	—	110点 100.0%	105点 95.5%	8点 4.5%
I・II種 計	75 46.3	30 18.5	1 0.6	8 5.0	11 6.8	29 17.9	—	1 0.6	5 3.1	2 1.2	—	162点 100.0%	154点 95.1%	8点 4.9%

### (3) 須恵器窯跡

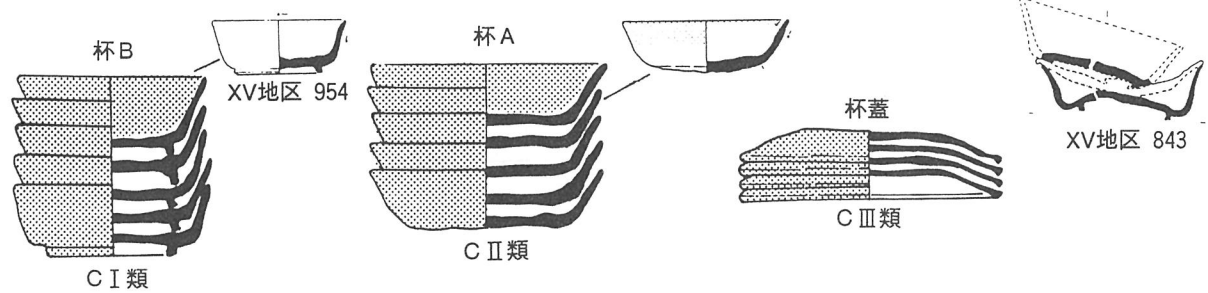
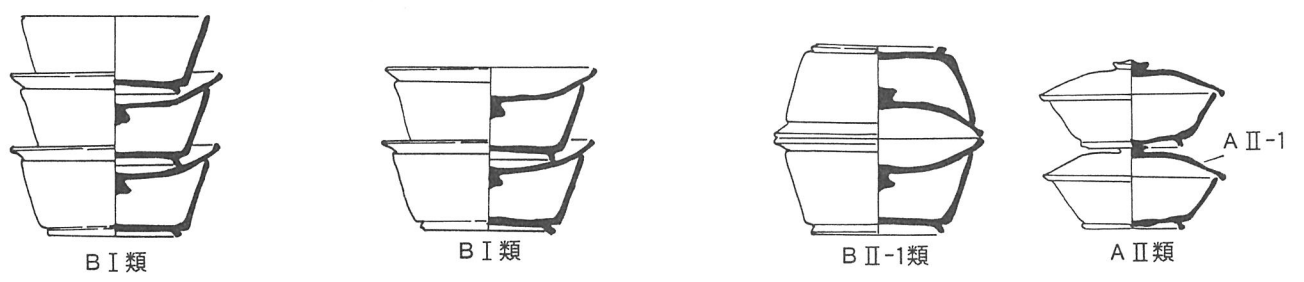
#### S-01須恵器窯跡覆土（第85図1~18）

杯蓋（1~4）3・4はI類で形態がcにあたる。3の外面にはつまみの横に直径6cm程の無釉の部分がある。同様の大きさの無釉の痕跡は126にもあり重ね焼きA II-2に類する。蓋の形態は1がa、2がbにあたり小さなつま

AI-1	AI-2	AI-3	AII-2	BII-2
外面				



BI-1	BI-2	BI-3	BII-1	AII-1
外面				
内面				



第67図 杯の重ね焼き

みがつく。杯B（5～9）は口径が12.3～10.0cmのⅡ類で、器高が5.2～3.7cmと器高に幅がある。身の形態は5がaに、7がbに、8・9の体部は立ち上がりが強く角張る。杯A（10～18）は口径が12.3～11.7cmの一法量のみで、器高は3.7～3.1cmである。形態は10～14は底部が少し尖るcで、15～18が平底のdにあたる。

#### S-01須恵器窯跡床面（第85図19～49）

床面は一面のみで、杯・横瓶・短頸壺・甕体部等の破片が出土し完形品はない。杯蓋（19～32）は口径が13.7～11.2cm、器高が2.5～3.0cmである。形態分類では19・20・29がaに、22・23・32がCに、24・31がdにあたる。口縁端部の形態では20～23・27がCに、24・31・32がDにあたる。重ね焼き痕では6点中の20・23・32等がAⅠ種であり、31がBⅠ-2種にあたり1点がみられる。杯B（33～36）は口径が12.8～9.8cmで、器高が4.7～3.7cmのⅡ種、形態がd・eである。外底面はヘラキリ後未調整か、または軽くナデを行う。杯A（37～44）は口径が12.7～11.7cmで、器高が3.8～3.2cmである。38・39・41がcで、底面をロクロナデ後中央を一回ナデている。37・42・43がdに、40がhにあたる。短頸壺48は体部下半にあたり、45は短頸壺の蓋で口縁端部が肥厚しない。外面全体に釉がかかり、壺と組み合わせて焼成している。また、46は横瓶の体部であり47は口縁部である。49は焼台であり、大きさは長さが15cm、幅が10cmで、厚さ3cmの丸みのある粘土の塊に二点の甕片を置き焼台として利用したもので、粘土には細かい砂粒を少し含み灰色をなし還元している。この他床面出土の20点程の甕体部片も焼台に転用したと思われる。

#### S-01須恵器窯跡舟底形ピット（第86図50～71）

出土の須恵器は細片が多く、最終床面の埋め戻した砂質土に含まれたものである。杯蓋（50～59）はⅡ類にあたり形態は52・57がaに、50・58がcに、56がdにあたる。口縁部の形態ではC<sub>1</sub>、C<sub>3</sub>が多くを占め、56のD<sub>1</sub>、58のF<sub>2</sub>は少なく各1点を図化した。杯B（60～63）は、60が口径15.0cm、器高6.0cmのⅠ種にあたる。61～63はⅡ種で形態がa・bで高台から立ち上がりの屈曲までが、61では間があり、63は直ぐに立ち上がる。稜椀64は口径12.7cmで底部を欠く。杯A（65～68）の形態は66・68がaで、70がbで、69がcで、65・67がh・iにあたる。

#### S-01須恵器窯跡焚口溝内（第86図72・73）

72は口径が10.7cmで、器高4.4cmの杯BⅡ種であり、高台から直ぐに立ち上がる。73は杯Aの形態cである。

#### (4) その他の遺構

##### S-03炭焼窯（第86図74～83）

76・78・82は前庭部の張り床から、80は煙出しから、他は前庭部覆土からの出土であり、S-01の灰層の遺物を含む。

杯蓋（74～76）は天井部が扁平なcで口縁部の形態は74・76はCで、75がEにあたる。杯Bの77はⅡ種で、78は高台が小径のcである。杯Aの79の形態はbで、80はcになる。81は直口壺で蓋を伴わない。82・83は小型の壺である。

##### S-04炭焼窯（第86図84～99）

86・88・92・93・95は前庭部の張り床から、89・90・91・97・98は煙出し近くからで、他は前庭部の覆土出土であり、S-01灰層の須恵器を含む。96は小型土師器の甕で下半をヘラ削りする。98・99は土師器甕で、98は外面に平行タタキを内面に同心円タタキを行い、99は内外面ハケ目調整をする。杯蓋（84～86）はⅡ種で84が口径14.2cmのcである。杯B87・88は口径11.3cmと10.6cmと小振りである。杯A89～91はcとdで、90は二次焼成品である。92は稜椀cであり、93・94は横瓶で、94は体部の径から大形に属する。95は口径8.5cmの短頸壺で口縁部に釉がかかり無蓋での焼成である。97は短頸壺下半をヘラ削りしている。

##### S-02堅型製鉄炉（第87図100～111）

100～106の須恵器は製鉄炉付近からの遺構検出面出土のもので、S-01灰層の須恵器を含む。104の杯蓋や100～102の杯BのⅡ種、103の杯A、106の横瓶の口縁部が出土している。

103～111は製鉄炉の炉壁であり、スサ入りの粘土で築いた炉壁の一部である。107は横幅28cmで高さ25cmの炉壁で

ある。内径は直径が60cm程で、厚さが最大で15cm程ある。内面にはガラス状の光沢面をもつ壁面が所々に二から三面合わせり厚さを増しており、指頭痕のついた補修用張り壁が観察できる。また、内壁の一部には茶褐色の弱い磁化を示す小さな鉄塊粒が付着している。108は炉壁の内面と断面の中程にガラス質に硬化した面があり、補修による塗り重ね痕跡がある。内面は高温を受けており、黒褐色をなし壁の厚さは最大8cmである。109は厚さ6cmで、外面はスサ入り粘土で表面は締まりが悪く砕け落ちる。内面は20cmのほぼ垂直な立ち上がりをなし、表面は指頭による整形痕があり暗褐色に硬く焼き締まる。110は内面が鑄で茶褐色をなし、一部に長さ2～3cmの木炭が付いている。111では内面が黒褐色をなし帯熱により表面が細かい鱗状の凹凸をしており、わずかに湾曲している。

#### S-16箱形製鉄炉（第87図112～115）

112・114はスサ入りの粘土による炉壁である。114は黒褐色のガラス質表面に1～5mmの細かい気泡がみられ、中心は灰白色をなし、外面が赤褐色に酸化している。また112の内壁面にも数cmの大きさの気泡が多数あり凹凸している。113は底面から側壁のコーナーにかけての炉内滓で、外面に小石混じりの砂質土がつく。表面がガラス質となり下部に鉄滓を含む。115も炉内滓で、表面は細かい砂鉄粒が付き凹凸がある。重さは113が1,324gで、115が1,651gである。

SK09（第88図116） 土師器甕体部片で、内面に放射状タタキを行う。

SK14（第88図117～119） いずれも杯Aの細片である。

SK15（第88図120～125） 121～124は杯Aの破片で口径が11.8cm程である。125は口径20cm程の甕の口縁部である。

SK16（第88図126～156） 遺構はS-04より新しいが、出土遺物はS-01の灰層に伴うものが主体である。

**杯蓋**（126～129） 126は口径が18.7cmのI種で形態がdをなし、重ね焼きではA I-2種にあたる。127～129はII種で口径が12.4～12.8cmであり、127・128の形態はbで、129がcにあたる。杯B（130～138）は130が口径16.9cmで、器高6.0cmのI種b-1である。135・136は口径が12.3cmと12.6cmで器高3.5cmである。また、132～134、137・138は口径が10.3～9.7cm、器高4.5～3.5cmであり、底部からの立ち上がり角張る形態のd・eである。稜碗131は口径11.0cmのcである。杯A（139～145）は141がa、142がb、139・140がc、145がiの各形態にあたる。

**短頸壺**（147～152）は口径11.0cmと8.8cm程の二法量があり、丸く膨らむ体部上半に二～三条の沈線を巡らせている。体部下半は一部ヘラ削りを行う。直口壺（151・152）は体部上半が少し球状をなし内外面にカキ目調整し、152では下半をヘラ削りする。長甕（155）は本来、土師器の甕であるが還元焼成をしている。口縁部は面取りし、体部上半にカキ目をし、下半にタタキを行う。153は土師器の長甕の体部片であり、154・156はロクロ成形をした土師器の小形甕で154の法量は口径が11.0cmで、器高が10.0cmを測る。

#### (5) S-01須恵器窯跡灰層（第89図157～第124図1235）

灰層からは、窯跡で焼成された各種の器種がかなり広範囲にわたって出土しており、復元した甕の接合例からみるとかなり距離を隔てた地点に分散して廃棄されていたことがわかる。

#### 杯蓋（第89図157～第93図471）

法量はI種とII種に二分されI種が約2割、II種が約8割を占める。I種（57～238・241）は、口径が19.7～15.0cmで、器高が4.1～2.1cmとしたが、第68図の法量図では、各口径の分布が全体にわたって存在する。しかし、16.5cmと18.0cm代に少し多くなる傾向がある。また、II種（231～471）は、口径が14.8～11.0cmで、器高が4.0～1.8cmであるが、法量では口径が12.0～14.0cmで、2.0～3.5cmにかけてのものに集中し、それ以外では減少している。

杯蓋の形態は第65図による4つに分類したが、本書に図を掲載したその割合は表17のとおりである。全体ではcが35.6%、aが31.6%、dが22.0%、bが10.8%の構成比率である。I種の形態ではdが37.0%、bが8.2%であり、

表17 灰層出土杯蓋の形態別割合

法量等／形態		a	b	c	d	計
I種	15.0cm以上	17	6	23	27	73
II種	14.9～13.0	36	16	53	33	138
II種	12.9～11.0	49	13	39	11	112
合計		102	35	115	71	323
割合 (%)		31.6	10.8	35.6	22.0	100.0

II種では口径13～14cm代が全体の比率と大差のない傾向を示し、11・12cm代の形態ではaが43.8%と逆に高く、dが9.8%と少なくb・cが全体の割合に近い数字となっている。

I地区出土の口縁部の形態は多種多様であるが、比率は表15に示した。形態比率区分欄の上段は口縁部を36等分した各個体の集計であり、下欄は確認できた個体数を表している。I・II種を合わせた全体の割合は、Cが70%と最も多く、次いでD・Eが11～13%、Bが3%、Fが1.7%、Aが1%未満の順に非常に少なくなっている。またI種(大)と全体とを比較すると、I種の比率はCが52.7%と少なく、逆にDが20.3%と多くなりBが8.4%、Fが4.1%の割合であり殆ど大差がない。同様にII種の比率は、Fが1.2%と少なく他の区分は全体の割合に近い数値を表している。

**杯B (第93図472～第97図665)**

**表18 杯B II種の形態割合 (図掲載分)**

法量は口径によりI・II種に区分され、I種が12.3%と少なくII種が87.3%と多い。I種(472～524)は口径が17.8～15.0cmで、器高が7.8～4.2cmの大きさであり、体部に沈線を巡らす有文と沈線を

口径/形態	a	b	c	d	e	f	計
14.7～12.0cm	23	10	12	5	1	3	54
11.9～ 8.7cm	17	18	12	34	24	0	105
合計	40	28	24	39	25	3	159
割合(%)	25.2	17.6	15.1	24.5	15.7	1.9	100

刻まない無文のものがある。I種の図掲載分は53点を数え、その内体部に沈線を刻み有文とするのは10点であり、全体に占める割合の18.9%にあたる。II種は口径が14.7～8.7cmで、器高が4.5～3.6cmの大きさである。第68図の128点による集計では、口径が10.5～13.0cmで、器高が3.3～4.7cmにかけてのものに集中している。口径が13.1～14.7cmのものは3点にすぎず、口径が10.0cm以下も10点と数少ない。

**表19 杯B 高台の位置 (図掲載分)**

口径等/形態		イ	ロ	ハ	計
I種	15.0cm以上	11	33	9	53
II種	14.7～12.0	36	16	53	105
II種	11.9～ 8.7	49	13	39	101
合計		96	62	101	259
割合(%)		37.1	23.9	39.0	100

杯Bの形態分類では、I種のaが8点でbが45点で84.9%の比率であり、無文と有文の割合はaが4点ずつであり、bでは無文が39点(73.6%)であり、有文が6点(11.3%)の割合である。II種では第65図により6種の形態に区分している。12.0cm以上と以下に分けてみると、d・eの割合に大差があり、他は大きな隔たりはない。また、底部高台の取付け位置には3種がある。II種のbのように高台から直ぐに口縁部に移行するもの(イ種)と、aのように底部と口縁部の屈曲部から少しだけ内側に高台が付くもの(ロ種)、cのように高台が底部のかなり内側に入って付けられるもの(ハ種)がある。I種ではロ種が62.3%と高く、イ・ハ種が20%前後を占める。II種では口径が12.0cm以上のイ・ロ・ハ種の各々の割合が34.3%、15.2%、50.5%の比率でハ種が主体を占める。しかし、口径が11.9cm以下ではイ・ロ・ハ種の各々の割合が48.5%、12.9%、38.6%となり、イ種が主体を占め、イ・ハ種の割合が前者と逆転した値である。ヘラ記号は外底面に「×」が刻まれており、形態では540のb、559・582・596のeや583・593のロにみられる。形態dの579の外底面には「-」の記号がある。また、蓋を有しない杯Bの重ね焼き(第67図C I類)では、10.0cm程の小さな口径をもつ604・647・663に釉の痕跡が残る。

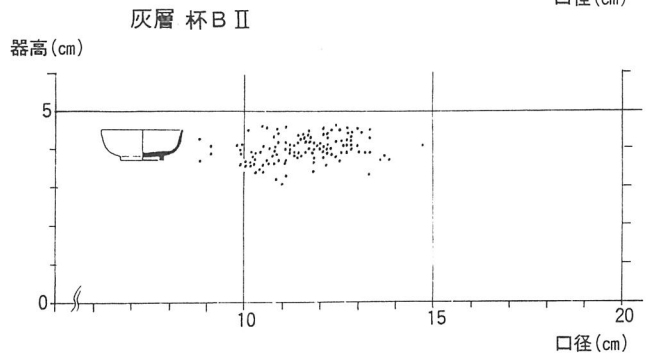
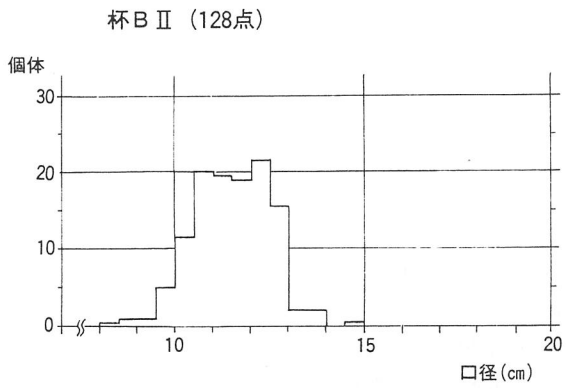
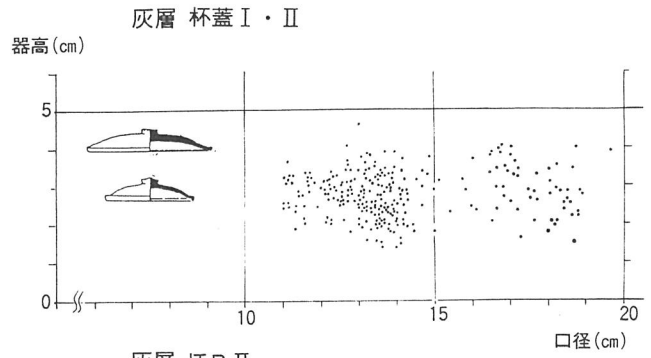
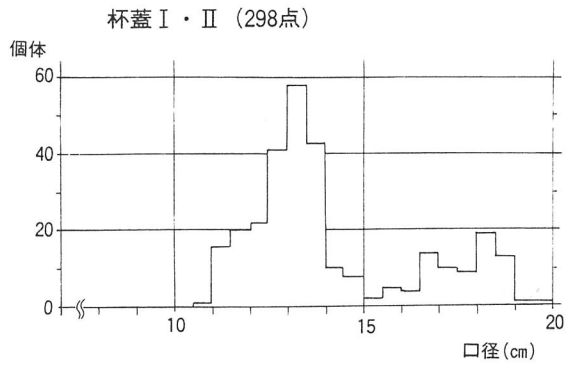
**杯A (第98図724～第103図996)**

**表20 杯Aの形態割合 (図実測分)**

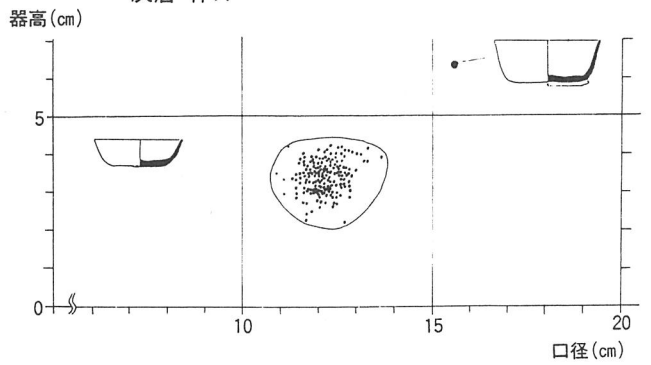
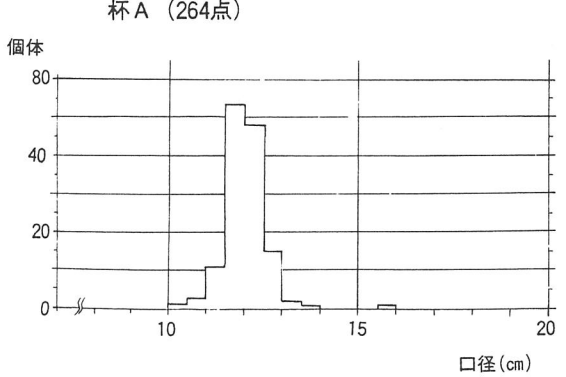
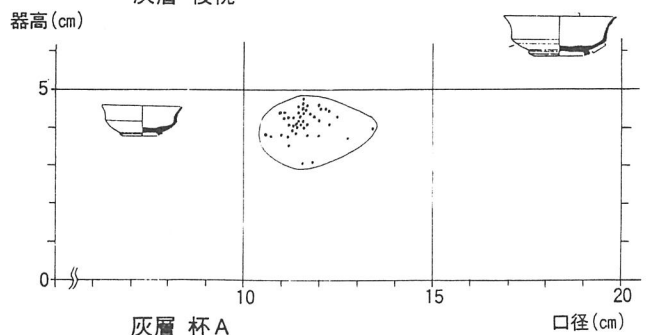
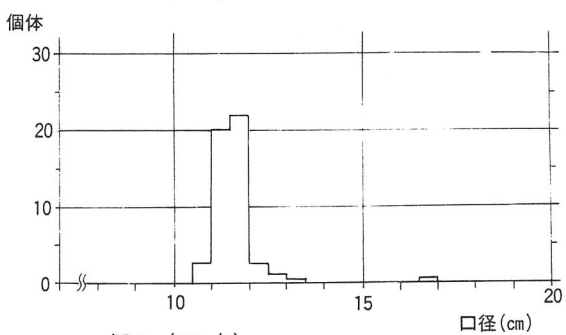
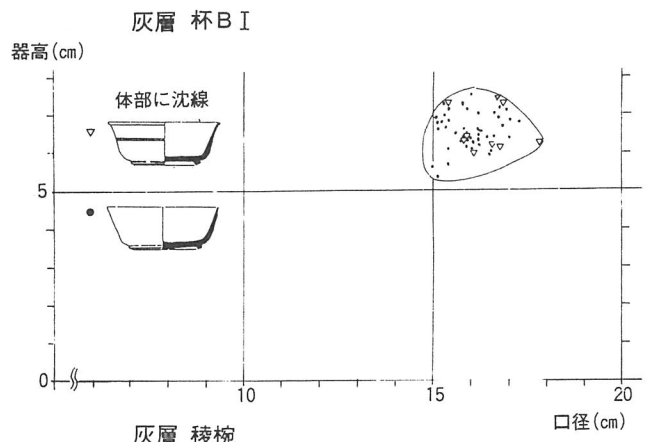
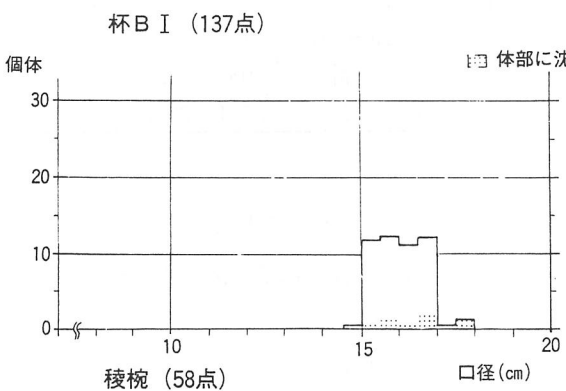
杯Aは口径が13.3～11.6cmで、器高が4.1～2.6cmと法量に幅があるが、実測した331点では口径が11.5～12.5cmの大きさに

形態	a	b	c	d	e	f	g	h	i	計
数量	38	34	96	94	40	4	1	19	5	331
%	11.5	10.3	29.0	28.4	12.1	1.2	0.3	5.7	1.5	100

約7割が集中することからも一法量とみなされる。第65図の形態分類では10種類に分けた。gの724は口径15.6cmで、器高6.3cmの大きさに1点のみであり、底部をヘラ削りし、杯B I種の高台を欠いた形態と似ている。同様にhは杯BのII種に体部の形態が似ている。iで底部をヘラ削りするのは1点のみである。jは器厚が厚く、底部全体を細かくヘラ削りし希少な例にあたる。杯Aではc・dが約30%ずつを占め、次いでa・b・eがそれぞれ10%余りの割合で



☐ 体部に沈線



第68図 I地区 杯法量図



ある。cの外底面にはヘラ記号の「×」を刻む例があり、eの外底面には「×」「一」のヘラ記号があり、内底面にも「一」の記号を入れているものがみられる。fは口縁端部に沈線を入れている。985・954と990・991の4点は口径が11.7～12.3cmで、器高2.9～3.0cmの大きさである。杯Bのfである537～539の3点は、口径12.2～13.6cmで、器高4.3cmの大きさで前者より少し大きいが同様の形態をしている。

**稜椀** (第97図666～第98図723)

稜椀の666は、口径が16.7cmで器高6.0cmの大きさをし、口縁端部が面取りされたⅠ種と口径が13.0～10.7cmで、器高が4.5～3.5cmの大きさのⅡ種がある。Ⅰ種は1点のみで、

表21 稜椀の形態割合 (図掲載分)

形態	Ⅰa	Ⅱa	Ⅱb	Ⅱc	Ⅱd	Ⅱe	計
数量	1	1	1	52	6	2	63
%	1.6	1.6	1.6	82.5	9.5	3.2	100

Ⅱ種は62点を数える。Ⅰ種と同様に幅4mmの面取りした口縁端部は667のaの1点のみであり、高い高台をもつ668のbも1点である。この他口縁部に沈線を引くeも2点と少ない。主体を占めるc形態は全体の82.5%と高い割合を示す。cの中で体部下半をヘラ削りするものは19点を数え37%に相当する。また、体部の屈曲部を突出気味となるdが9.5%の割合で体部下半のヘラ削りは2点であり約3割にあたる。なお、胎土に砂を多く含むc・dは、体部下半をヘラ削りするものにほぼ一致している。

**鉢等** (第103図997～1002)

997～1000は、口径が9.8～11.6cmで器高3.0～3.5cmの大きさで、997は内面に釉がかかっており、998は口縁部の内面から外面体部にかけて釉がかかっている。形態は焼台とされているものに似ている。

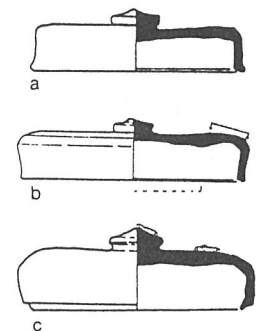
1001は、体部の一部しかないが図上で法量を復元した。口径が17.6cm体部最大径が18.1cmで底部を欠くが尖り底になると思われる。口縁部と体部中程に沈線を巡らせる。1002は甑の底部透かし部にあたとみられる。長さは13.9cmで、両端の幅は2.2cmと1.8cmである。厚さ1.2cmの一面には同心円タタキを残して、一面はヘラで入念に整形している。

**高杯** (第104図1003～1006)

杯部は口縁部が低く立ち上がる器高の低い盤状をした形態で、口径が21.0～22.8cmで、器高が9.3～12.3cmの大きさである。内面は多方向のナデを行い、外面をヘラ削りする。大きく開く脚端部径は、11.5～12.6cmの大きさで脚高は6.7～9.3cmで脚端部は下方に折れ先端が先細る。1004・1006の脚部内面には絞り目がのこる。

**壺蓋** (第104図1010～1024)

短頸壺の蓋の形態には、三種類がある(第69図)。aは口縁端部が外方に向けて少し肥厚するもの。bは口縁端部が内傾または肥厚するもの。cは頂部から口縁部にかけて丸く折れ、口縁部の先端が内側に向けて先細るものである。a・cは各4点で、bは7点を数え全体の43.8%にあたる。法量は、1010の口径15.8cmが最大で1点のみであり、口径が12.4～10.6cmの大きさが14点と多く、つまみを付けないdの1019が口径8.3cmで最小の大きさのものであり、短頸壺には三種類の法量がある。蓋の天井部には扁平なつまみを付け、1023には細い沈線を巡らせており、釉の観察では外面のみに釉がかかるもの8点があり、壺と組み合わせて焼成している。



第69図 壺蓋の形態

**短頸壺** (第104図1007～1009、1025～1028、第105図1030～1040)

短頸壺の大きさは口径が10cm前後で器高が18.0cmであり、容量が3.4ℓ程のⅠ類(1007・1008)。口径が8.2cm前後で器高が16.0cmあり、容量が2.5ℓ程のⅡ類(1009)。口径が8.5cm前後で、器高が14.0cm程あり、容量が1.4～2.0ℓのⅢ類(1028・1032～1039)。口径が8.0cm前後で器高が10.0cm程あり、容量が0.8ℓ程のⅣ類(1040)がある。口径は8～10cmと大差がなく、器高や体部最大径により容量差が表れる(第70図)。口縁部の形態では、短く立ち上がる口縁部の幅が1.5～2.0cmと狭く、端部を丸くして納めるものが殆どを占めるが、1035のよ

うに面取りするものもある。また、体部の形態では最大径が上半にあって、丸く膨らむものと体部最大径近くが角張るもの（1028・1036）、体部の中程に最大径をもち体部が球状をなすもの（1032・1035・1037）がある。

体部の上半には一条または二条一組の沈線を巡らせるものが多く、体部の下半は回転によるヘラ削りと回

転によらないヘラ削りを行っているものがある。口縁部の釉の観察では、焼成時に被蓋が確認できるものが1031のみで、口縁端部まで釉がかかっていたり、あるいは内底面に釉のかかっていることから無蓋の状態で窯詰めし焼成している。

**長頸壺**（第105図1049～1051、第106図1052～1066）

1050は口径が10.0cm、口頸部までの長さ8.7cmで体部との接合に段を設けている。1049・1052は体部上半が丸く膨らむが、体部の肩部と体部下半との接合部には一条の沈線を入れ、1050・1051では角張り、1049は丸く膨らんだ体部をなしている。1049では体部下半をヘラ削りし、内面にカキ目が残る。1050の体部下半に平行タタキ調整を行い、他の部分はロクロナデをしている。小型の長頸壺の口頸部としては、1063・1066があり、1066では中程に沈線を巡らし、体部とみられものに1070がある。体部は丸く膨らみ、頸部がしまり三段構成で作っている。1053・1057は口頸部を欠いて形状は明らかでないが、体部が前者よりも小さく器高も低くて、器の断面も厚く違った口縁部が付くのかもしれない。

**細頸壺**（第106図1056）

1056は口径が8.1cm、口頸部の長さ6.7cm、器高が20.3cmを測り、カキ目を付けた丸い体部の最大径が18.6cmの大きさをもつ。体部には甕の小破片が溶着し、下半に平行タタキを残す。口頸部と体部の取り付け方法は三段構成で作っている。

**広口壺**（第106図1054・1055、1058～1062、1073・1074）

完形の1054は口縁部が大きく開き口径16.5cmで、器高が19.2cmの大きさである。体部の屈曲部は角張り沈線を一条入れている。体部の下半には平行タタキが残るほかは、全体をロクロナデする。1055～1059の口縁端部は上方へ三角状に尖らせている。口径が1059～1062は14.8～15.8cmの大きさであり、1059と1062の口頸部中程には沈線を加えている。1055は頸部から口頸部の立ち上がりは直立気味であり、体部上半の屈曲は1055に比べ丸く二条の沈線を配し、体部下半の外面をヘラ削りしている。

なお、1074は球形の体部をした広口の壺であり、上記の広口壺とは別系統の形態をした壺である。1073は口頸部が外反するもので体部との接合は三段構成となり、1074は口頸部が外傾し体部に間隔を置いて三条の沈線を巡らせている。

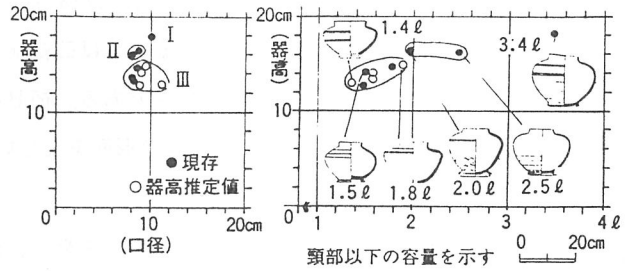
**小型の壺**（第106図1067～1072）

これらの壺は全形が不明確な小型の壺である。1067は丸みのある体部上半の破片であり二条の沈線を引く。1068の頸部は細くしぼり込まれ、体部上半の屈曲部が角張っている。1070は頸部が三段構成をなし、1056の細頸壺の体部の形態に似ている。1071は頸部が大きく広口壺の体部に形態が似ており、1072は広口壺の口頸部である。

**直口壺**（第107図1075～第110図1119）

口頸部幅が1～3cmと短く立ち上がり、体部が丈長をした平底の蓋を伴わない壺である。第71図の左側に形態分類を示した。

aは体部の形態が少し丸みをもち、内外面をカキ目調整している。b～dは体部が基本的に丈長の形態をしているが、形態差がかなり多岐にわたる。bは体部外面の上半から中程または下部にかけ



第70図 短頸壺の法量(左)と容量(右)

表22 直口壺の形態割合

形態	a	b	c	d <sub>1</sub>	d <sub>2</sub>	計
数量	2	12	7	7	9	37
%	5.4	32.5	18.9	18.9	24.3	100

カキ目を行うもの。cは体部外面の上半をロクロナデするもの。dは体部上半をロクロナデし間隔をあけて一〜数条の沈線を巡らすものであり、体部上半の屈曲部が丸くなるd<sub>1</sub>種と体部上半の屈曲部が角張る形態のd<sub>2</sub>種がある。容量も3.7〜11.4ℓと幅がある。

**直口壺 b** 1075〜1077は口縁端部がわずかに肥厚すること、体部の調整方法と底部近くのタタキが同じ種類の原体であること、同様の胎土で焼成・色調が類似すること等共通点が多い。容量は5.7〜7.0ℓある。1083と1084は口頸部の幅や体部形態に相違がみられるが、ハケ目や外面タタキ具の原体による器面調整法、胎土、焼成の色調が類似している。容量は5.9ℓ、7.4ℓである。同様に1088・1097も法量・形態、カキ目、タタキ具、当て具原体等に共通点がある。この他bには1080・1082・1085・1089・1090がある。器面調整には、ヘラ削り、ハケ目、カキ目、タタキ等の組み合わせがみられる。

**直口壺 c** cには1078・1079・1086・1091・1094〜1096がある。1095・1096は体部の上半にロクロナデを行い、下半はタタキ調整を行う。1078・1079・1086は体部上半にカキ目を行い、下半はタタキ後にヘラ削りする。器高は25cm前後で、容量は復元できた三個体では3.7〜4.5ℓの狭い枠に収まる。

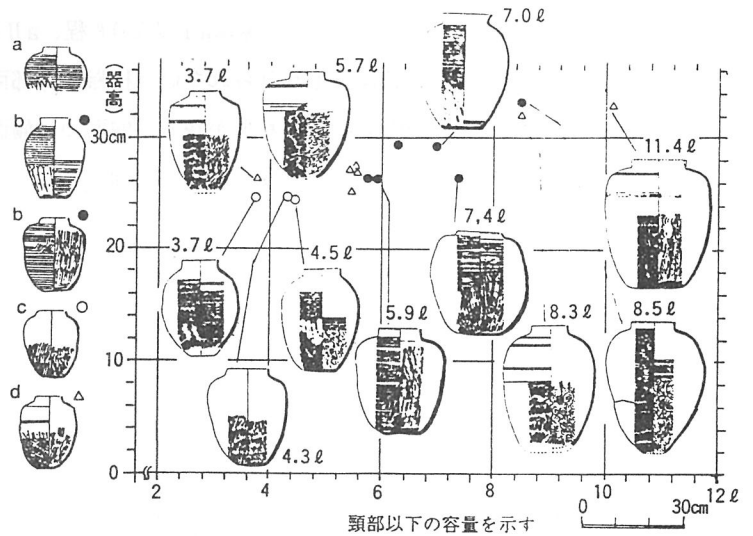
**直口壺 d** d<sub>1</sub>種には1107・1109・1110・1112・1117・1118があり、口縁端部が丸く収まる。S-03出土の81と1109は上半屈曲部に一条の太い沈線を引く。1110・1112とは法量差はあるが上半がなで肩をした同様の体部形態をしている。また1118は上半部が水平近くに張り出し底部が漏斗状に小さくなる。d<sub>2</sub>種には口縁端部が肥厚し角張り内傾し立ち上がる1081・1108・1111・1113〜1116・1119がある。1114・1115・1119は外内面の調整が同じ種類を用い、焼成による色調や胎土等が似かよる。容量に最小3.7〜5.7ℓ、8.3ℓ、最大11.4ℓと四種がみられる。

**直口壺 e** (第108図1092・1093、第109図1098〜1106)

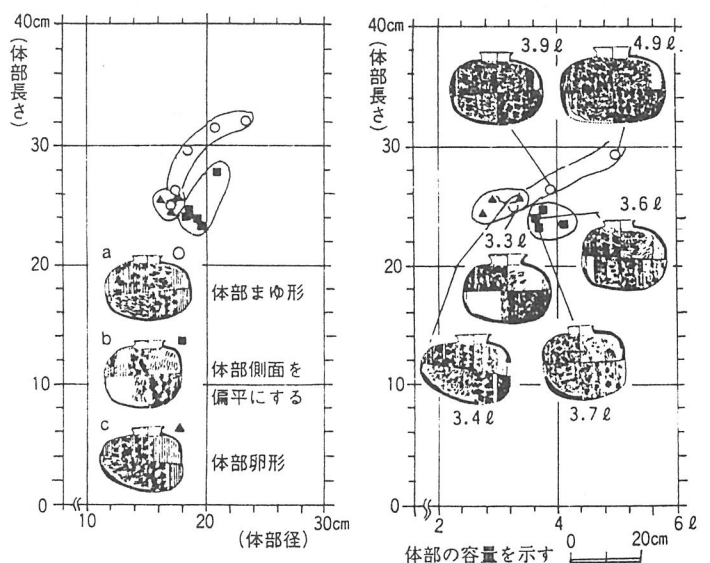
口縁端部が短く「く」の字状に外反し、体部は全形を示す1092からも卵形をした甕の形態であるが、器面調整法からみて壺とした。体部の調整は上半が内外面にカキ目を施し、下半はタタキ調整を行っている。口径は12.6〜20.7cmとかなり法量差があり、角張った口縁端部をなし口縁部にもカキ目を伴ったり、あるいは1100・1103では体部内面上半にロクロナデのみの場合のものもある。便宜的に直口壺に一応含めておく。

**横瓶** (第111図1120〜第113図1136)

横瓶の体部形態は、a・b・cに分類できる。aは全体がまゆ状の左右対称形で側面が半球状をなすものである。体部の長さは、aⅠが29.8〜32.0cmのもの、aⅡが21.9〜26.0cmのもの。bは体部側面を平坦にするた



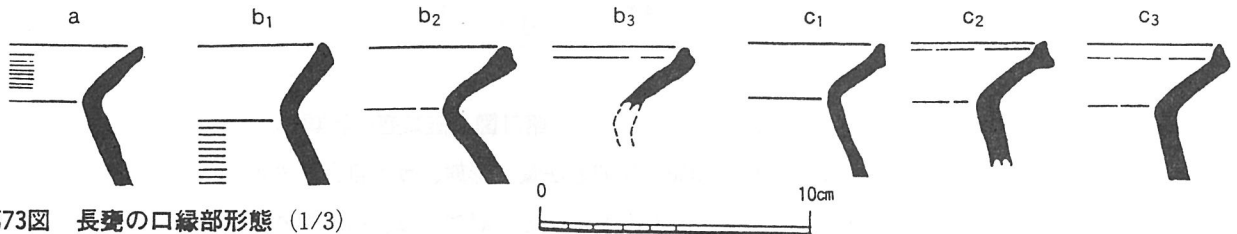
第71図 直口壺の種類(左)と容量(右)



第72図 横瓶の法量(左)と容量(右)

めに、長さが短く寸詰まりとなるもの。cは体部の直径が異なり一側面が小さく、反対側面の直径を大きくした直口壺の体部の形態に似ている。各形態の容量はaⅠは5.0ℓ程、aⅡは3.2~3.9ℓで、bは3.7~4.1ℓである。cが2.8~3.4ℓの大きさでb・cの容量に大差がみられない。横瓶の体部両側面には、直径5~7cm程の閉塞板をあてる。体部の外面はタタキ調整を行い内面に当て具痕が残る。内面の一側面にはロクロナデ、またカキ目で当て具痕を消し、もう一方側は閉塞際の当て具痕にひだ状のしぼり目が細かく入り、側面を円形の粘土板で塞ぎ外面を同心円のカキ目調整を行う。

なお、しぼり目を留める図左側面の1120・1122・1128・1130の外側には、同心円のカキ目中心から終了時に抜いた幾筋もの条跡がみられる。しかし、反対のカキ目側面には痕跡がない。口縁部は体部中程に穴をあけ取り付けるが、aでは口頸部までの幅が4cm程で外反する。bでは口頸部が直立して幅が2cm程と狭い。cでは口頸部が直立、または外反し、幅はaと似かよる。なお、1134・1135の2点には口縁部近くにヘラ記号の「+」が線刻している。

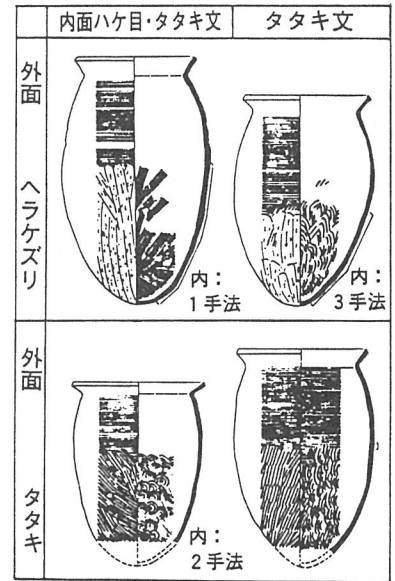


第73図 長甕の口縁部形態 (1/3)

長甕 (第113図1137~第115図1157)

口縁部の形態には三種類ある (第73図)。aは口縁端部が丸くやや細くなるもの (1141・1149・1152・1153)。bは口縁端部が丸く斜め上方に面取りするもので、b<sub>1</sub>は口縁端部が肥厚しているもの (1137・1138)、b<sub>2</sub>は口縁端部で少し肥厚するもの (1139・1142)、b<sub>3</sub>は内面に弱い稜の入るもの (1144・1154)。cは口縁端部が外傾して上方に少し引き上げられるもので、c<sub>1</sub>は内面に口縁端部が少し角張るもの (1143・1151)。c<sub>2</sub>は口縁端部が両側に肥厚し内面に弱い稜の入るもの (1155)。c<sub>3</sub>は口縁端部を上方に引き上げるもの (1140・1156) である。口縁部の形態割合は、表23のようにaが4点と少なく21.1%であり、bが8点で42.1%、cが7点で36.8%と多い。

器面の調整方法には、外面の上半にカキ目を行い、下半をヘラ削りするa手法と、下半をタタキを行うb手法がある (第74図)。内面下半はハケ目のみの1手法、内面当て具痕の上にハケ目を施す2手法、内面当て具痕だけの3手法が存在する。aでは1手法と2手法が各1点ずつあり、bでは2手法が3点と3手法が



第74図 長甕の器面調整 (1/11)

5点の割合である。なお、1157は胎土に砂粒を多く含んだ平底の甕で、1点の出土である。全体の約半分が残存し口縁部が少し変形している。調整は内外面にカキ目を行い底部側の狭い部分をヘラ削りする。内面下半はハケ目を入れ内底面をナデている。容量を示せる4点では5.4、5.7、6.2、7.5ℓと量に幅がある。

表23 長甕の形態割合 (実測図による)

形態	a	b <sub>1</sub>	b <sub>2</sub>	b <sub>3</sub>	c <sub>1</sub>	c <sub>2</sub>	c <sub>3</sub>	計
数量	4	4	2	2	4	1	2	19
%	21.1	21.1	10.5	10.5	21.1	5.2	10.5	100

甕A (第115図1158~第119図1171・1175~1177、第124図1229~1231・1235)

甕Aは長い頸部が外反して立ち上がるもので、口縁部の形態により更に区分できる。aは口縁端部を外方に引き出し下方に2cm程の幅で肥厚させたもので、肥厚部中程をくぼませたa<sub>1</sub>と平たくしたa<sub>2</sub>がある。bは口縁端部を丸く納めたもので外面に狭い段を付けたb<sub>1</sub>と、内面に狭い段を付けたb<sub>2</sub>がある。Cは更に口縁部を外方に引き出すもので、

内面に稜を持つc<sub>1</sub>と口縁端部を下方に垂下させるc<sub>2</sub>、口縁端部を大きく斜めに引き出すc<sub>3</sub>、口縁端部をわずかに肥厚したc<sub>4</sub>がある。この他に波状文を一、二条加え飾るものが1/3にみられる。甕の口径が50cm程の形態は1235の1点でa<sub>1</sub>にあたる。口径が40cm程の18点の形態はaが7点、bが3点、cが9点の数量があり、口径が30cm代ではaが2点と少ない。全体の割合は表24のとおりであり、a・cが各9点でaが42.8%、cが42.9%、bが3点で14.3%の比率である。

表24 甕Aの形態割合(実測図による)

形態	a <sub>1</sub>	a <sub>2</sub>	b <sub>1</sub>	b <sub>2</sub>	c <sub>1</sub>	c <sub>2</sub>	c <sub>3</sub>	c <sub>4</sub>	計
数量	7	2	1	2	1	3	3	2	21
%	33.3	9.5	4.8	9.5	4.8	14.3	14.3	9.5	100

頸部以下の体部容量の最大は甕A Iの1235である。甕は焼き歪みがあるが口径が47.2cmで、器高が85.8cmの260.0ℓの大きさに復元した状態で43.8kgの重さを計る。甕A IIは1159・1162・1165の容量が120～151.4ℓと計算でき19.1～28.3kgの重さのものである。甕A IIIは1169・1158・1176の容量が91.5～116.0ℓのもので、18.3～23.0kgの重さがあつて断面が少し厚い。甕A IVは1168・1170の容量が68.0ℓと76.4ℓであり、17.8～23.3kgの重さである。甕A Vは最小の法量の1177で容量が33.9ℓであり、重さが11.3kgである(表37、141ページ参照)。

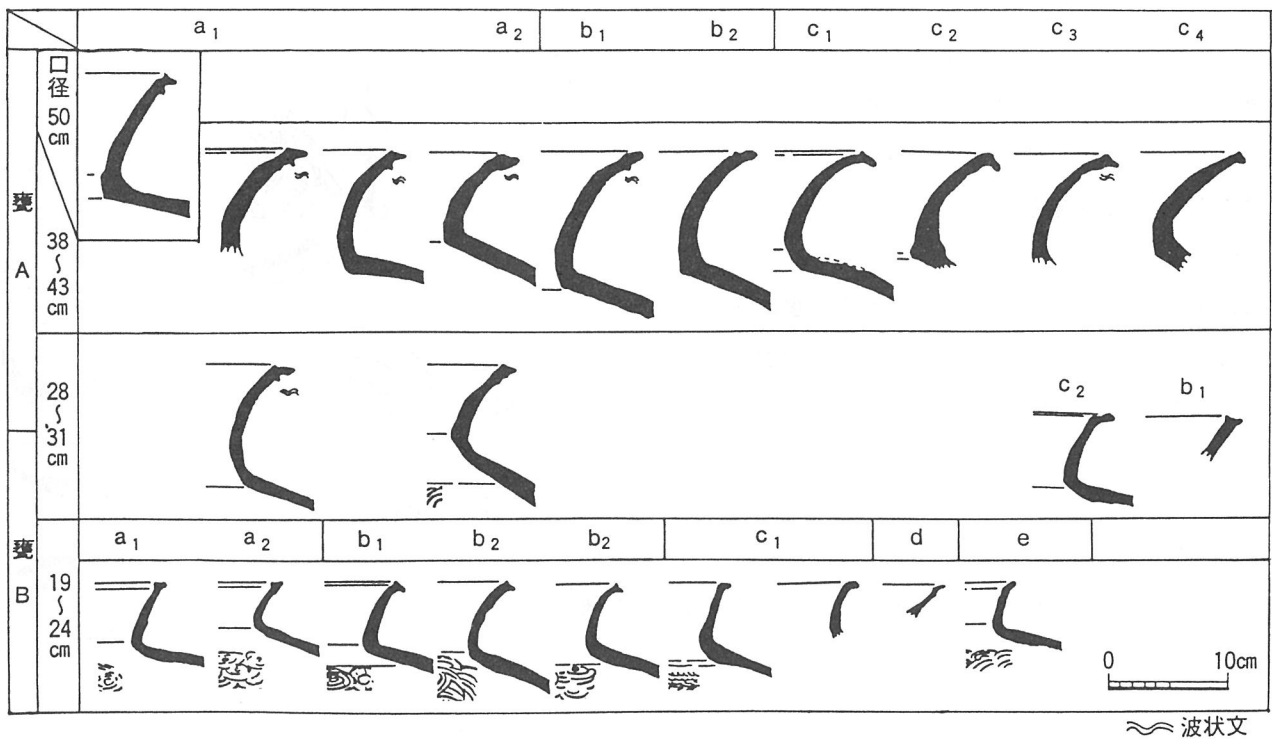
甕B (第119図1173・1174・1178～第122図1201、第124図1232～1234)

甕Bは幅が5cm前後の短く外傾し立ち上がる口頸部をもつ甕である。口縁端部の形態により次のように区分できる。aは口縁端部が水平または水平に近く、a<sub>1</sub>は肥厚し内面に稜が入るもの。a<sub>2</sub>は肥厚した口縁端部が外面に少し垂下するものである。bは口縁端部が外傾するもので、b<sub>1</sub>は口縁端部が両側に肥厚するもの。b<sub>2</sub>は口縁端部が外側に肥厚するもの。cは口縁端部を外側に張り出すもので、c<sub>1</sub>は張り出しの少ないもの。c<sub>2</sub>は大きく張り出すもの。dは口縁端部が有段に張り出すもの。eは口縁端部が内傾するものである。

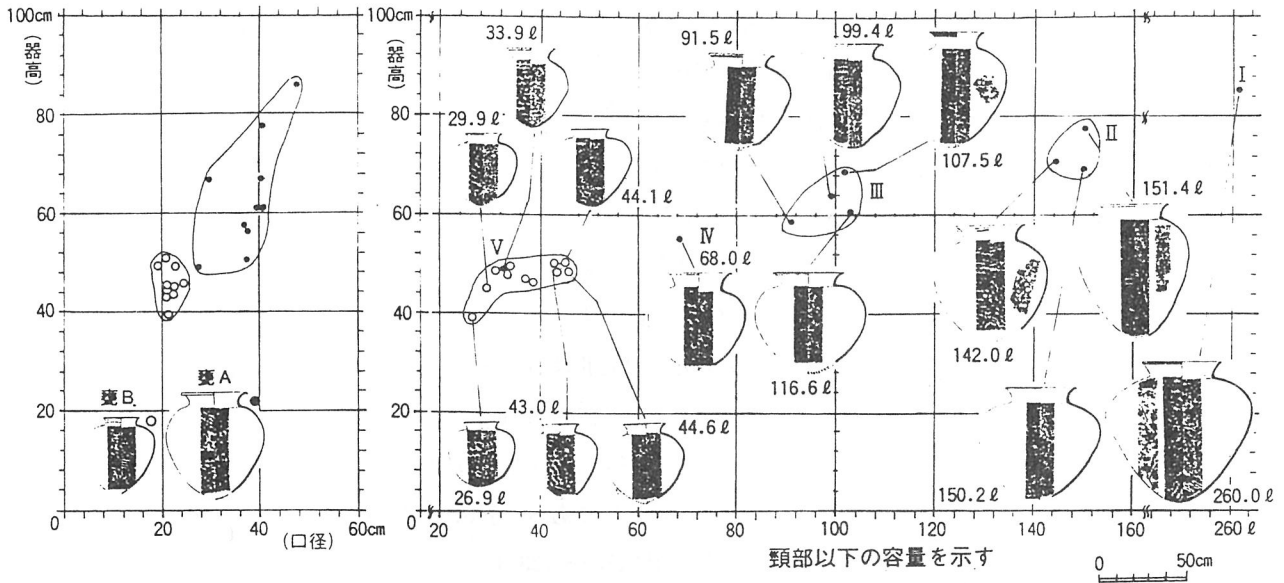
表25 甕Bの形態割合(実測図による)

形態	a <sub>1</sub>	a <sub>2</sub>	b <sub>1</sub>	b <sub>2</sub>	c <sub>1</sub>	c <sub>2</sub>	d	e	計
数量	1	12	5	5	2	2	1	4	32
%	3.1	37.5	15.6	15.6	6.3	6.3	3.1	12.5	100

法量は口径が20cm前後が29点と主体を占め、口径が30cm代が2点と少なくb<sub>1</sub>とc<sub>1</sub>が各1点である。復元した甕B Iでは口径が19～24cmの範囲に集中し、器高が39～51cmと大きさに幅がある。この容量は26.9～44.6ℓと約1.7倍の格



第76図 甕の口縁部形態



第77図 甕の法量(左)と容量(右)

差がある。甕の重さは7.9～9.4kgと厚さの薄いものが多い(表37)。しかし口径が30cm代の甕B IIは復元していないが、甕A IVの容量にほぼ相当するものと推測される。

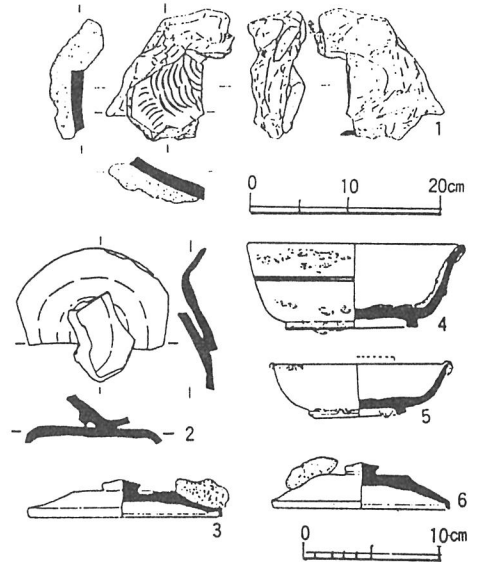
(6) 灰層等出土の土師器(第122図1202、第123図1203～1223)

1202はS-18の長方形箱形炉の鉄滓層が存在した谷部のX21 Y29区から出土した。口径が34.5cmで、器高が11.6cm程の大きさの鉢であり、体部外面の下半はヘラ削りし、他の部分はロクロナデをしている。

1223は底部外面をヘラ削りした小形甕であり、他の土師器はいずれも長甕である。1203は図上で全形を復元したものである。大きさは口径が19.7cmで、器高が31.0cmとなる。環元焼成された口縁部形態(第73図)では、 $b_1$ にあたり体部の外面下半をヘラ削りし、内面にカキ目調整をする。1204～1207は口縁部の破片であり、1204は口縁端部が肥厚し9世紀に含まれる。体部破片では1210～1212の外面タタキ目文がHaであり、1213・1224・1219がHbのタタキ目、1216～1228・1221がHcのタタキ目を用いている。内面の当て具痕では1208～1213等にDaのタタキ目文があり、1213・1220等ではハケ目が併用する。1216～1218は同一個体の体部片で内面に放射状のタタキ目がみられる。

(7) 焼台(第78図)

窯跡床面には特別の配列はなかったが、甕の体部片や横瓶の破片などが焼台として散在していた。I地区出土の焼台は、焼き損じた杯A・B、陵椀、杯蓋が利用されている。これらの二次焼成を受けた破片の器面には砂粒や窯滓が付着して図の中にも多く確認できる。一部例を示すと1は甕片に粘土をのせたもの。2は杯A・Bの破片を用いたもの。4・5は杯Bの底部を上向きにしたもので、4は3/4の破片であり、5は完形品を用いている。3・6の杯蓋も外面に瘤状の窯滓で傾きを調整し破損品を上向けて焼台に再利用している。



第78図 I地区 焼台

## (8) ヘラ記号 (第79図)

ヘラ記号は焼成前の生乾き時に、ヘラ先で工人が付けた簡単な記号である。I地区からは食膳具の杯Aに111点(84.8%)、杯Bに16点(12.2%)、杯蓋内面に2点(1.5%)と貯蔵具の横瓶に2点(1.5%)の合わせて131点が確認された。杯Aでは内底面に「一」が80点、「¥」が3点、「×」が1点記され、「一」では刻まれる太い線のものが20点あり、他に細い線刻のもの二者がある。杯Aの外底面には「×」が23点と「キ」が1点あり、側面には「×」の1点のみである。杯Bは外底面に「一」が12点と「×」が4点で書き込まれる。杯蓋は頂部内面に「×」と「一」の各1点がある。記号の種類別では「一」が85点(65.9%)と最も多く、次に「×」が38点(29.5%)と合わせて123点(95.3%)を占めている。

出土数との比較では、杯Aの個体確認数が1363点であり、この内109点にヘラ記号があつて全体割合から見るとわずか8.0%にあたる。大型の杯BⅠ類ではヘラ記号は確認していないが、杯BⅡ類では個体数が315点であり、この内ヘラ記号をもつものが16点であり、5.1%にあたる。

なお、横瓶は体部の上面に「+」の記号が2点(第113図1134・1135)に書き込んでいる。横瓶の総数は73点であり、ヘラ記号の割合は2.73%であり、杯蓋Ⅱ類では480点の内2点であり、わずかに0.42%と低い。杯蓋を除く杯A・Bに占めるヘラ記号の割合は約5～8%の比率である。

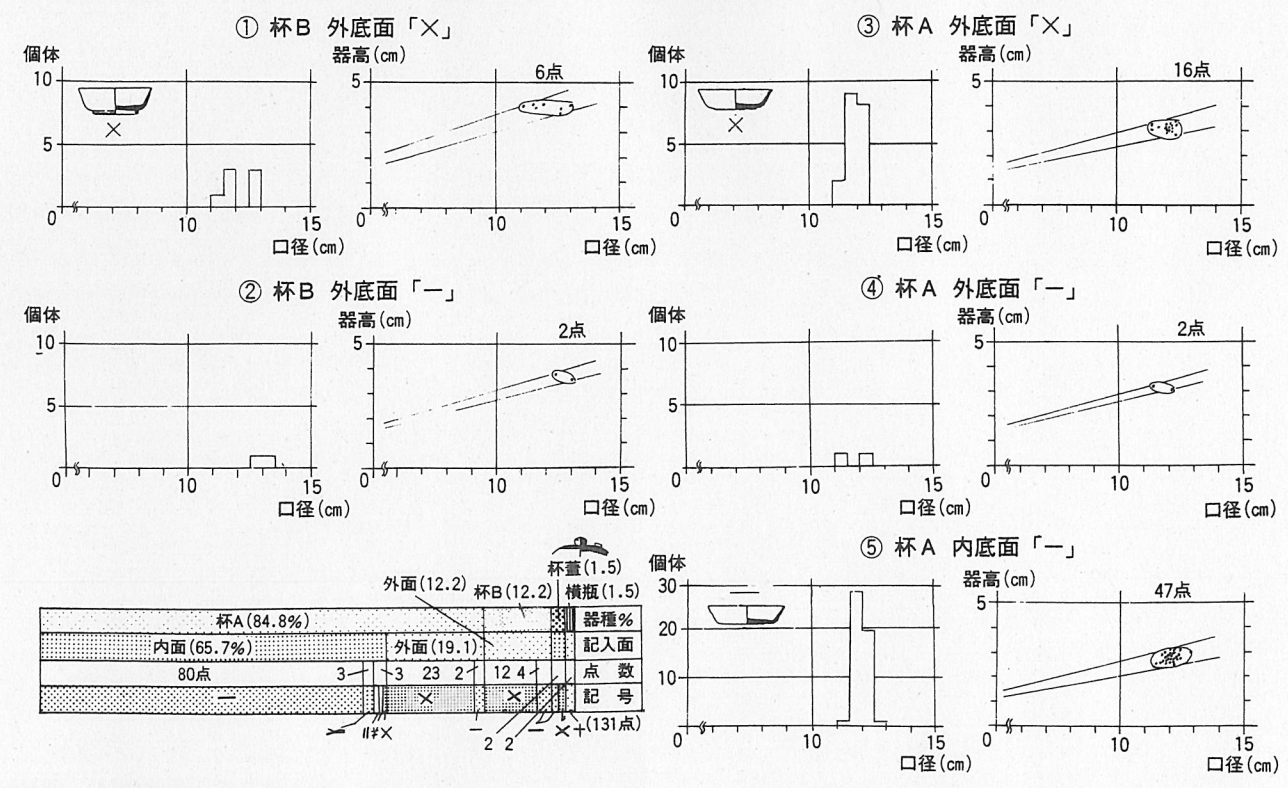
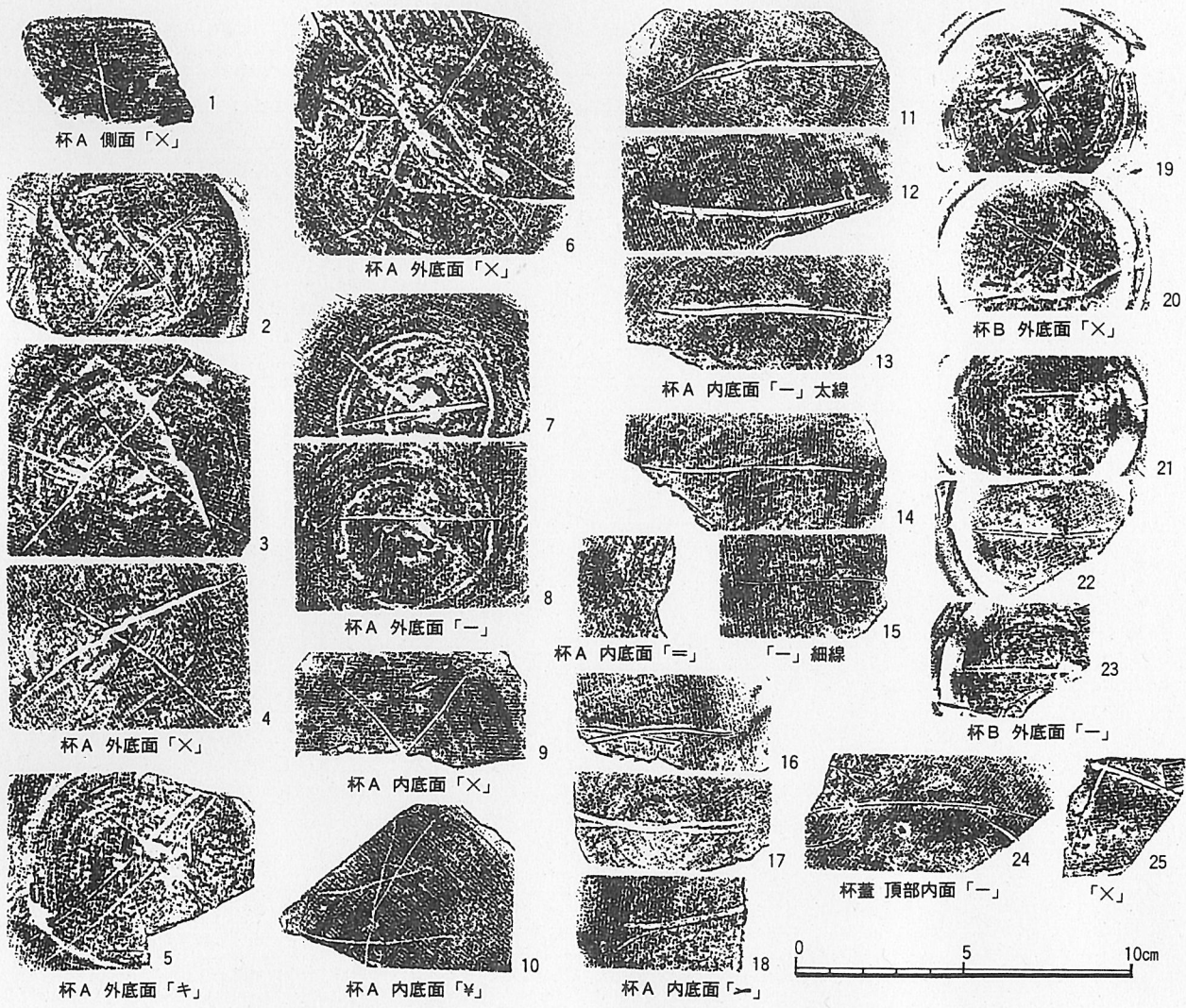
ヘラ記号を付けた杯Aの内面に「一」を記した33点では、口径が11.4～12.8cmで器高が2.5～3.2cmの範囲内に収まり、中でも口径が12.0cm前後に集中している。また、杯Aの外底面が「×」の16点では口径が11.4～12.4cmで器高が2.9～3.4cmの枠内に入り、前者に比べ器高が3～4mm程高い。杯Aの外底面に「一」の2点では口径が11.5cmと12.2cmで器高が3.1cmと3.2cmの大きさである。これらの杯Aは形態分類(第65図)では、「一」の記号のものがe類であり、「×」の記号のものがd類にあてはまり、いずれも胎土に砂粒を少し多めに含む。杯Aの「一」記号の外底面には一～二回ナデたものが多くみられる。また、杯Bでは外底面に「×」の559・582・598など6点が口径11.1～13.0cmで、器高が3.8～4.4cmの範囲内に収まる。形態はC・e類である。杯Bの外底面「一」の579と他の1点は口径が12.4cmと13.0cmで器高が3.7cmと3.6cmのかなり狭い枠内に収まり、杯Bの形態ではd類に分類される。杯A・Bの法量ともかなり限定された法量をもつものにヘラ記号が集中して書き込まれている。

## (9) I地区の叩き文について(第80～84図)

須恵器や土師器の貯蔵具、調理具、煮沸具の生産では、土器の器面を叩き締めて整形し、その時の道具の痕跡が器面に残る。外面にはタタキ目文が残り、内面には当て具の痕跡が残る。その種類は外面では、平行線文のみで平行線彫り込みが木目に直行するHaが3種類、彫り込みが木目に右上がりに斜行するHbが7種類、彫り込みが木目に左上がりに斜行するHcが2種類、彫り込みに木目がみられないHeの5種類が確認できた。各原体模式図は第80・81図の拓本に図示した。一方、内面のタタキ目文には同心円文の木目がみられないものDaが12種類、同心円文に柁目状の木目がみられるものDcが2種類、平行線の彫り込みに木目がみられないもの1種類、同心円文の外周から放射線状の彫り込みをしたもの2種類など計20種類を確認している。ただ個体数の多いHa-2、Hb-1や内面当て具Da-5などは更に詳細な観察を行えば細分が可能であるが、現時点では全体を十分に把握するまでに至らなかった。各原体の同定には実物の観察と合わせ、拓本から作成した原体と各個体毎の拓本を用いて行っている。

### 外面の叩き目文(第80図)

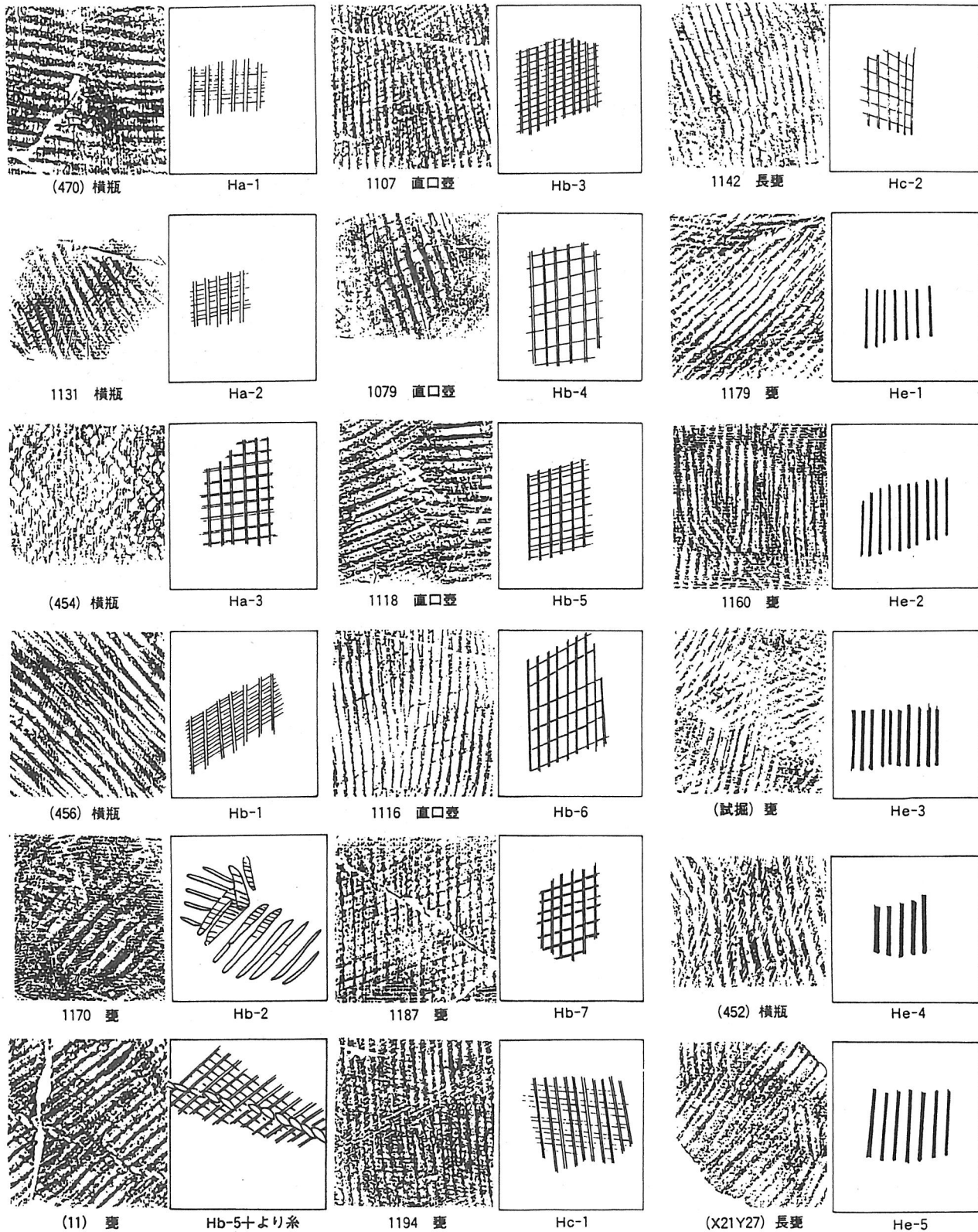
Ha-1類は条線の彫り込み幅が3.5mm、木目間隔が1mm程の細かいもの。Ha-2類は条線の彫り込み幅が4mm、条線の幅が1mm程で、木目間隔が1cm幅に6本程入るもの。Ha-3類は条線の彫り込み幅が3.5mm程で、条線の幅が1～1.5mmあり、木目間隔が4mm程と荒く格子状となるもの。Hb-1類は条線の彫り込みが深く幅が3mm程で、条線の幅が1.0mmあり、木目間隔が1mm程の細かいもの。Hb-2類は条線の彫り込み幅が2～3mmで条線の幅が3mmであり、木目



第79図 I地区出土のヘラ記号



間隔が1cm幅に6本程入り、右端に15~7mmの木目方向に伸びる細い彫り込みをもつもの。Hb-3類は条線の彫り込み間隔が2mm程で条線の幅が1mm程であり、木目が明確でその間隔が1cm幅に5本入るもの。Hb-4類は条線の彫り込みの幅が3.5mm、条線の幅が1.0mmあり、木目間隔が2cm幅に4本程と荒く入るもの。Hb-5類は条線の彫り込み幅が3mm程で条線の幅が1.0mm、木目間隔が1cm幅に3本入るもの。Hb-6類は条線の彫り込み幅が3.0mm、条線の幅が1.0mm以下の細かさがあり、木目間隔が6~9mmと荒いもの。Hb-7類は条線の彫り込み幅が2.0~3.0mmで条線の



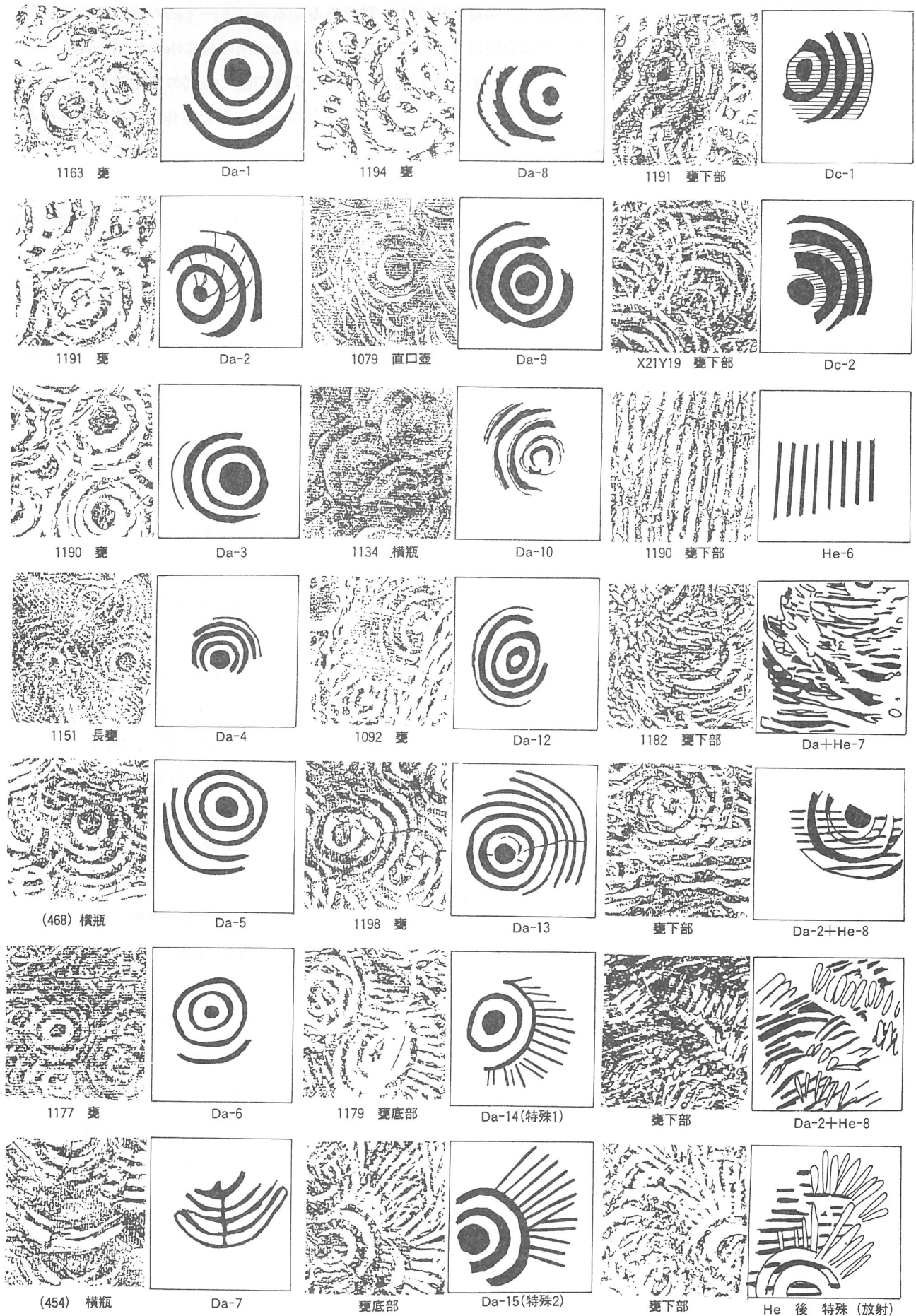
第80図 I地区 外面叩き具の分類 (1/2)

幅が1.0mmあり、木目間隔が3.0mm程のもの。He-1類は条線の彫り込み幅が3.0mm弱で条線の幅が1.0mmあり、木目間隔が1cm幅に5本入るもの。He-2類は条線の彫り込み幅が2.5mm程で、条線の幅が1.0mm以下と細く、木目間隔が1cm幅に2本と荒く入るもの。He-1類は条線の彫り込みが深く幅が3.0mmで条線の幅が1.0mm以下と狭いもの。He-2類は条線の彫り込みがあまり深くなく幅が2.0~2.5mmで条線の幅が1.0mm程のもの。He-3類は条線の彫り込みが深く幅が2.0mmあり、条線の幅が1.0~1.5mmのもの。He-4類は条線の彫り込み幅が3.0mmで条線の幅が2.0mmと太いもの。He-5類は条線の彫り込み幅が4.0mmと広く、条線の幅が1.0mmのもの。

#### 内面の叩き目文 (第81図)

同心円文の分類は、土器に残存する中心円径の大きさ、年輪状の彫り込みの深さ・幅と円形線部の幅等から区分した。Da-1類は中心円径が10mmの大きさで同心円の彫り込み間隔が4~5mmであり、三重目の外側で長径が4.5cm、短径が4.0cmの楕円形をなし、円形の線部の幅が3mmである。Da-2類は中心円径が5.5~6.0mmの楕円形をなし、三重目の円形の外径では長径が3.6cmの楕円形をなしている。年輪状の中心から1/4の範囲に1mm弱の木目のひび割れ状の突線が3~5本入る。Da-3類は中心円径が1.1~1.2cmと他に比べて大きく、年輪状の彫り込み幅が3mm、円形の線部幅が2mmと細く、三重目の外側の径が3.6cmの大きさで同心円の彫り込みが全体に深い。Da-4類は中心円径が7~8mmで、年輪状の彫り込み幅が2mmと狭く浅い。また円形の線幅も1.5~2.0mmと全体に細かい同心円である。Da-5類は中心円径が7~9mmで、年輪状の円径の幅も不均一で変化がある。円形の彫り込み幅が3~4mmと狭く、三重目の外側の径が2.8~3.1cmの楕円形である。Da-6類は中心径が5~6mmの大きさで、円形の彫り込み幅が4mmで彫り込みも浅い。円形の線幅は1.5~2.0mmと細く、三重目の外側の径が2.6~2.8cmで年輪状の各円形の形状が同心円をなさず少し変形している。Da-7類は中心円径が不明確であるが弧状をした扇形状の当て具痕の中心に幅2mmのひび割れ状の条線が入る。弧状の彫り込み幅は各2mm程であるが外側の幅のみが4~5mmと広い。Da-8類は中心円径が5~6mm、円形の彫り込み幅が5mm程で、円形の線幅が3~5mmと変化があり、三重目の彫り込み部の両側に細かい木目を残している。彫り込みは深く線状部との境が角張る。Da-9類は中心円径が8mmで、円形の彫り込み幅が2~3mmと狭く、円形の線幅が逆に5mmと広く三重目の外側の径が3.5cmの大きさである。Da-10類は中心円が5mm程の窪みで空白となり、年輪状の円形が隅丸形状をなし、彫り込みが全体に浅いため、他の原体に比べると彫り込み部と円形線の境が不明確である。Da-12類は中心円が4~6mmの楕円形をした窪み部が空白をなし、円形状の彫り込みは幅2.5~3.5mmと深く、円形線の幅も同様に2.5~3.5mmであり、三重目の外側の径は長径が3.1cmで、短径が2.6cmの楕円形をしている。Da-13類は中心部の円径が7mmで、年輪状の彫り込み幅が4mm程で、円形線の幅が2mmあまりと細く、三重目の外側幅が3.0cm程であり、中心から亀裂による細い条線が入る。なお、原体は円形線の幅や彫り込み幅及び深さなどが全体にDa-5類に類似している。Da-14類は中心円径が9mm程で円形の彫り込み幅が4mm、円形の線幅が2mmと狭く、三重目の外側の径が3.4cmの大きさである。同心円の外側には160度程の扇形をした放射状条線が付加される。条線の長さは1.0~1.5cmで、彫り込み幅が3mm、条線の幅が1mm程である。Da-15類は中心円径の線幅が12mmで、円形の彫り込み幅が3mm余り、円形の線幅が3mmであり、三重目の外側の径が3.7cmの大きさである。三重目の外側に約80度に広がる扇形の条線は、1.4~2.3cmの長さで、彫り込み幅が3~4mm、条線の幅が1~2mmと細い。Dc-1類は木目間隔が1cm幅に6本程入る柁目板に、中心円径が長径10mm、短径5mmの楕円形をなし、円形の彫り込み幅が2~3mm、円形の線幅も2~3mmである。Dc-2類は木目間隔1mm程の柁目板に中心径が10mm程の大きさで、円形の彫り込み幅は一重目が5mm、二・三重目が2~3mmと狭くなり、円形線の幅も一重目が6mm、二・三重目が3mm程と狭くなる。He-6類は彫り込み幅が3mm程で彫りが深く、条線の幅は2mm程に平行に入る。

この他に甕の体部下半に用いる当て具痕の観察及び検討は不十分であるが、二種類のタタキ文を併用するものがみられる。第81図右側下4例はその代表例である。1182の甕では先にHe-7類のタタキ文を施し、更に後にDaタタキ文



第81図 I地区 内面叩き具の分類 (1/2)

を行う。He-7類は平行な彫り込みの幅が2mm程で、条線の幅が1mm程であるが右端に2～4mmの楕円形の窪み痕が伴う。第79図右下3はHe-6類とDa-2類のタタキ具を併用したもの。右下2図はDa-2類の後にHeの併用したものであり、He-8類の原体ははっきりしないが長さ1cm程で、彫り込み幅2～3mm、条線の幅1mm弱のやや扇形をした6～8本組の短い条線のタタキ文である。図の右下隅はDa-15類の同心円文に放射条線を配した原体に円形や彫り込み幅等が似ており、先行したHe-6類のタタキ文の状態に近い。

#### 各器種ごとの叩き文について（第82～84図 表25～28・30～36）

タタキ文の原体には、図示した各器種の外面及び内面の調整具を種類別に第82～84図に示した。また、各個体・原体ごとの区分を表26～28に示し、更に器種ごとの原体の数量や遺跡全体の原体を集計した。

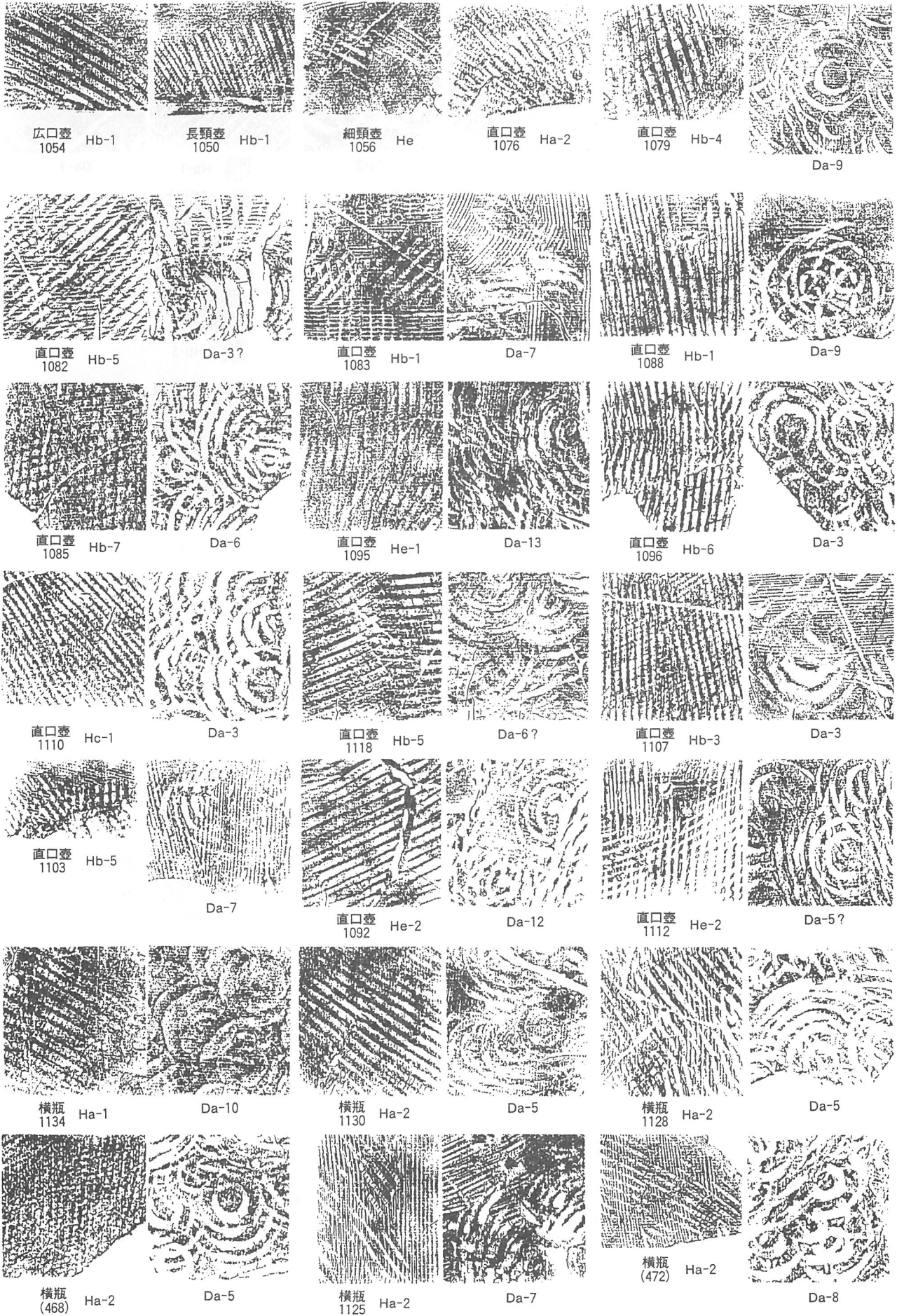
広口壺では外面原体にHb-1を用いた1例のみに叩き目が残る。長頸壺ではHb-1の1例と種類は不明であるがHeの2例で壺の内面はいずれも回転ナデ調整を加え当て具痕が不明である。横瓶は41点を数える（表32）。外面原体の内訳はHaに3種を用いた13点があり、個体総数の31.7%を占め、Heが12点で22.0%の割合である。また内面原体には8種類があり、Da-5・7が各7～8点と多く、Da-2・6・8が4～5点と次いでおり、他は各2点と少ない。内外面の原体の組み合わせではHaが8組であり、Hb・Heが各7組と多く逆にHcが1組と少ない。この組み合わせは計23組である。

直口壺24点の外面原体はHbが6種の13点と多く（表33）、個体総数の54.1%を占める。次いでHeが2種4点を数え16.7%を占める。HaとHcはそれぞれ1種のみで3～4点を数え各12.5～16.7%の割合である。内面原体ではDaが7種あって、その内Da-3が5点と多く、他の原体が1～4点と分散する。内外面の原体の組み合わせはHbが9組と多く、Heが3組、Hcが2組、Haが1組の順に少なくなり合計で15組が存在する。

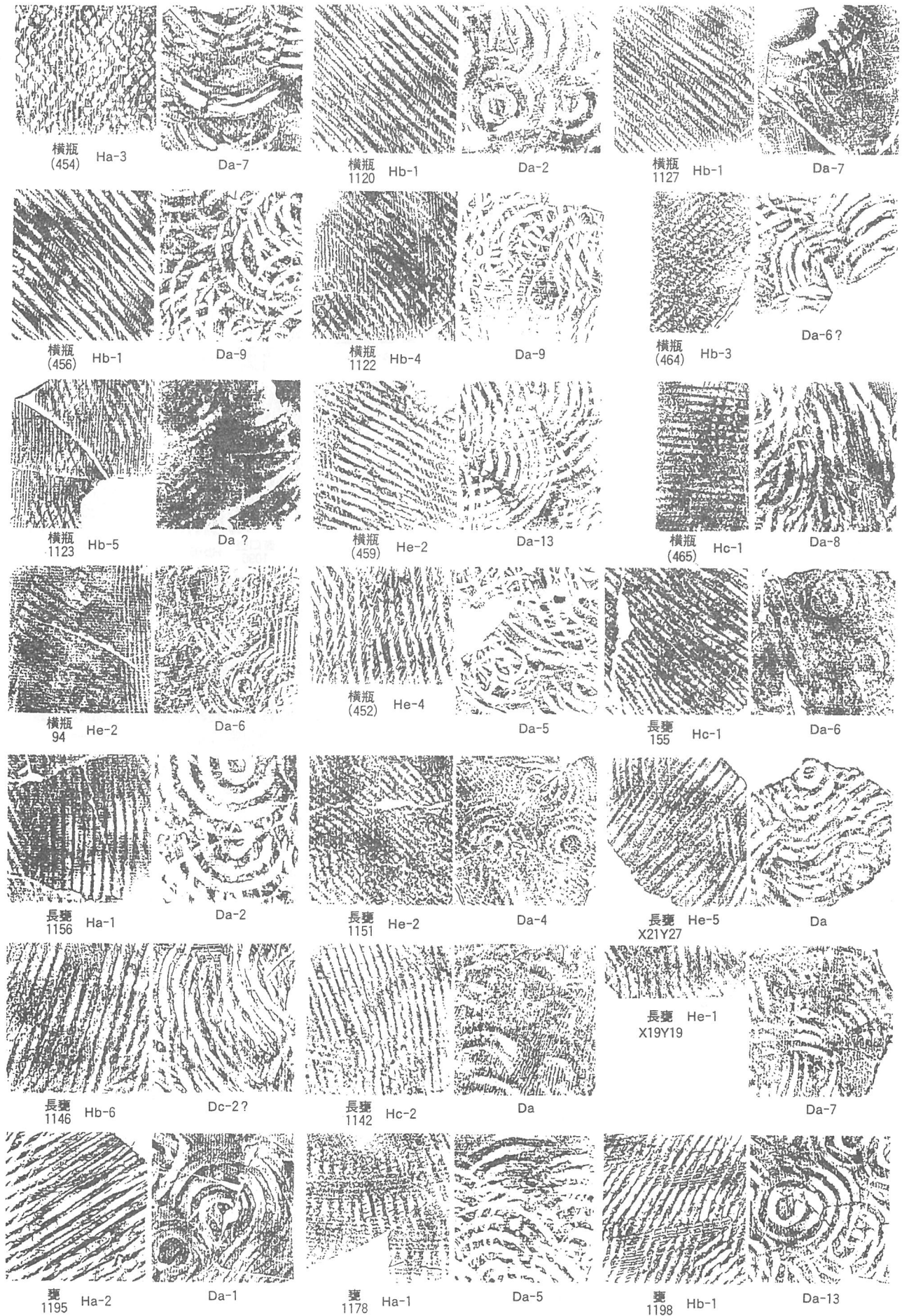
甕A・Bは体部内面の上下で異なる原体を用いるものと、上下に同一の原体を用いたものがある（表30・34・35）。甕A17点の外面原体では、Heが2種7点があり総数の41.2%と高い比率を示す。次いでHbが3種5点で29.4%であり、Hcが1種3点の17.6%で、Haが1点の5.9%の割合である。体部内面上半の原体は6種があり、Da-1・5・6が各4点と多く、Da-2・3・13が各1～2点と少ない。また体部内面下半の原体は上半と下半に同一のタタキ文を用いたものが6点ある。外面原体はHa・Heが各1種、Hbが2種あり、内面原体はDa-5・6が各2点で、Da-1・3が各1点である。体部内面の上半と下半に異なる原体を用いたものは7点と前者の数に近い。この外面原体には、Hc・Heが各1種、Hbが2種あり、内面原体にはHeの2種が内面専用で使用している。内外面の原体の組み合わせは内面の上半がHeが6組、Hbが4組、Hcが2組、Haが1組の合わせて13組である。下半は上半と異なる原体のものではHb・Hcが各2組、Heが1組と数少ない。

甕Bでは第120図1181の外面の体部の上下にHb-1・5の二種原体を用いており、外面では唯一の例である。甕B31点の外面原体の内訳は、Hbが5種18点で総数の58.1%と比率が高く、Ha・Heが各2種で、Hcが1種である。Haが6点で19.3%を占め、Hcが4点で12.9%で、Heが3点で9.7%の割合である。

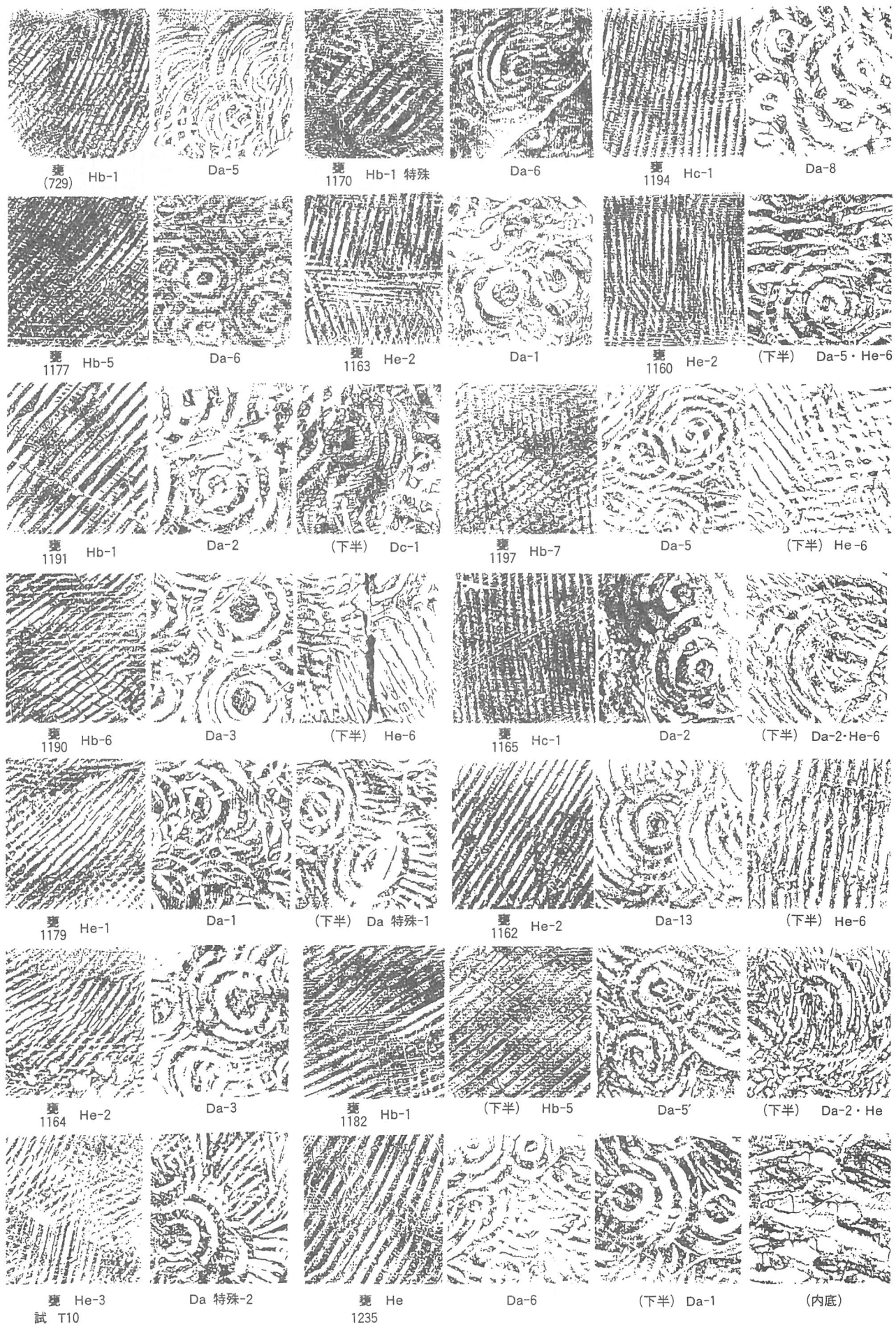
甕B体部内面の下半原体が同一のものはHa・Heが各1種でわずか3点である。下半の原体が異なるものは17点と多く85%に当たり、甕Aの54%に比べ高い割合である。外面の原体はHbが4種であり、Heが2種で、Ha・Hcが各1種と順次原体の種類が少なくなる。内面の原体は7種と多く、Daが4種で、Heが3種あり、甕AではDaがみられず、He-6が甕Bでも多用されている。内外面原体の組み合わせは体部上半においてHbが10組、Ha・Hcが各4組で、Heが2組の合わせて20組がある。内部下半は上半と異なるものにHbが7組、Heが2組、Hcが1組の計10組がみられる。長甕の外面原体13点の割合は、Heが4種8点で総数の61.5%を占める（表36）。Haが2種、Hb・Hcが各1種と少なくそれぞれ1～2点と数少ない。内面の原体には5種があり、Da-4が4点あり、Dcが3点と他は各1点である。内外面原体の組み合わせは、Heが4組、Ha・Hcが各2組、Hbが1組の合わせて9組である。



第82図 I地区の叩き文 (1/2)



第83図 I地区の叩き文 (1/2)



第84図 I 地区の叩き文 (1/2)





表28 I地区 内面の叩き具区分

器種	図版NO	内面・下部	外面	器種	図版NO	内面・下部	外面	器種	図版NO	内面・下部	外面	器種	図版NO	内面・下部	外面	
甕 B	実727	Da-1,欠	Hb-1	甕 A	1164	Da-3,欠	He-2	甕 B	1183	Da-5,欠	Hb-1	横瓶	実461	Da-8	He-3	
B	実728	Da-1,カキメ欠	Hc-1	B	1190	Da-3,He-6	Hb-6	B	1186	Da-5,He-6	Hb-7		実465	Da-8	Hc-1	
A	1161	Da-1,欠	欠	長甕 c <sub>1</sub>	1143	Da-4	He-2	B	1187	Da-5,He-6	Hb-7		実467	Da-8	Hb?	
A II	1167	Da-1,欠	He-2		1148	Da-4	He-2	B	1192	Da-5,同一	Ha-2		実472	Da-8	Ha-2	
B	1179	Da-1, Da-14	He-1	c <sub>1</sub>	1150	Da-4	He-2	B	1197	Da-5,He-6	Hb-7		1194	Da-8,欠	Hc-1	
B	1184	Da-1,欠	He-2	c <sub>1</sub>	1151	Da-4,ハケメ	He-2	B	1200	Da-13,同一	Ha-2					
B	1195	Da-1,欠	Ha-2	横瓶	実466	Da-5	Hb-3	横瓶	実462	Da-6	Ha-3?		横瓶 a	1122	Da-9	Hb-4
横瓶	実451	Da-2	He-3		実468	Da-5	Ha-2		実463	Da-6	Hb-1		直口壺 c	1079	Da-9	Hb-4
	実457	Da-2	Hb-1		実470	Da-5?	Ha-1		実464	Da-6?	Hb-3		b	1088	Da-9	Hb-1
	実471	Da-2	He-3	a	1128	Da-5	Ha-2	直口壺 b	1085	Da-6	Hb-7		b	1097	Da-9	Hb-1
a	1120	Da-2	Hb-1	a	1129	Da-5?	Hb-1	d <sub>1</sub>	1118	Da-6?	Hb-5		横瓶	実469	Da-10	Ha-1
b	1121	Da-2	Hb-1	c	1130	Da-5	Ha-2	甕 A IV	1170	Da-6,欠	Hb-2			1134	Da-10	Ha-1
c <sub>3</sub>	1156	Da-2	Ha-1	c	1131	Da-5	Ha-2	A V	1177	Da-6,同一	Hb-5		直口壺 e	1092	Da-12	He-2
長甕 A II	1159	Da-2,He-8	Hc-1	長甕	155	Da-6	Hc-2	A I	1235	Da-6, Da-1	He-1		e	1106	Da-12	He-2
B	1191	Da-2, Dc-1	Hb-1	直口壺 c	1086	Da-5?	Hb-5	A I	X19Y19	Da-6,欠	Hc-1		横瓶	実450	Da-13	He-3
B	1193	Da-2, Dc-1	Hb-1	d <sub>2</sub>	1112	Da-5?	He-2	横瓶	実454	Da-7	Ha-3			実459	Da-13	He-2
B	1196	Da-2, Dc-1	Hb-1	d <sub>2</sub>	1115	Da-5	Hc-1	a	1124	Da-7	Hb-1		直口壺 c	1095	Da-13	He-1
直口壺 c	1096	Da-3	Hb-6	d <sub>1</sub>	1119	Da-5?	Hc-1	b	1125	Da-7	Ha-2		甕 B	実11	Da-13?,欠	Hb-5
d <sub>1</sub>	1107	Da-3	Hb-3	甕 A	実13	Da-5,欠	Hb-5	直口壺 b	1083	Da-7	Hb-1		A II	1162	Da-13, He-6	He-2
d <sub>1</sub>	1110	Da-3	Hc-1	B	実71	Da-5, He-6	Hc-1	b	1127	Da-7	Hb-1		B	1173	Da-13,欠	Ha-2
d <sub>2</sub>	1111	Da-3?	Hc-1	B	実729	Da-5,欠	Hb-1	b	1133	Da-7	Hb-1		B	1181	Da-13, He-6	Hb-1
d <sub>2</sub>	1116	Da-3	Hb-6	A	1160	Da-5, He-6	He-2	直口壺 b	1084	Da-7	Hb-1		B	1198	Da-13,欠	Hb-1
甕 B	実730	Da-3,欠	Hb-1	A III	1169	Da-5,同一	Hb-5	直口壺 e	1103	Da-7	Hb-1		B	1199	Da-13,欠	Ha-2
A III	1158	Da-3,同一	Ha-2	A III	1176	Da-5, He-6	Hb-1	長甕 c <sub>3</sub>	X19Y19	Da-7,欠	He-1		B	1179	Da-1, Da-14	He-1
A III	1163	Da-3,同一	He-2	B	1182	Da-5, Da-2, He	Hb-1・5									

用する原体にHa-3、He-4・5があり、長甕ではHc-2が上げられる。内面の原体では、直口壺、横瓶、甕A・B、長甕に共通するのはDa-5で27点と多く、直口壺、横瓶、甕A・Bに共通なのはDa-2で14点である。また特定の器種に伴う原体は長甕にDa-4とDcが、横瓶にDa-10が、直口壺にDa-12がそれぞれ用いられる。甕A・Bの内部下半では、原体が共通するのはHe-6であり、甕Aのみに帰属するのはHe-8である。甕BではDa-14・15、Dc-1・2、He-7・9と多くの種類が使用されている。

これらの原体が複数の器種に共通して使用される背景には、須恵器生産にあたって工人が製作する各器種と深く関わりをもち、原体が工人個人に帰属するものか、あるいは生産に携わる工人集団単位に原体を共通して複数の工人が共通して使用するものかは、器種ごとの細分や特徴等の分類から更に検討が必要である。

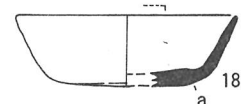
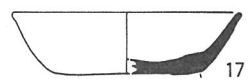
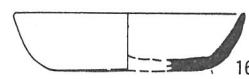
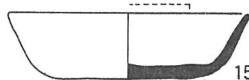
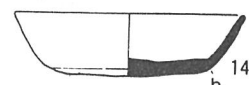
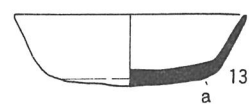
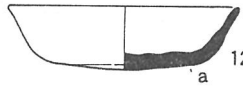
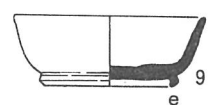
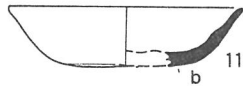
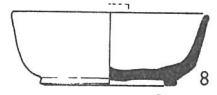
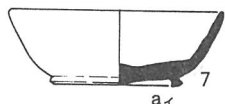
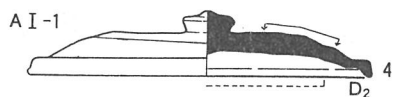
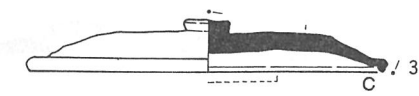
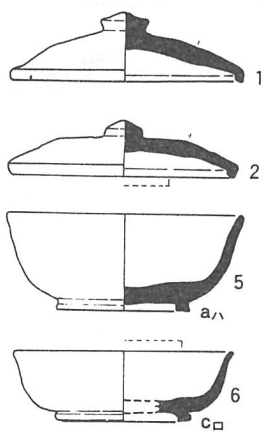
表29 I地区 貯蔵具等の容量

器種	図版NO	容量 cc	石・升	器種	図版NO	容量 cc	石・升	器種	図版NO	容量 cc	石・升
短頸壺	150	1,370	1升6合177	直口壺 b	1083	5,886	6升9合504	長甕	1156	5,442	6升4合261
	1007	3,437	4升0合585	b	1084	7,383	8升7合181		1157	7,195	8升4合961
	1009	2,480	2升9合284	c	1095	4,312	5升0合918	甕 A III	1158	107,517	1石2斗6升9合610
	1028	1,834	2升1合656	b	1108	5,545	6升5合477	A II	1159	150,185	1石7斗7升3合454
	1032	1,763	2升0合818	b	1097	8,511	1斗0升0合501	A II	1162	151,429	1石7斗8升8合144
	1033	1,972	2升3合286	d	1107	11,358	1斗3升4合120	A III	1163	(116,625)	(1石3斗7升7合162)
	1034	1,536	1升8合137	短頸壺	1112	8,285	9升7合833	A II	1165	(142,079)	(1石6斗7升7合735)
	1035	1,570	1升8合539		1116	5,625	6升6合422	A IV	1166	(68,029)	(8斗0升3合318)
	1036	1,431	1升6合897		1118	5,698	6升7合284	A III	1169	(91,548)	(1石0斗8升1合041)
	1037	1,472	1升7合382		1119	4,381	5升1合732	A III	1176	99,421	1石1斗7升4合009
	1039	1,462	1升7合263	横瓶 a	1120	4,927	5升8合180	A V	1177	33,934	4斗0升0合708
長頸壺	1049	2,064	2升4合372	b	1122	3,853	4升5合498	B	1183	43,079	5斗0升8合696
	1050	865	1升0合214	a	1123	3,286	3升8合802	B	1182	32,668	3斗8升5合758
	1052	1,676	1升9合790	a	1124	3,639	4升2合971	B	1185	41,789	4斗9升3合464
	1053	815	9合623	b	1125	3,698	4升3合667	B	1187	44,123	5斗2升1合024
	1056	1,408	1升6合626	b	1126	4,108	4升8合509	B	1188	33,405	3斗9升4合461
広口壺	1042	1,642	1升9合389		1127	3,669	4升3合325	B	1189	33,386	3斗9升4合237
	1058	1,468	1升7合334	c	1130	3,375	3升9合853	B	1191	29,892	3斗5升2合978
	1074			c	1131	2,867	3升3合854	B	1192	44,625	5斗2升6合952
直口壺 b	1075	6,954	8升2合116	c	1132	2,765	3升2合650	B	1193	31,672	3斗7升3合997
b	1076	6,284	7升4合204	長甕	1137	7,539	8升9合024	B	1195	36,491	4斗3升0合902
b	1077	5,706	6升7合379		1140	5,651	6升6合729	A I	1235	260,066	3石0斗7升0合980
c	1079	4,743	5升6合007		1146	6,233	7升3合602				

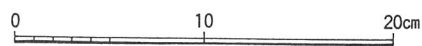
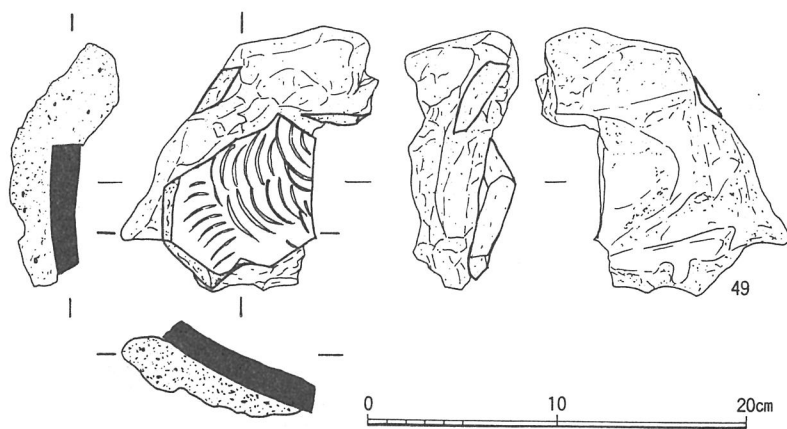
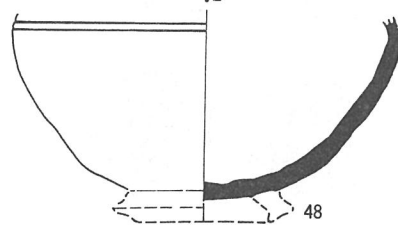
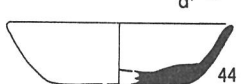
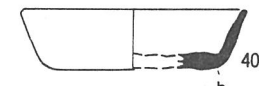
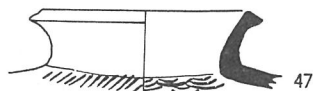
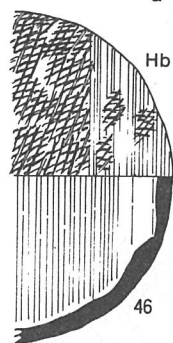
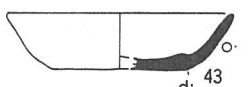
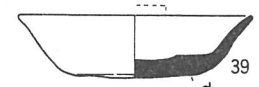
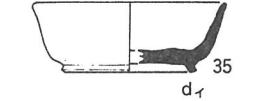
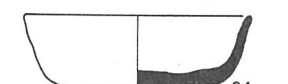
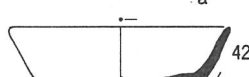
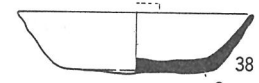
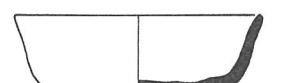
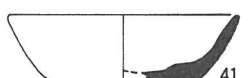
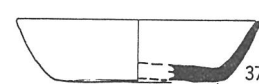
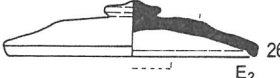
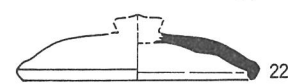
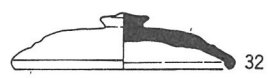
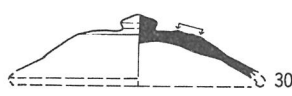
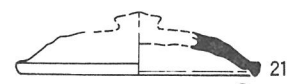
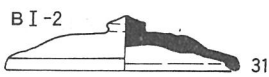
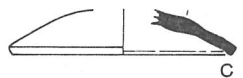
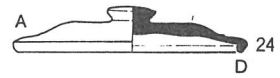
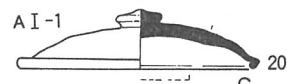
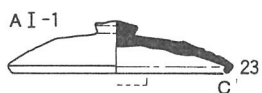
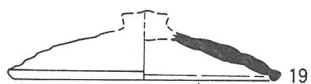
(容量は図上で頸部以下を計算、1升=846.85ccとして計算)



S-01 覆土

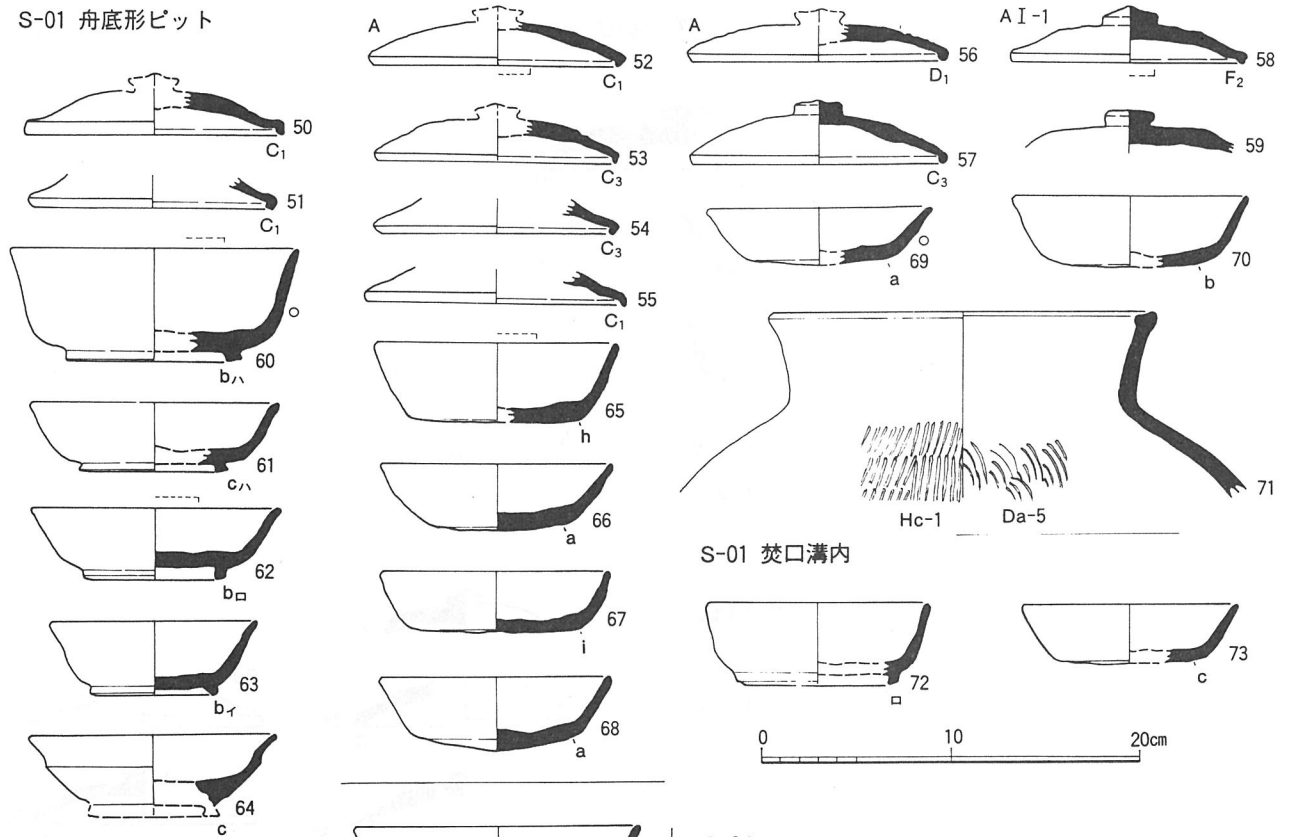


S-01 床面

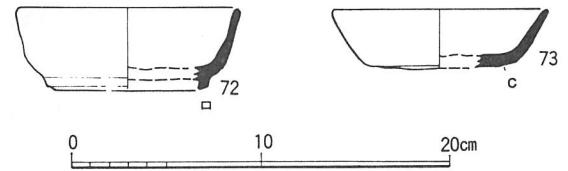


第85图 I地区 S-01出土遗物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

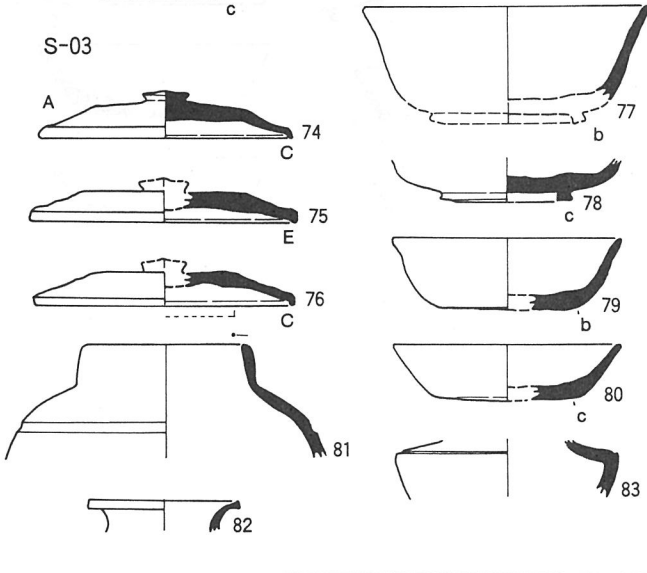
S-01 舟底形ピット



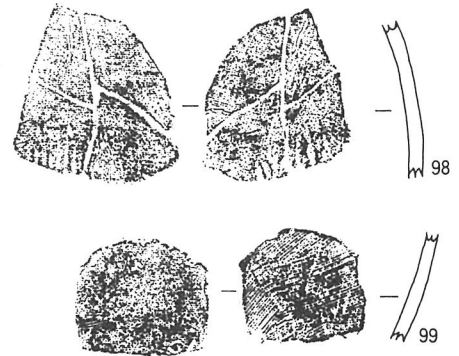
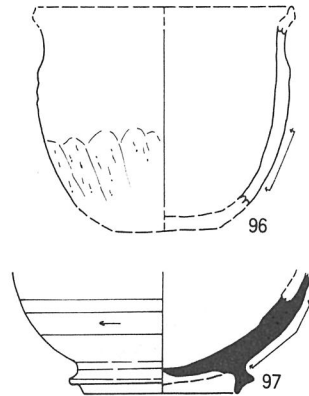
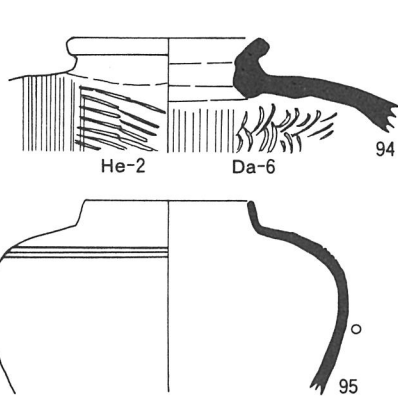
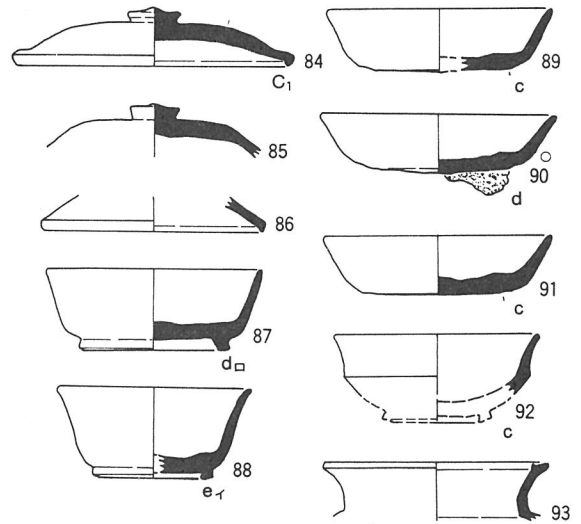
S-01 焚口溝内



S-03

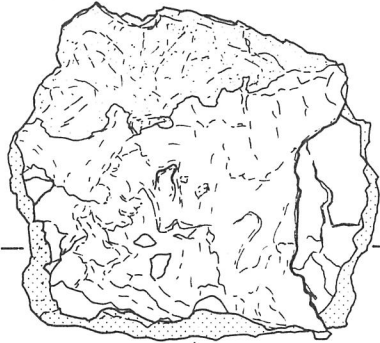
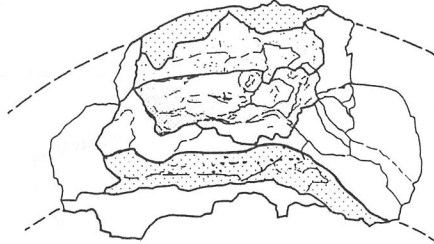
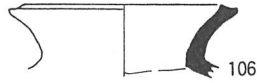
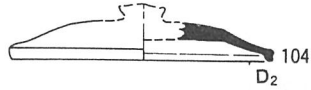
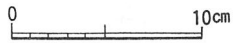
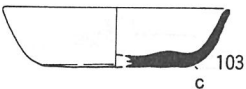
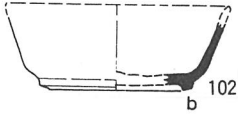
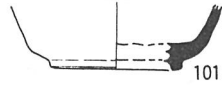
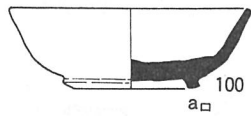


S-04

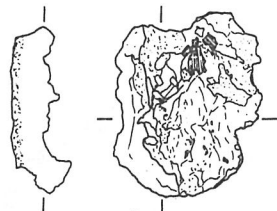
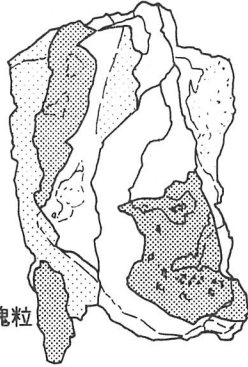


第36図 I地区 S-01・03・04出土遺物 (1/4) ○2次焼成品 (焼台)

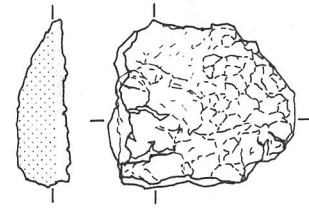
S-02



鉄塊粒



木炭

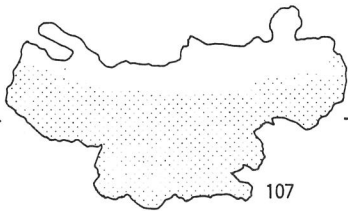


ガラス状の表面

スサ入り粘土

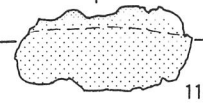
泥付着

鉄分包含

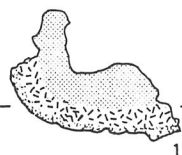
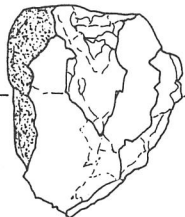


107

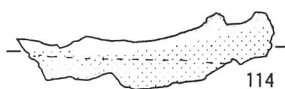
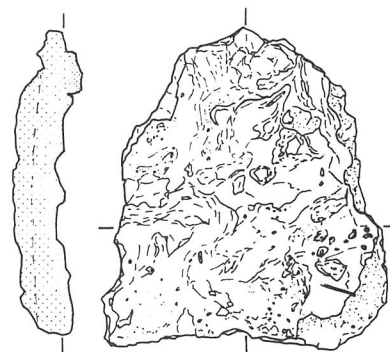
S-18



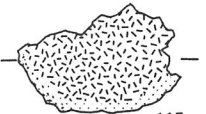
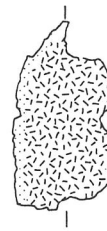
112



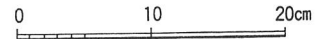
113



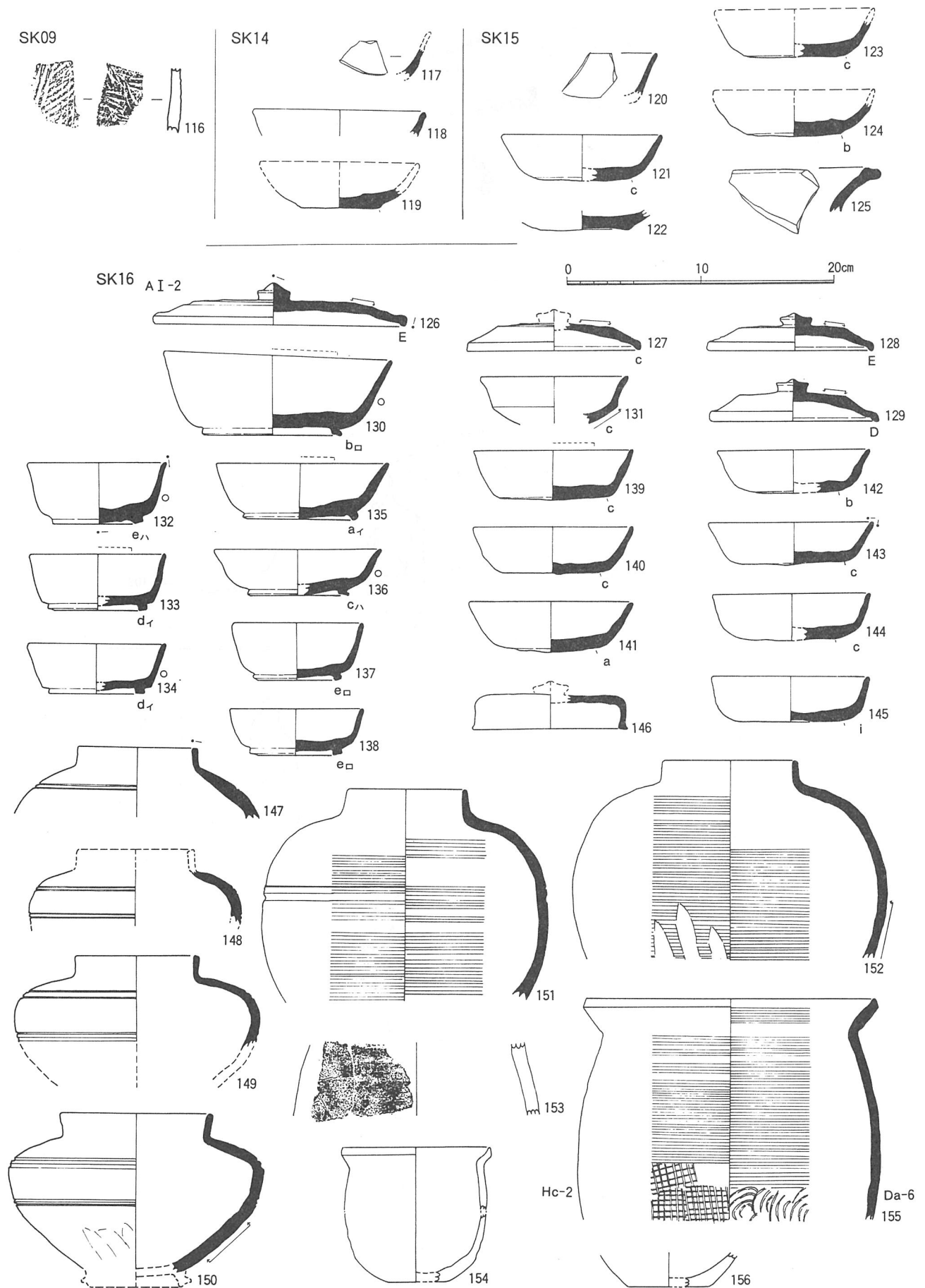
114



115

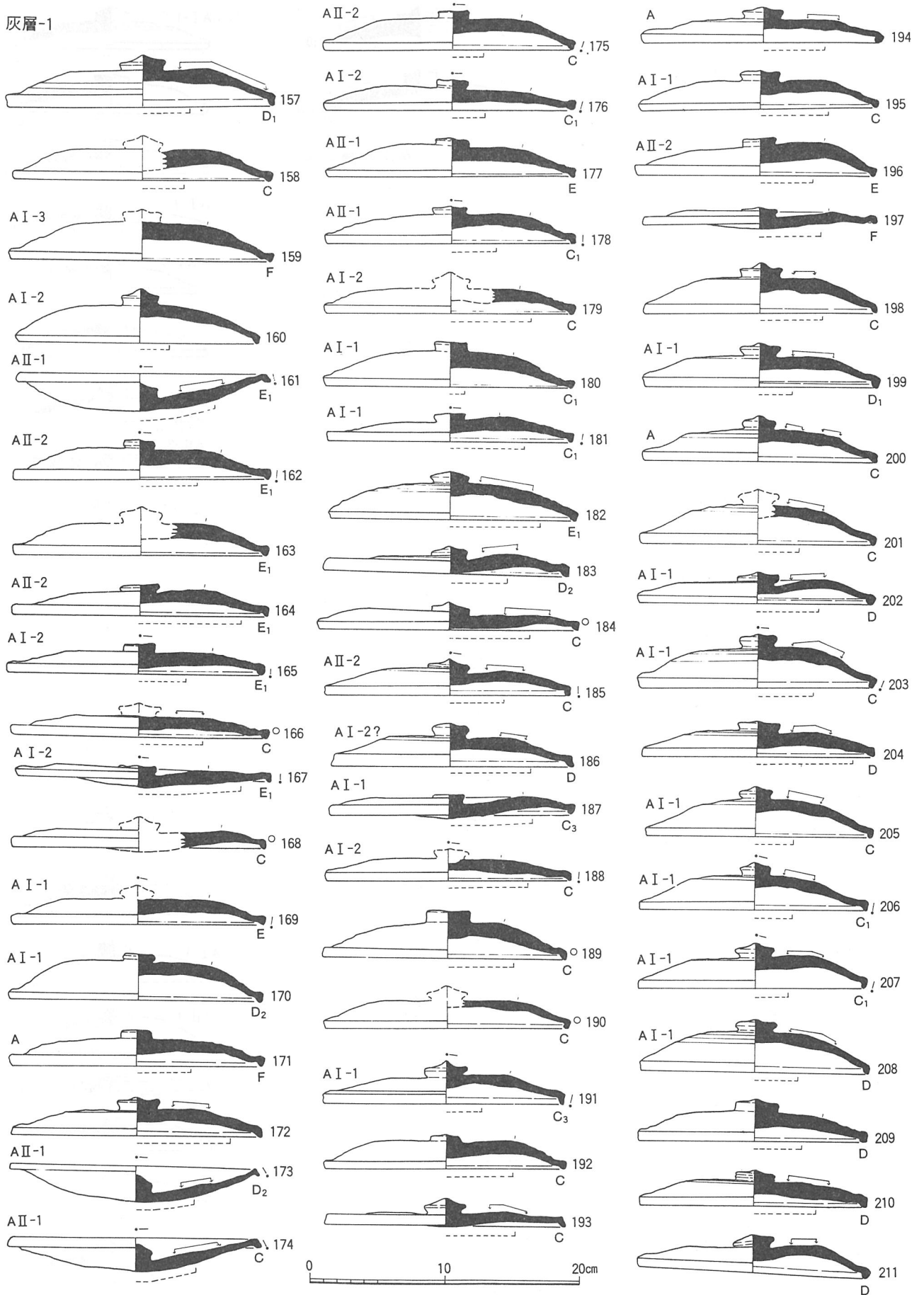


第87図 I地区 S-02・18出土遺物 (100~106 : 1/4, 107~115 : 1/6)



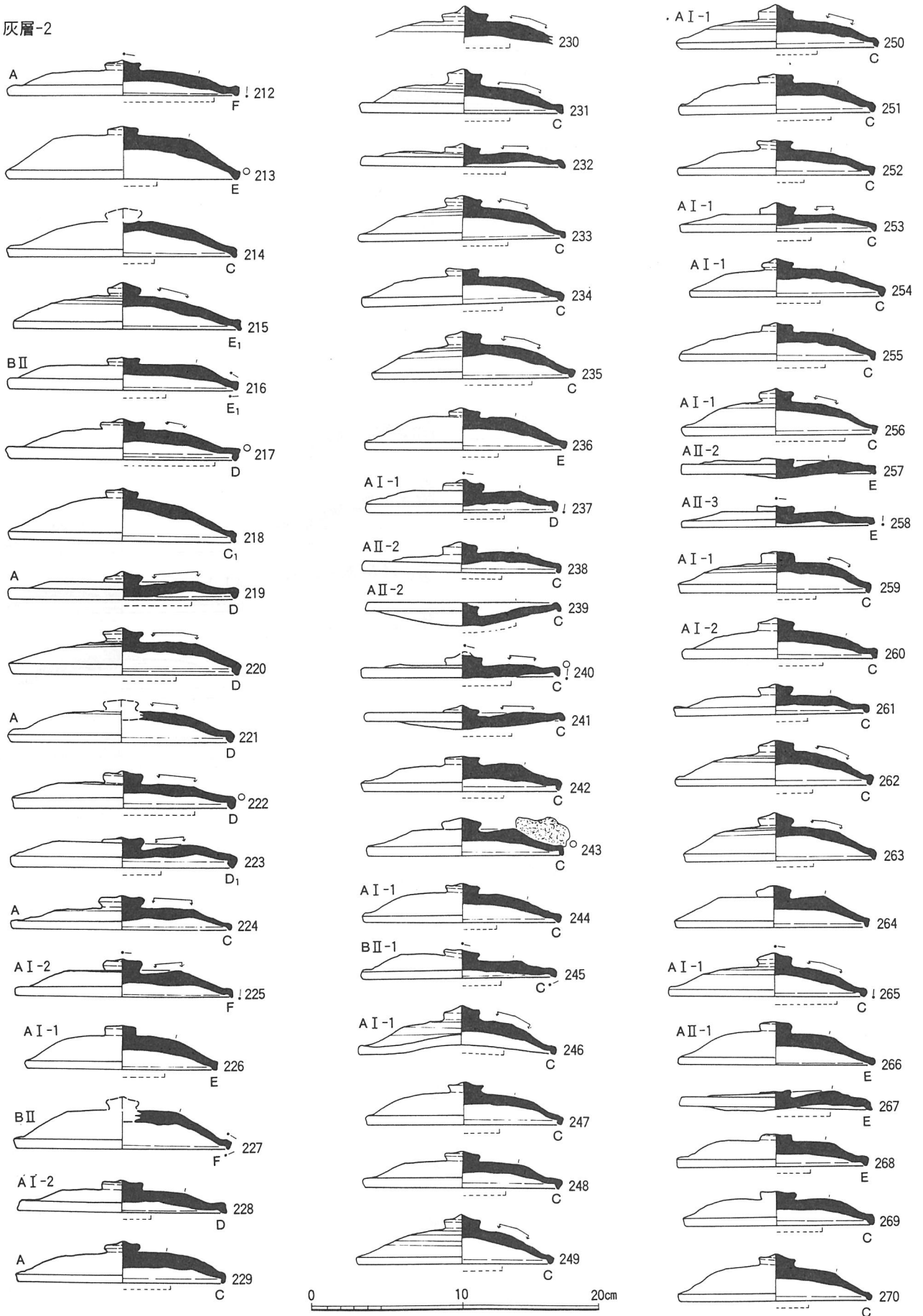
第88图 I地区 SK09·14~16出土遗物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-1



第89图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

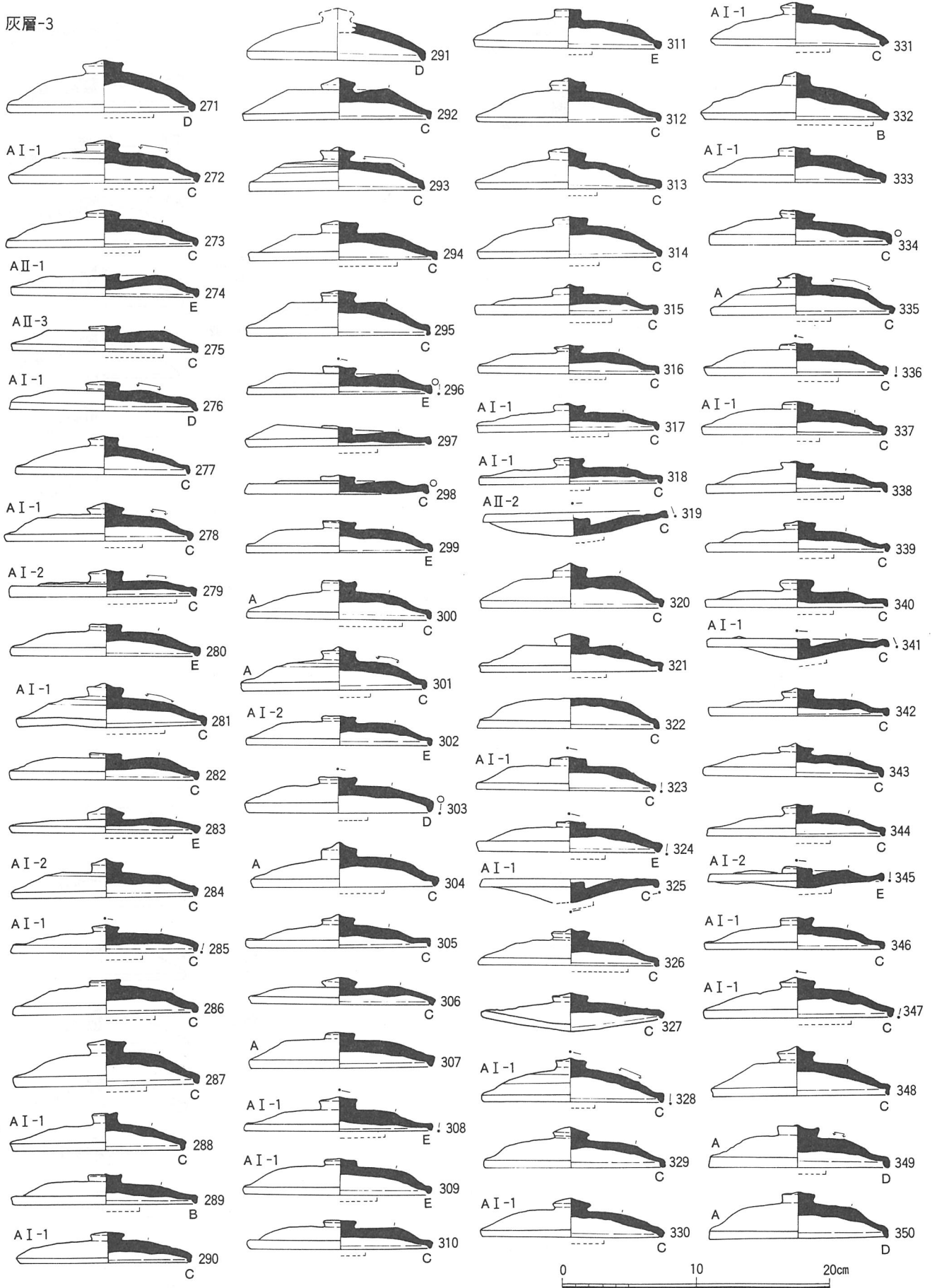
灰層-2



第90图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

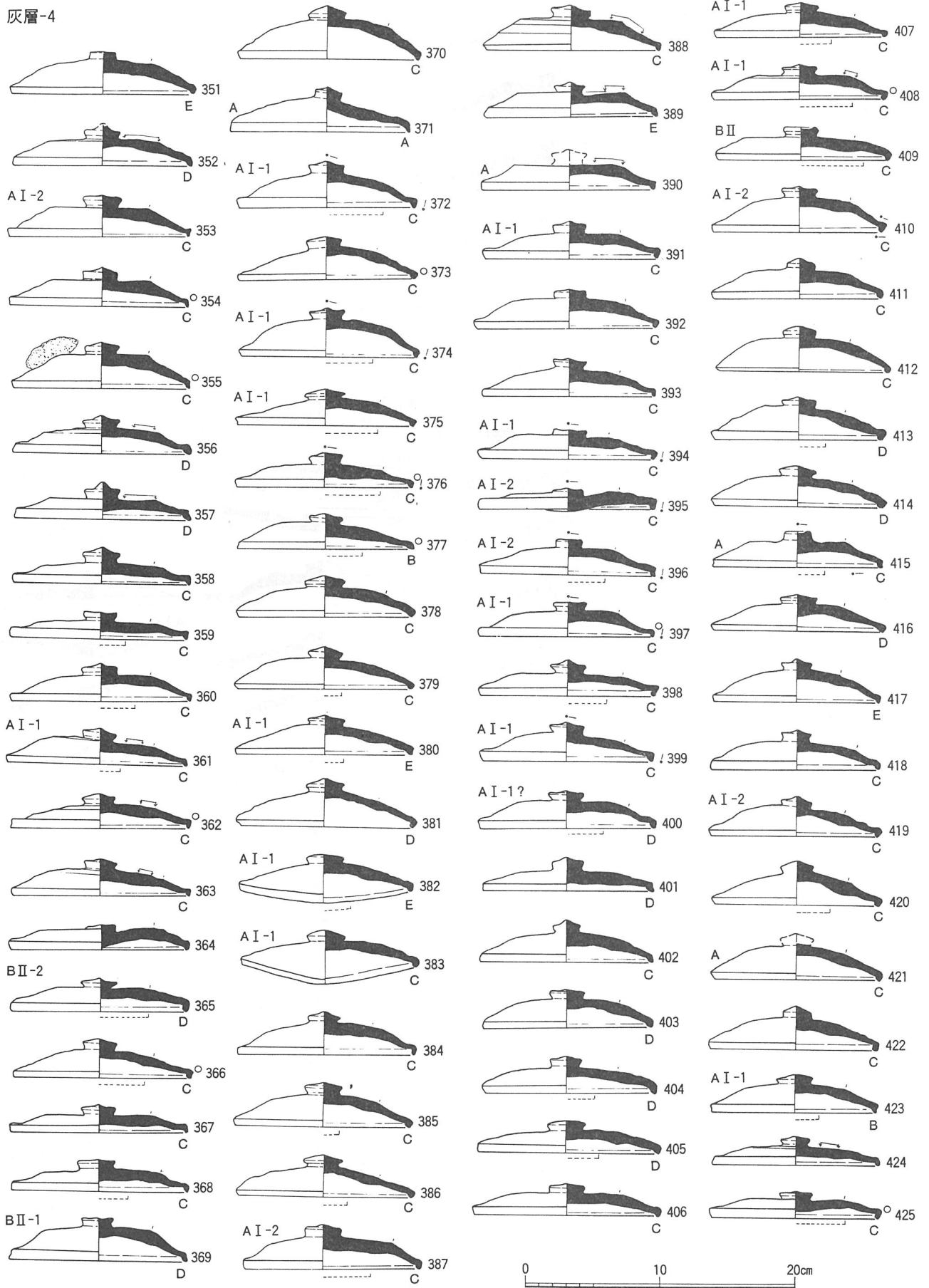


灰層-3



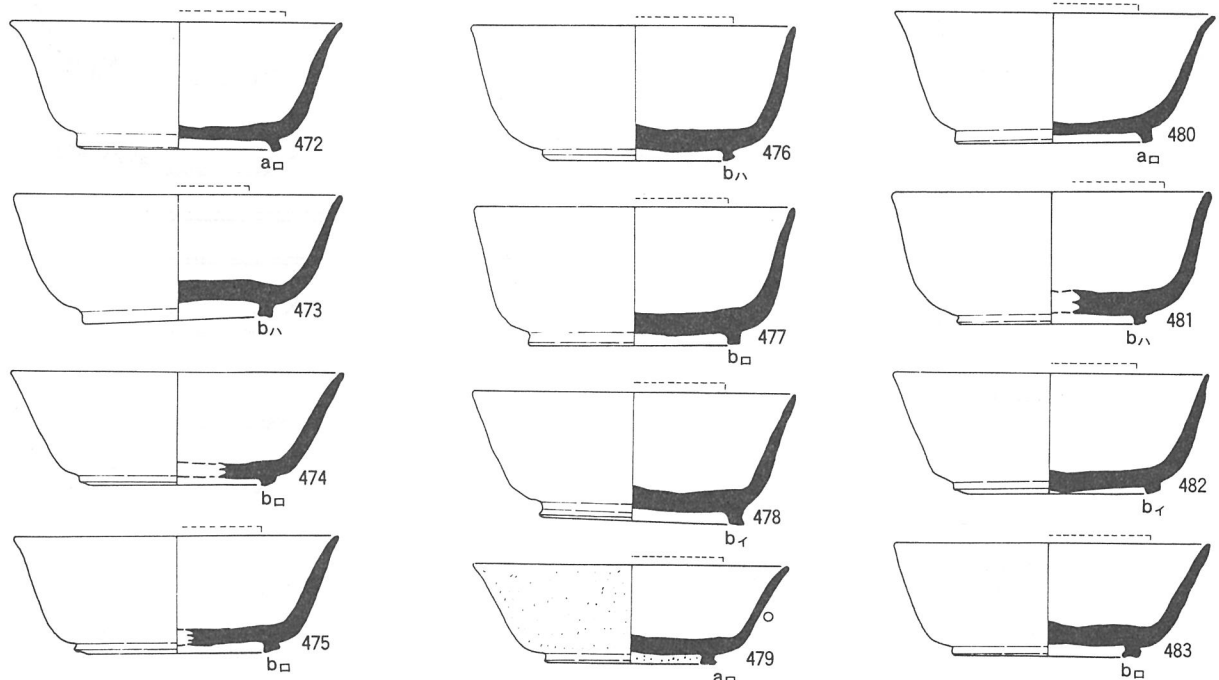
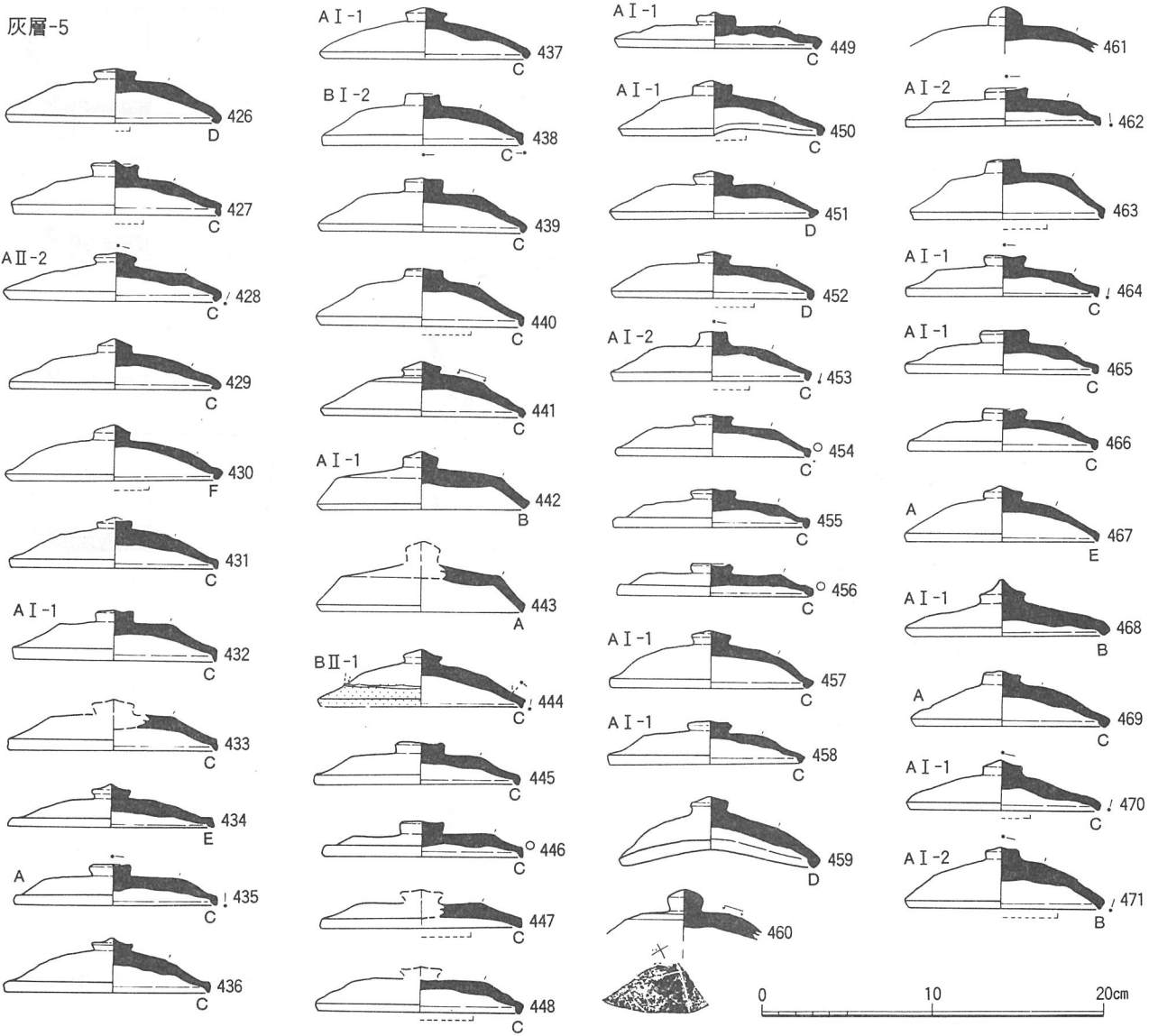
第91图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-4



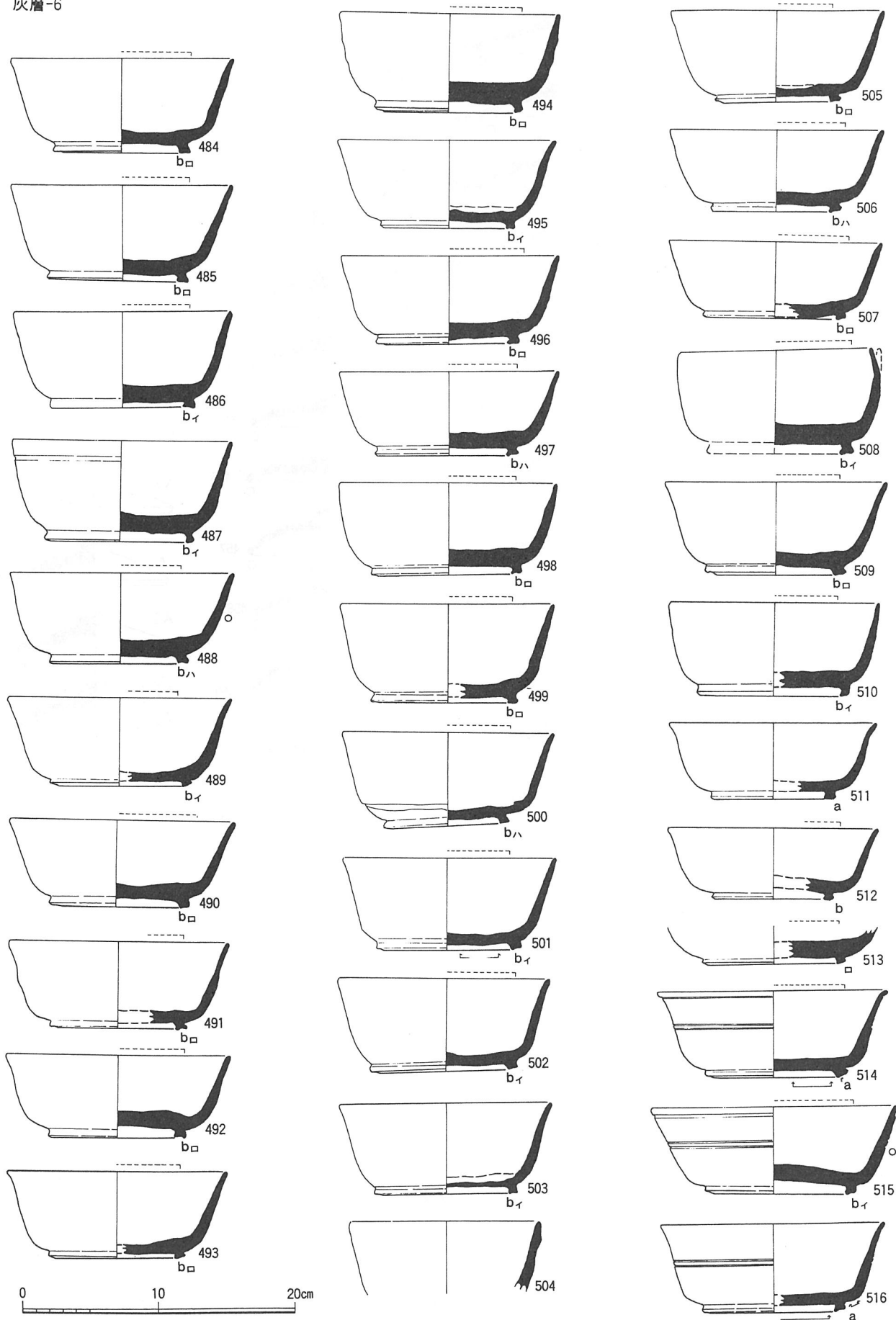
第92图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-5



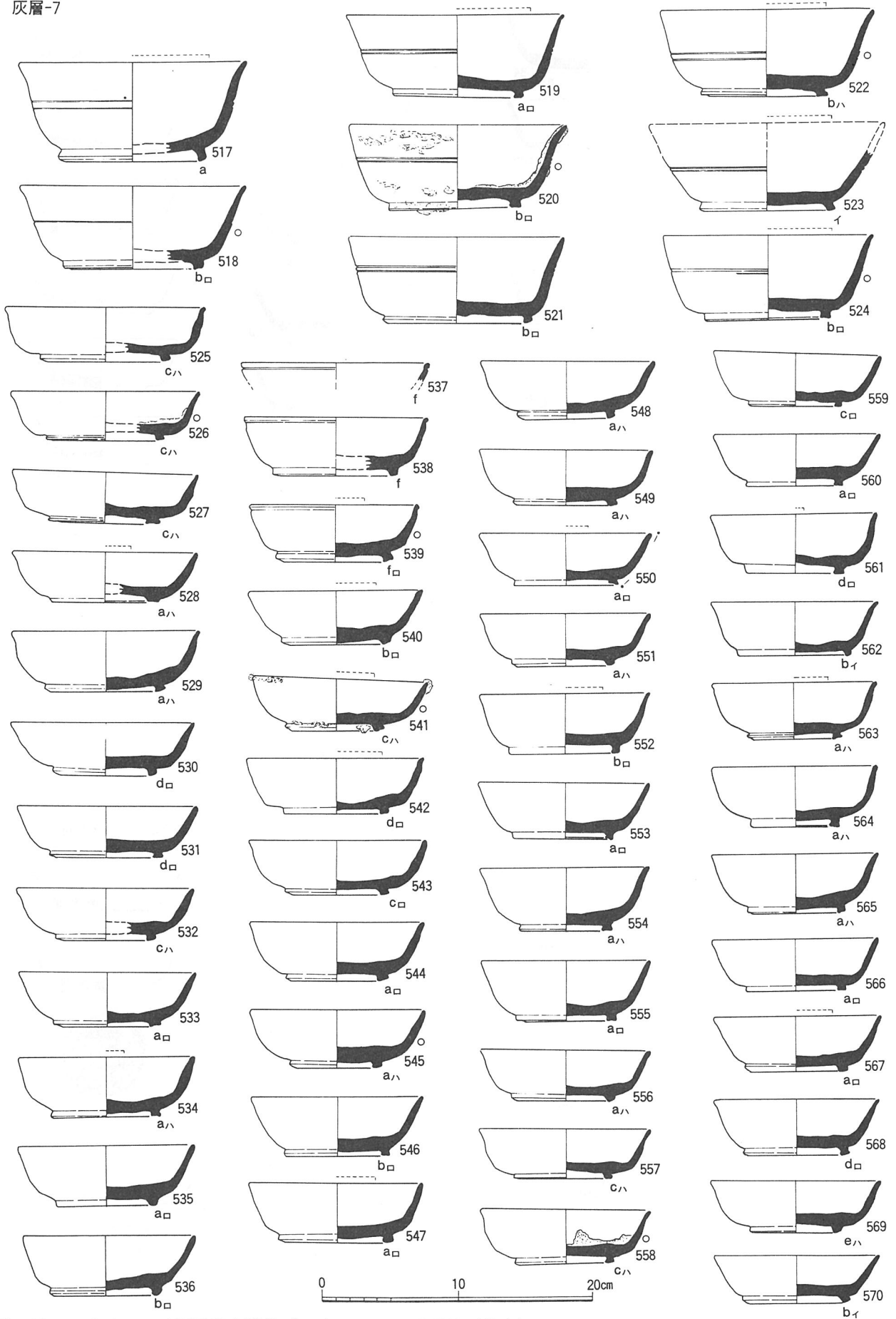
第93图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-6



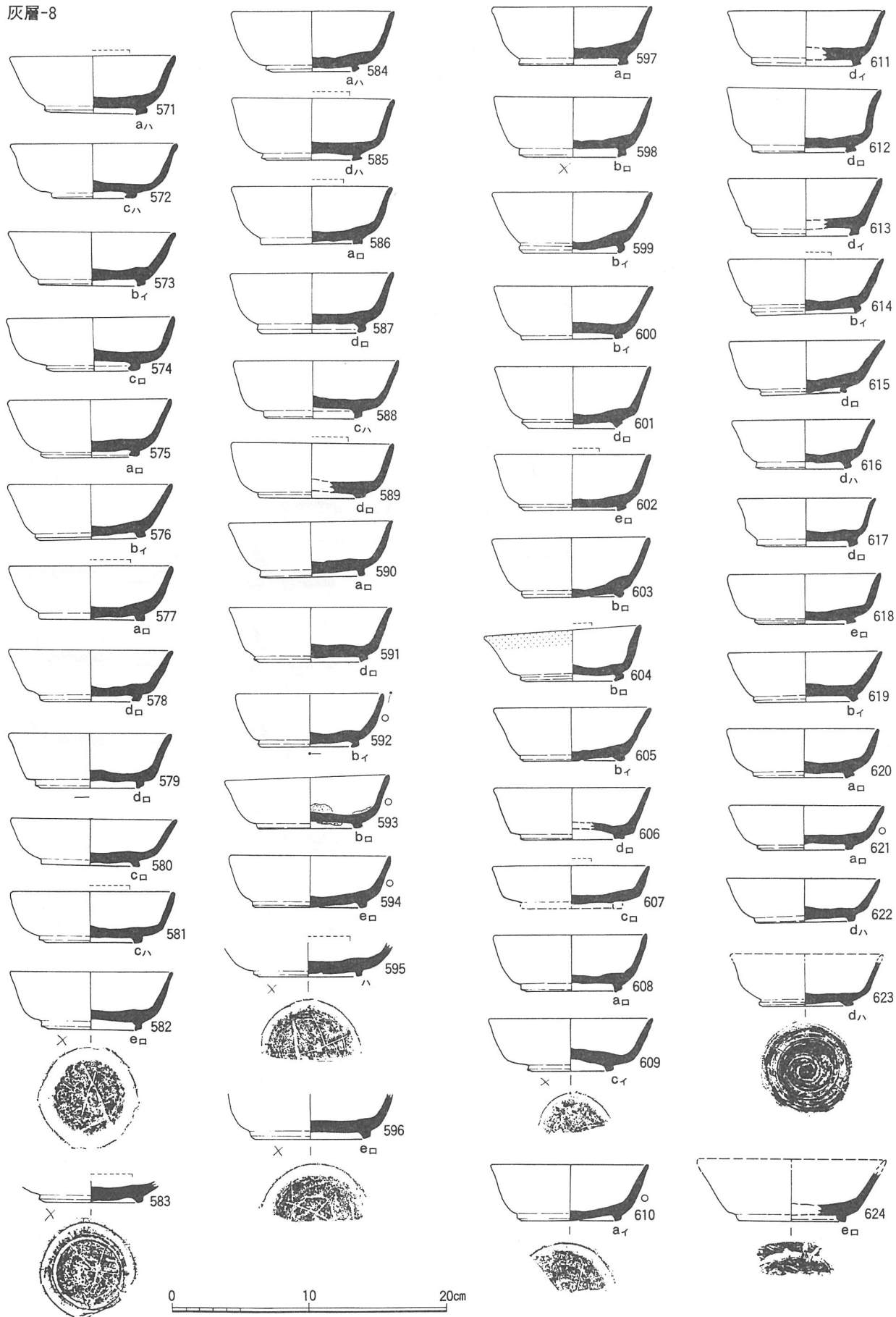
第94图 I 地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-7



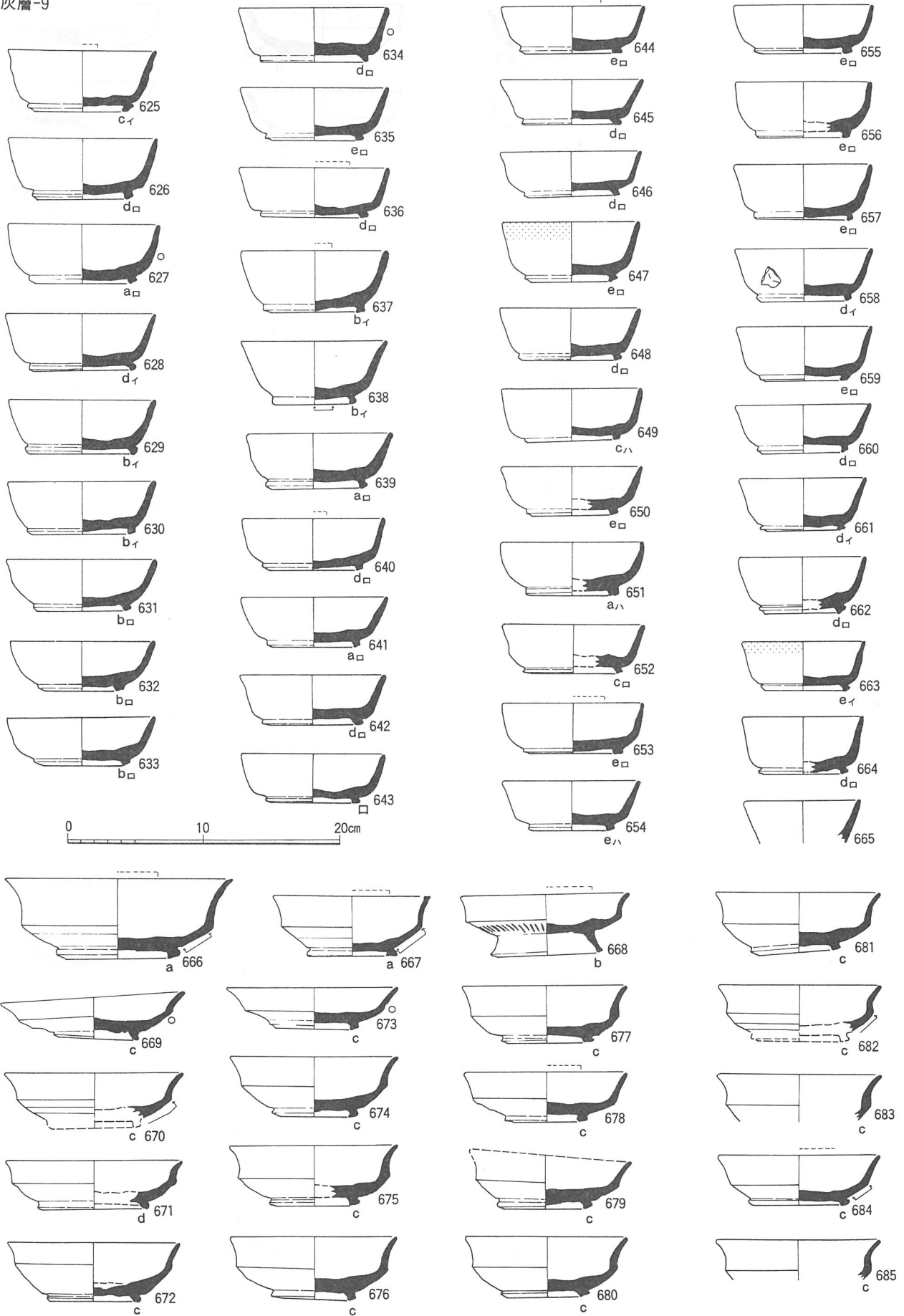
第95图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次焼成品 (烧台)

灰層-8



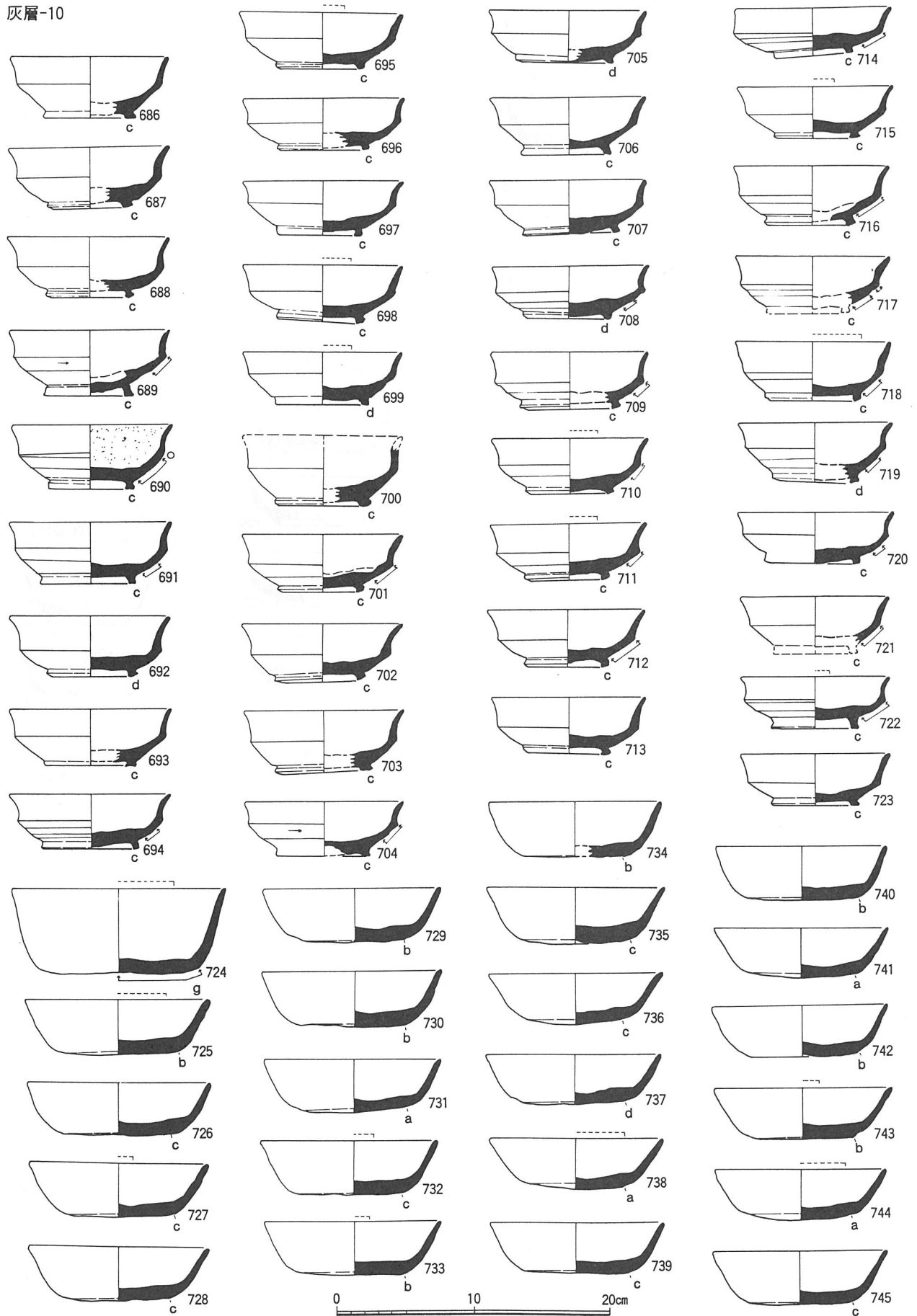
第96图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○2次烧成品 (烧台)

灰層-9



第97图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

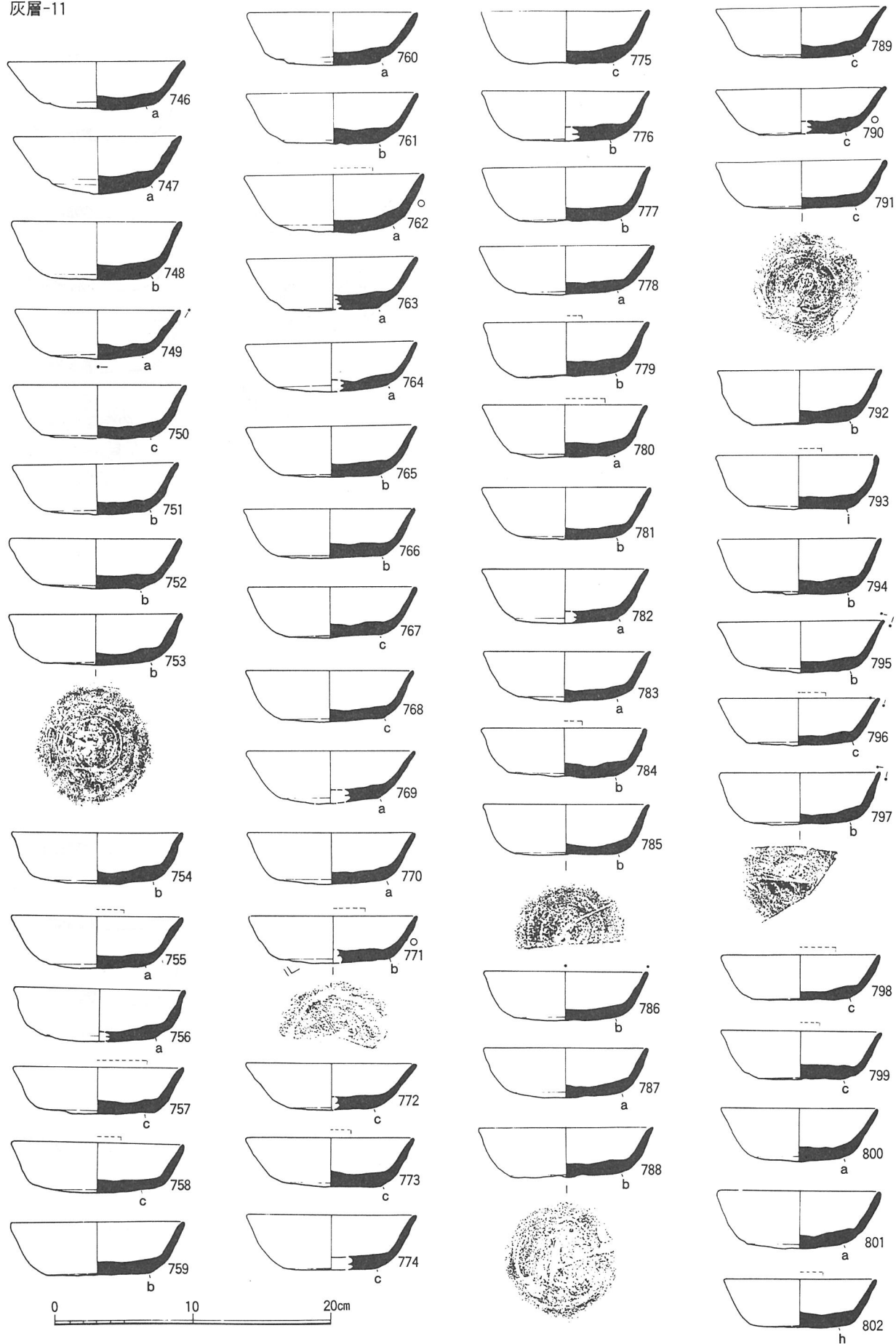
灰層-10



第98图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

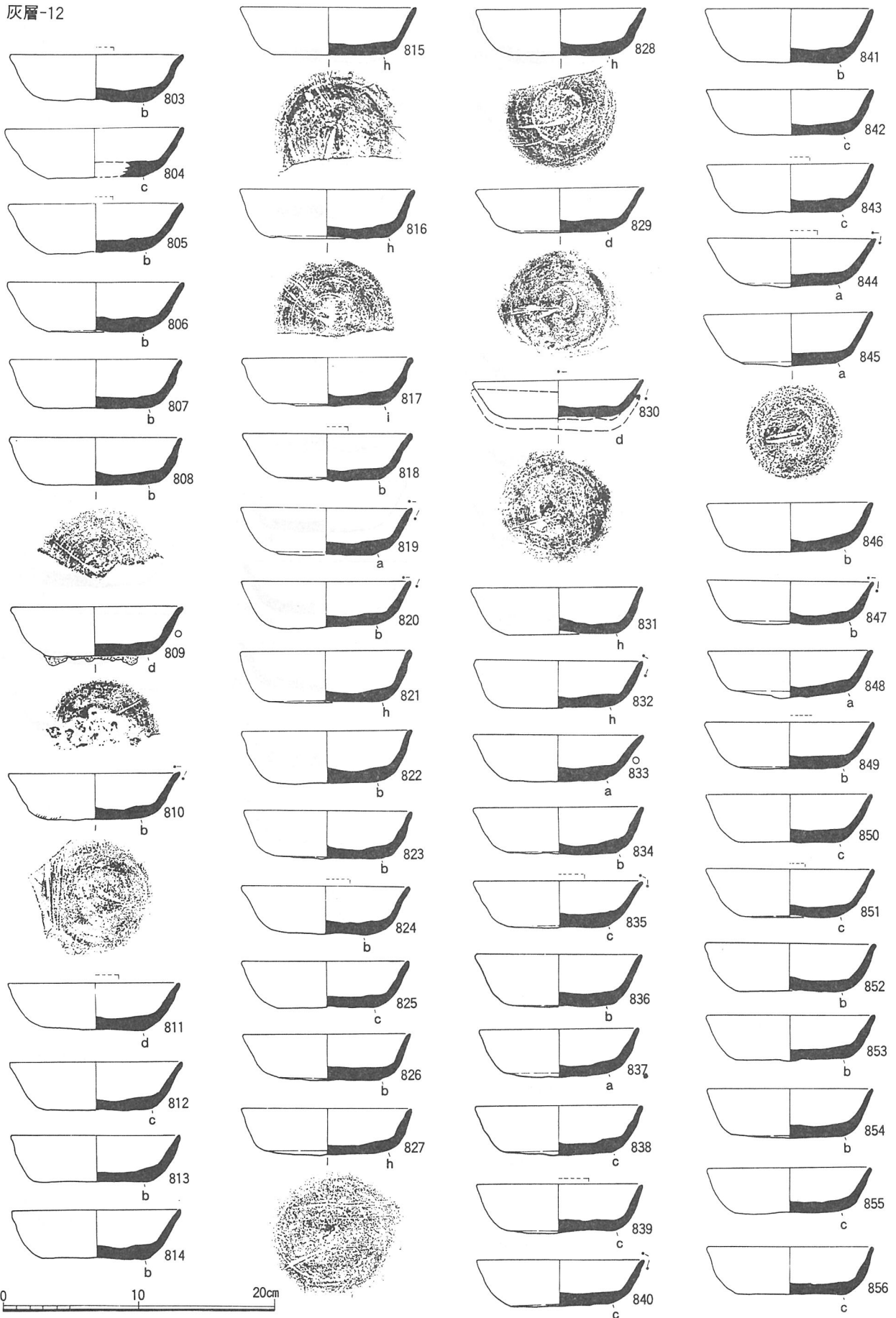


灰層-11



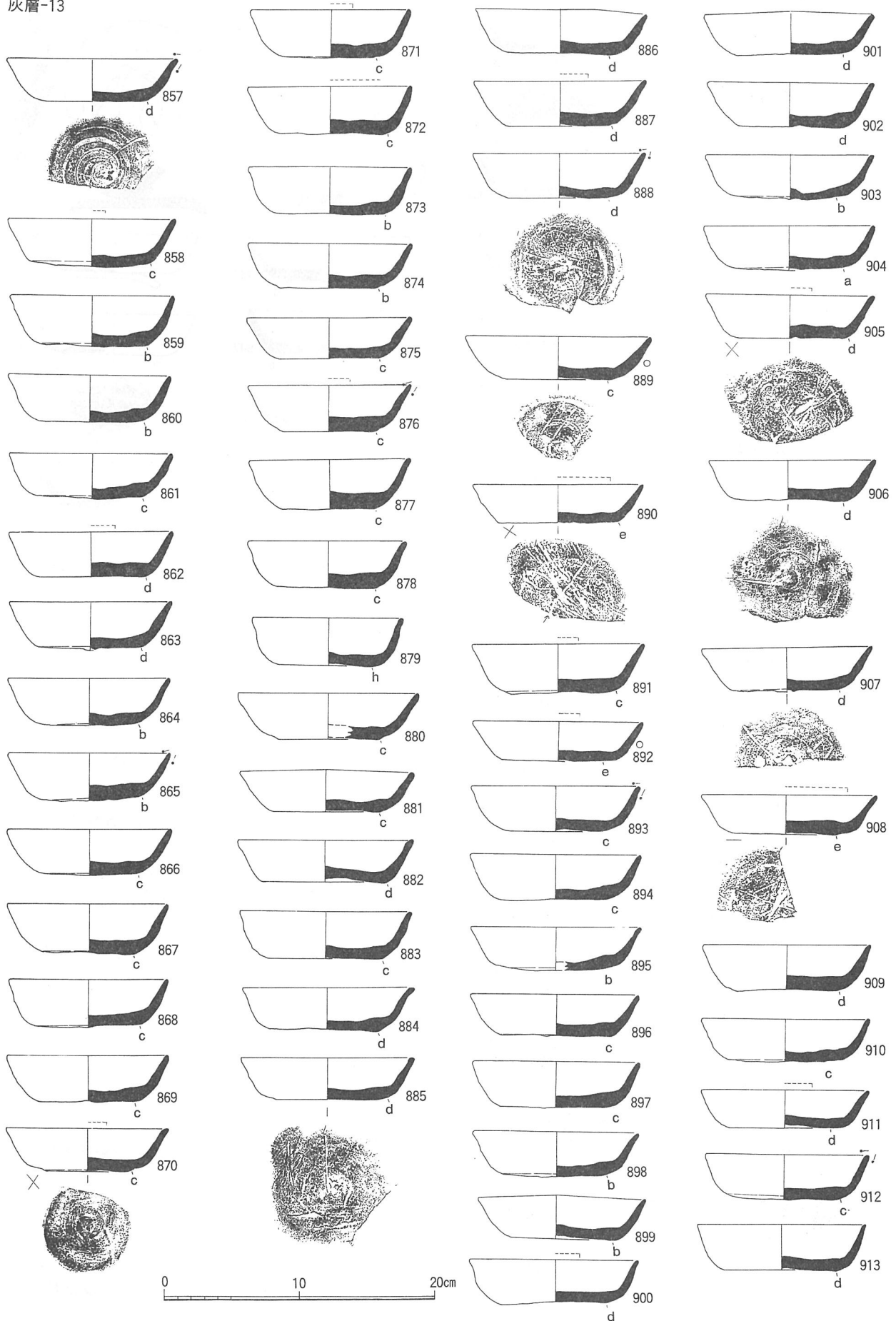
第99图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-12



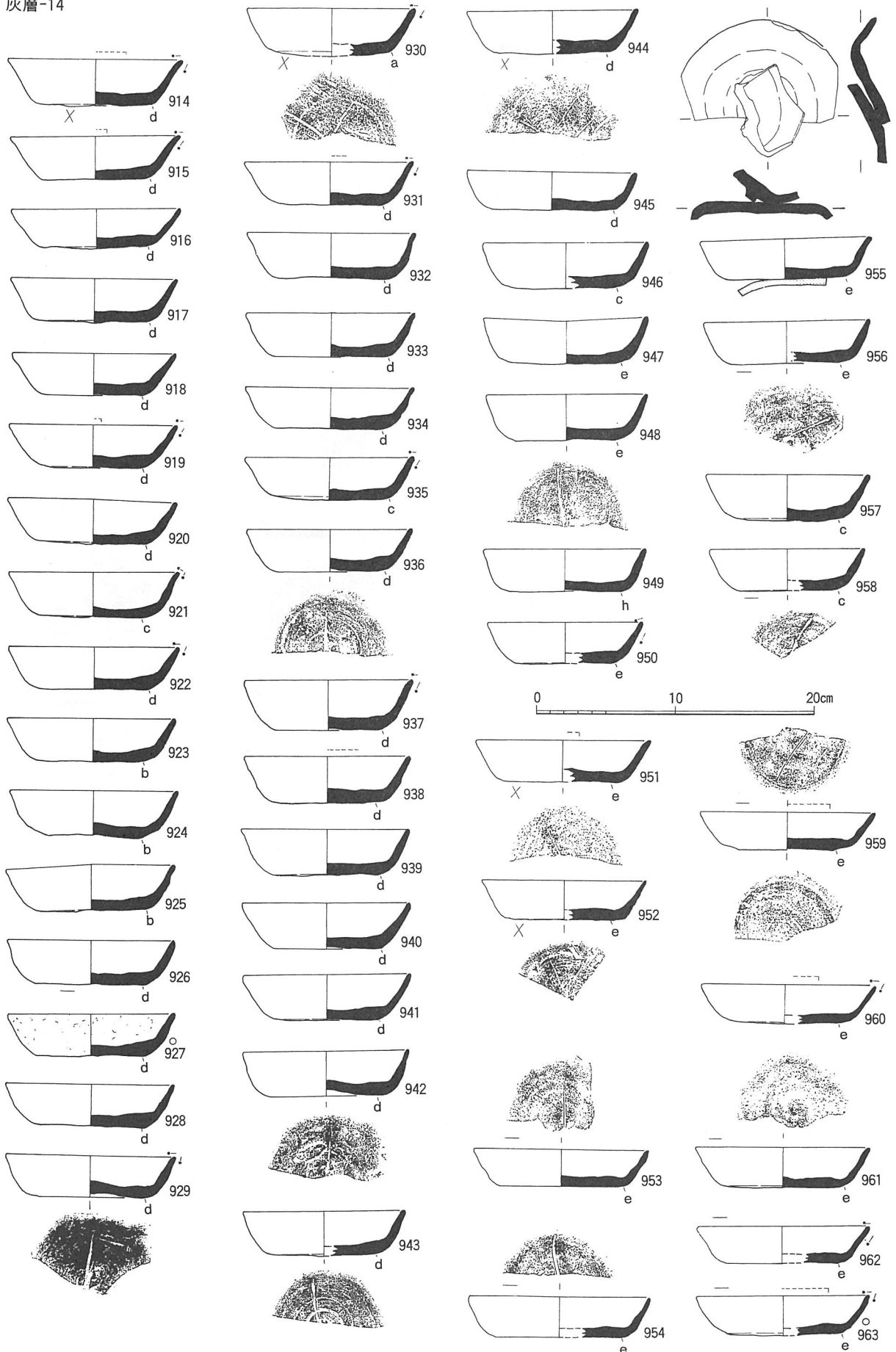
第100图 I 地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-13



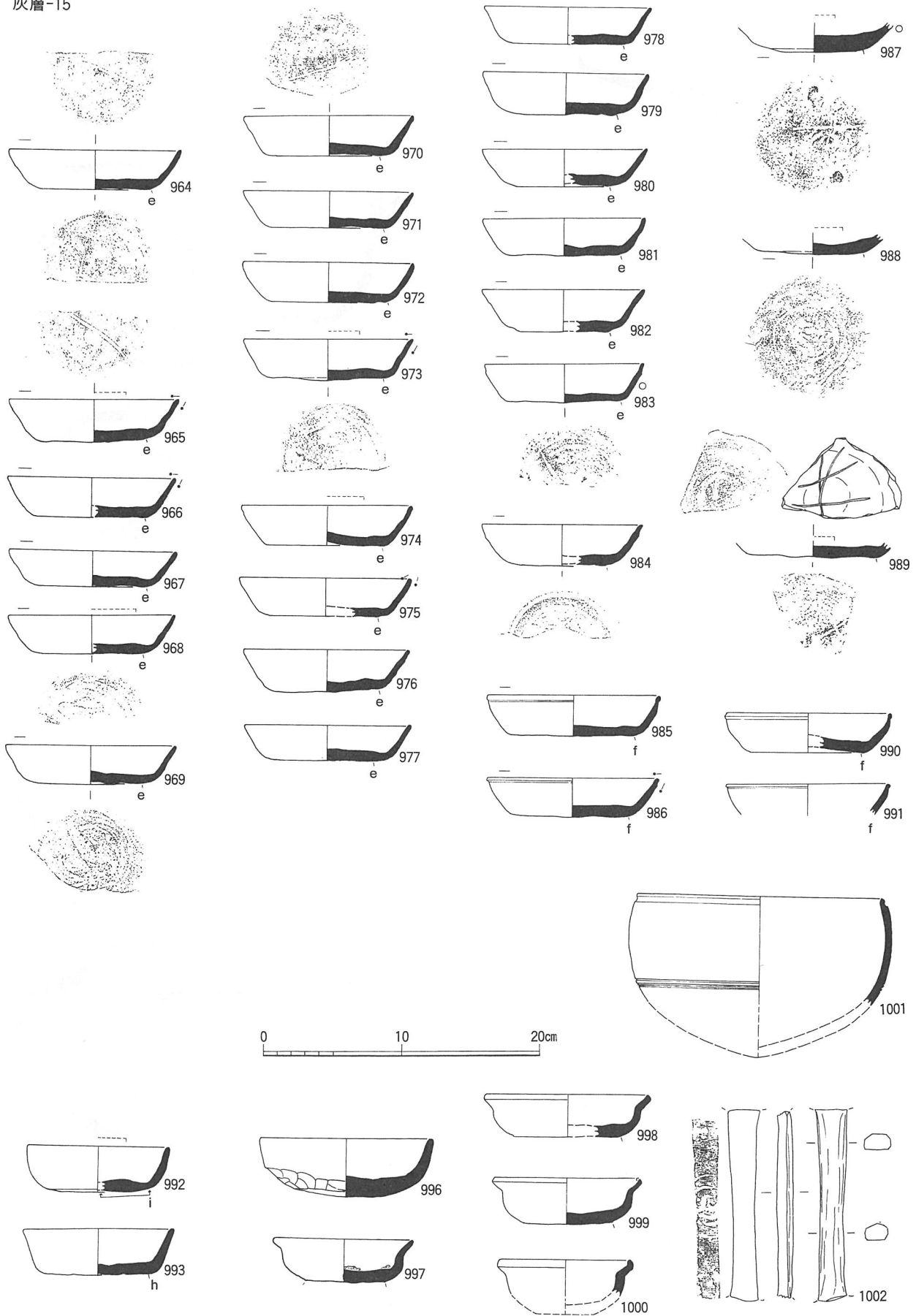
第101图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-14



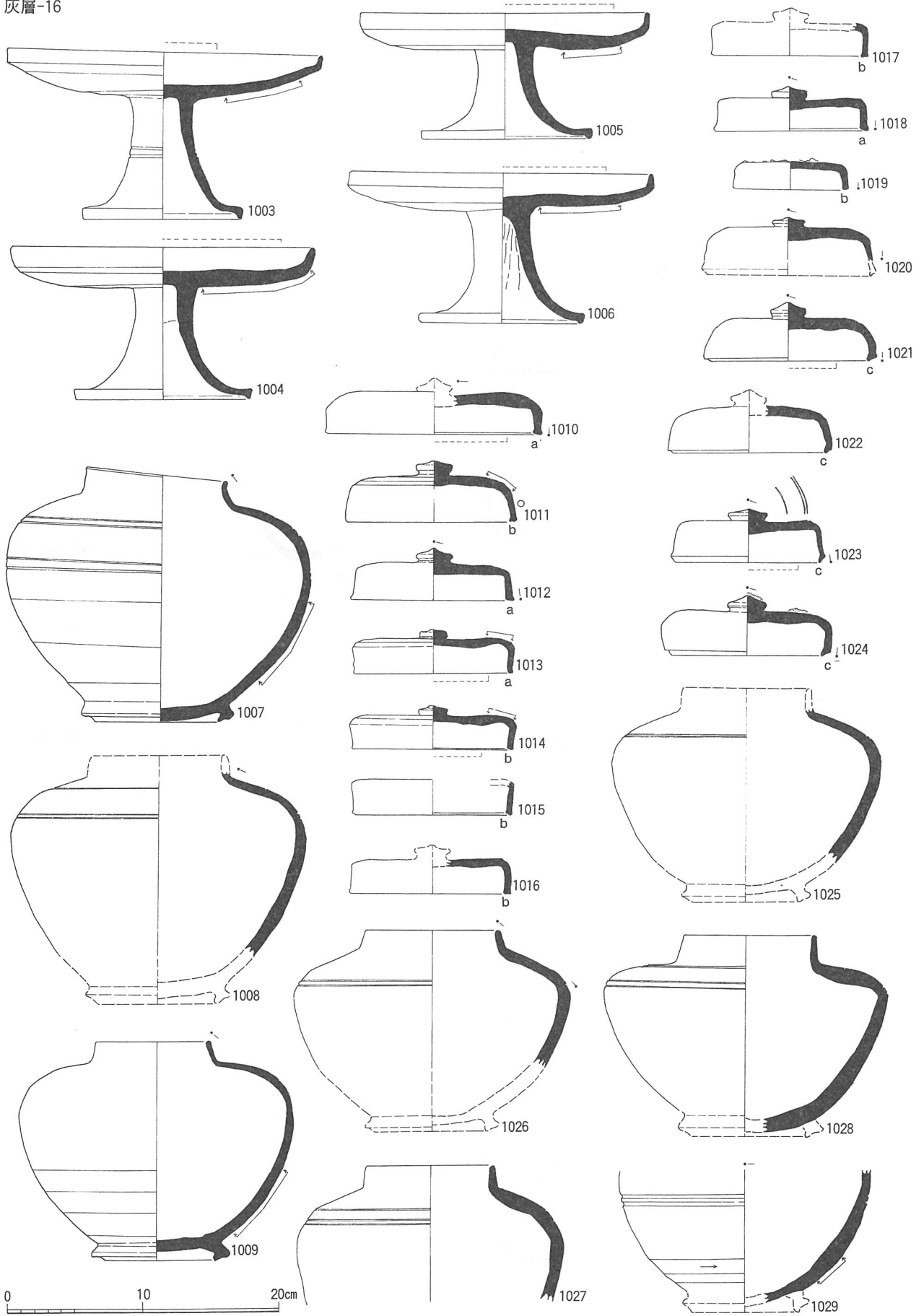
第102图 I 地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○ 2次烧成品 (烧台)

灰層-15



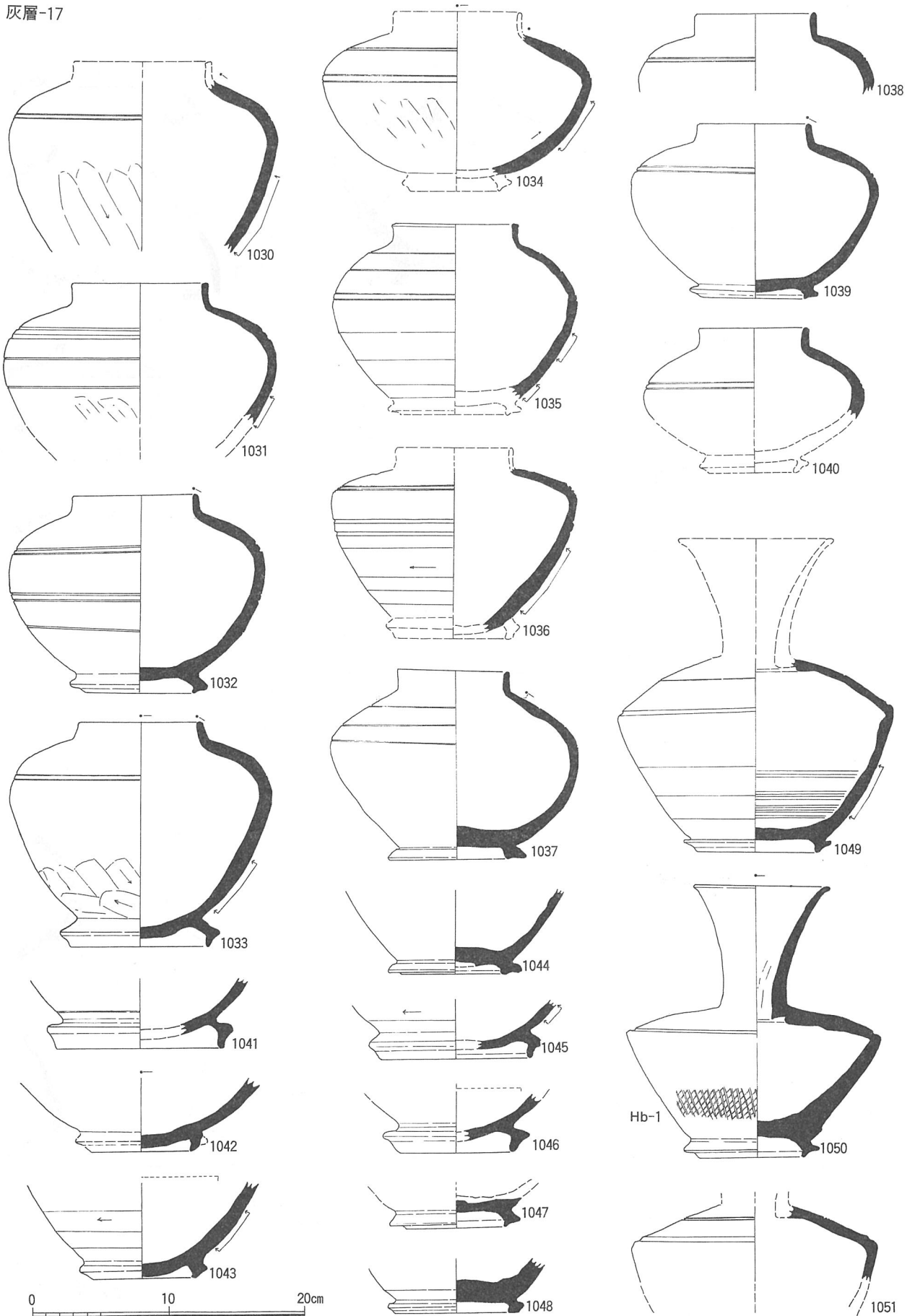
第103图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○2次燒成品(燒台), 994·995欠番

灰層-16



第104图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4) ○2次燒成品(燒台)

灰層-17



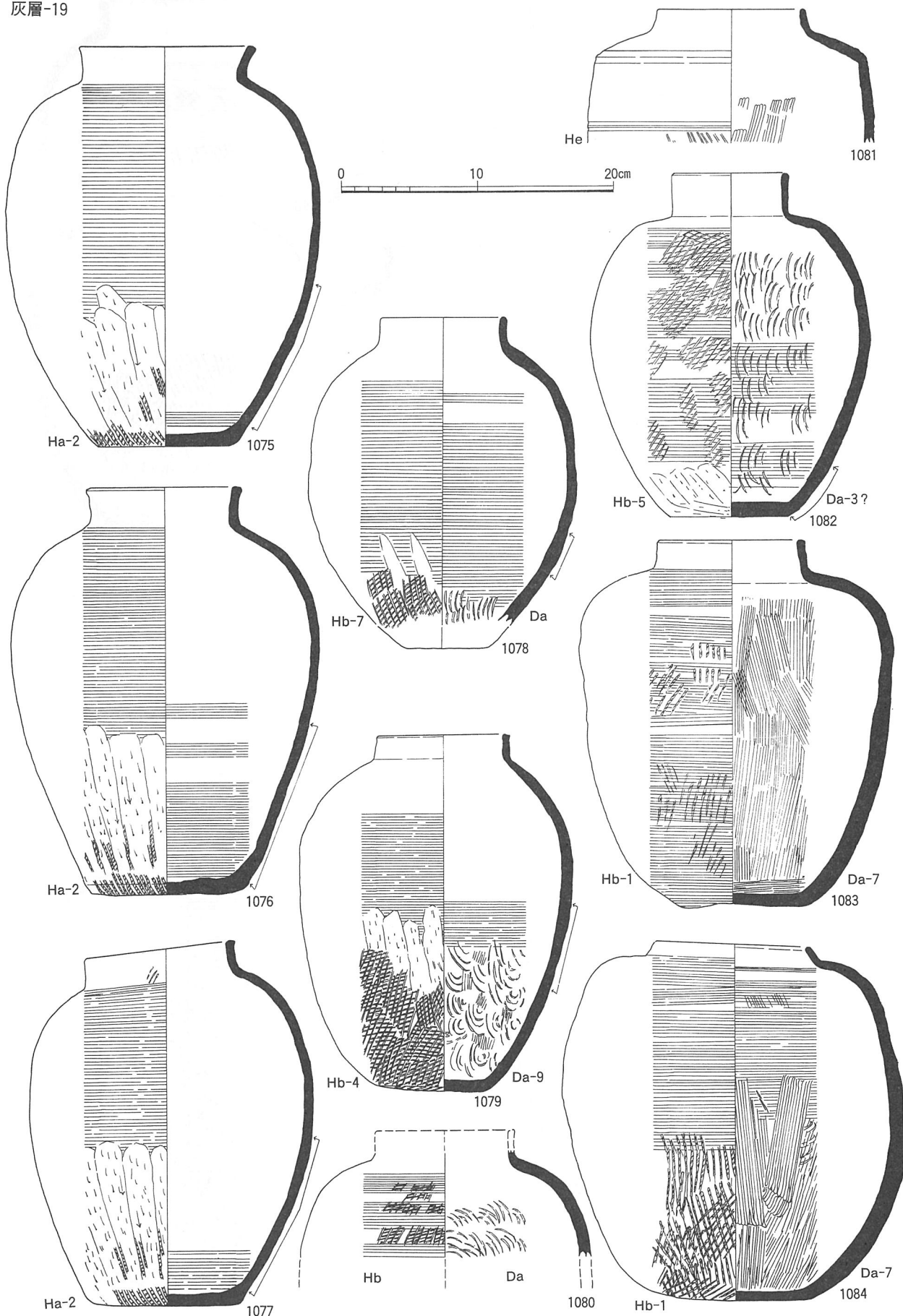
第105图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)

灰層-18



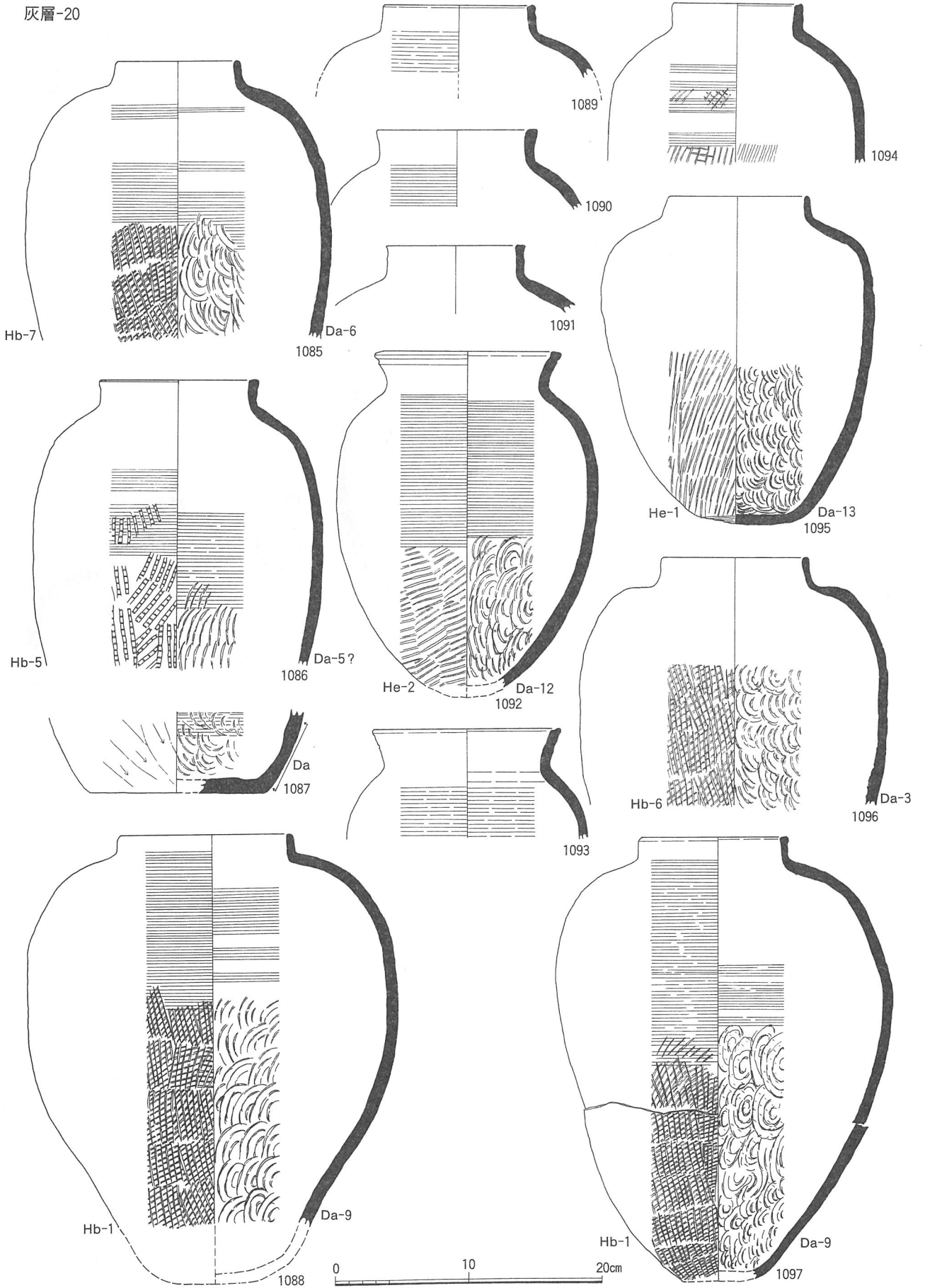
第106图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)





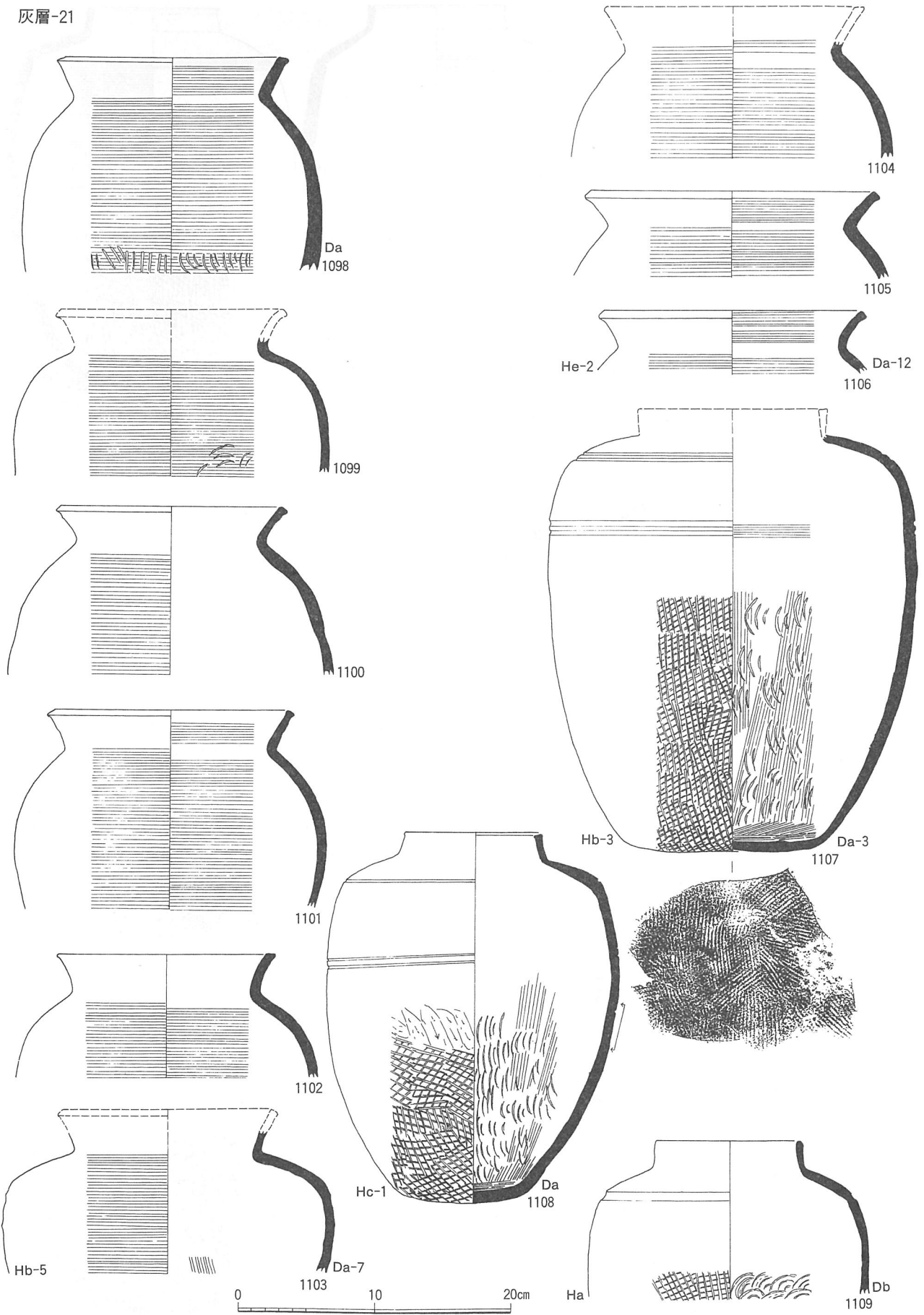
第107图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)

灰層-20



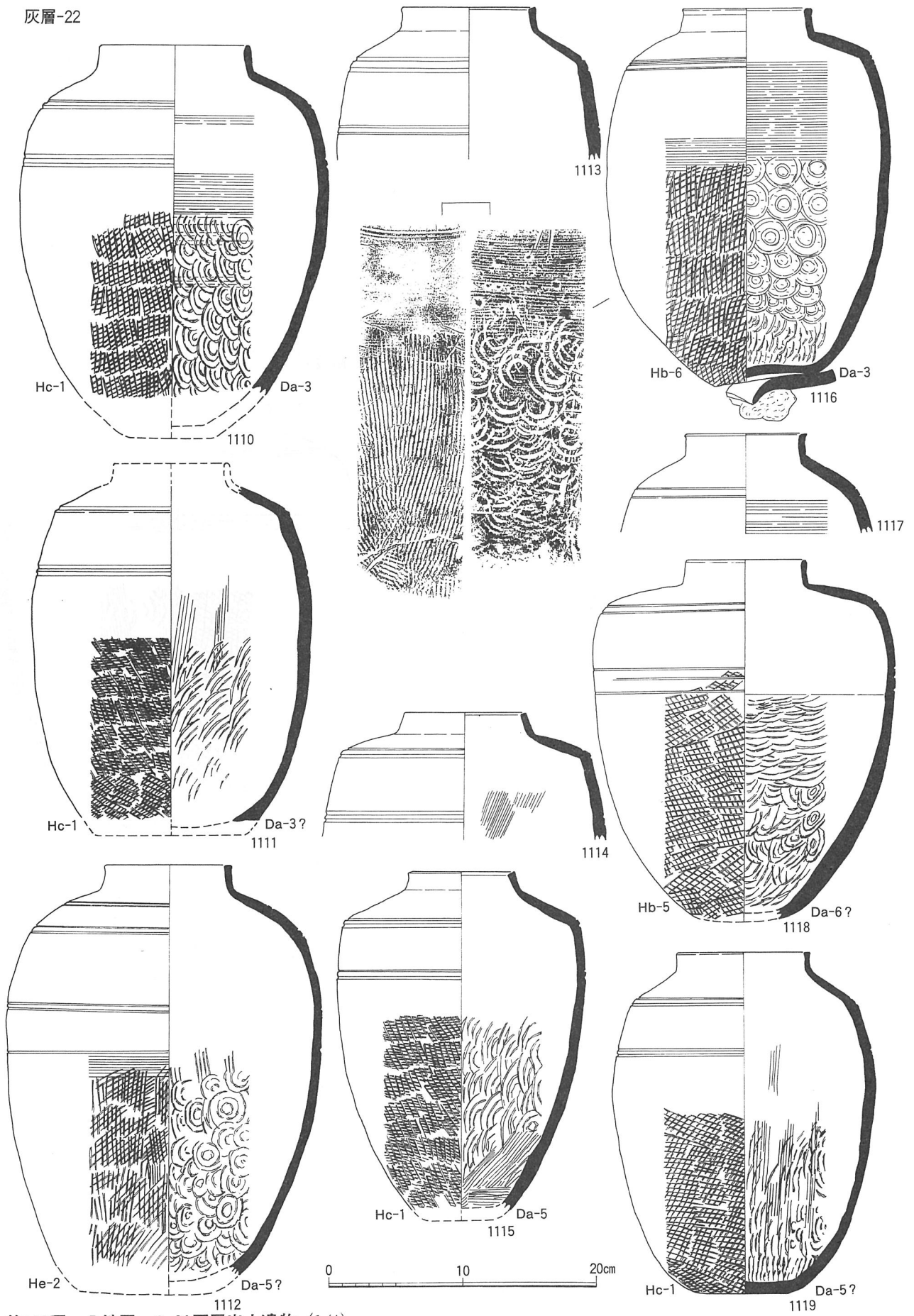
第108图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)

灰層-21

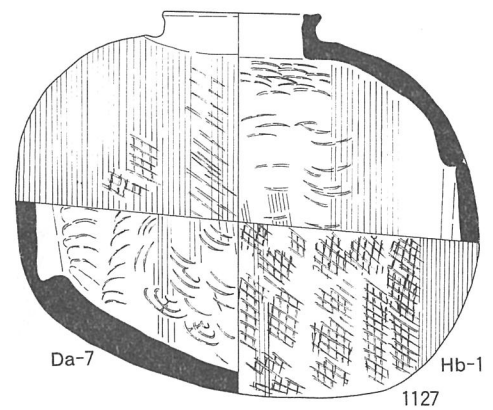
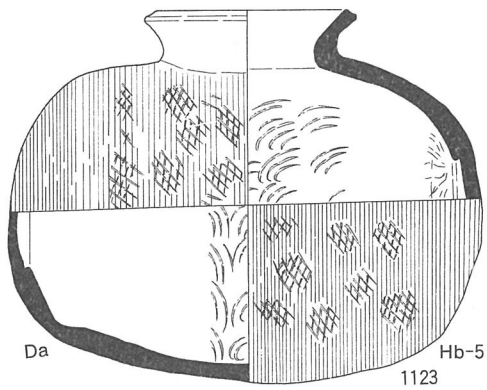
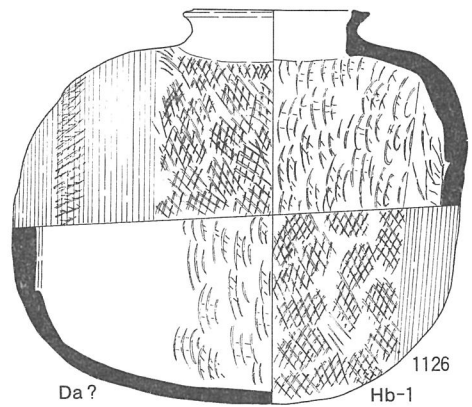
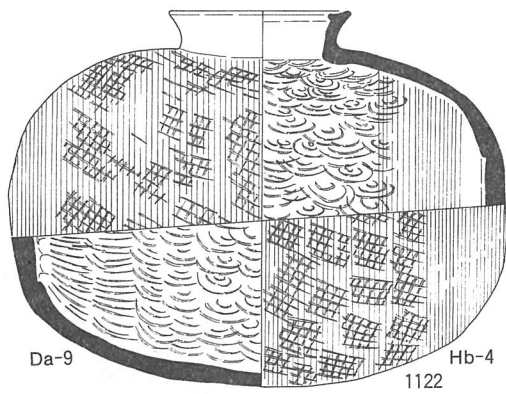
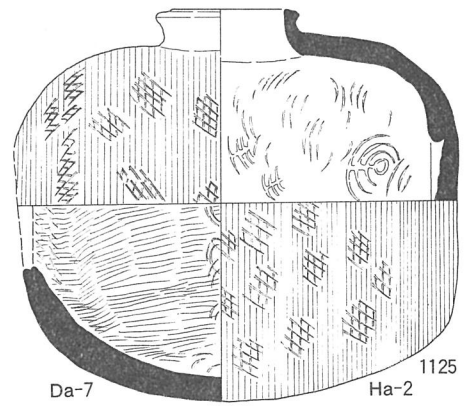
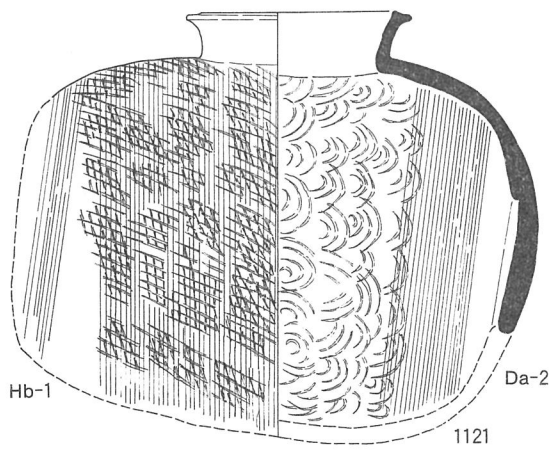
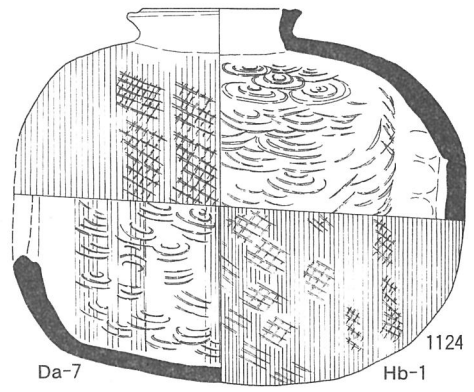
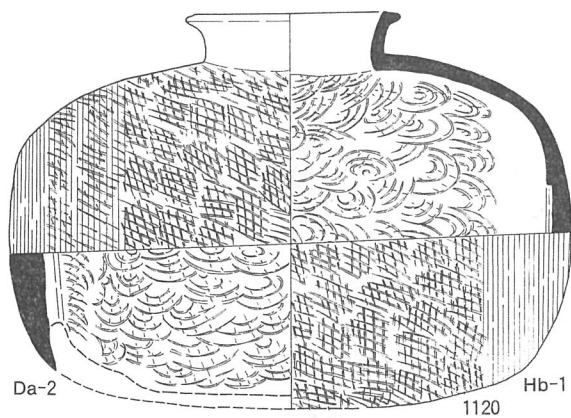


第109图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)

灰層-22

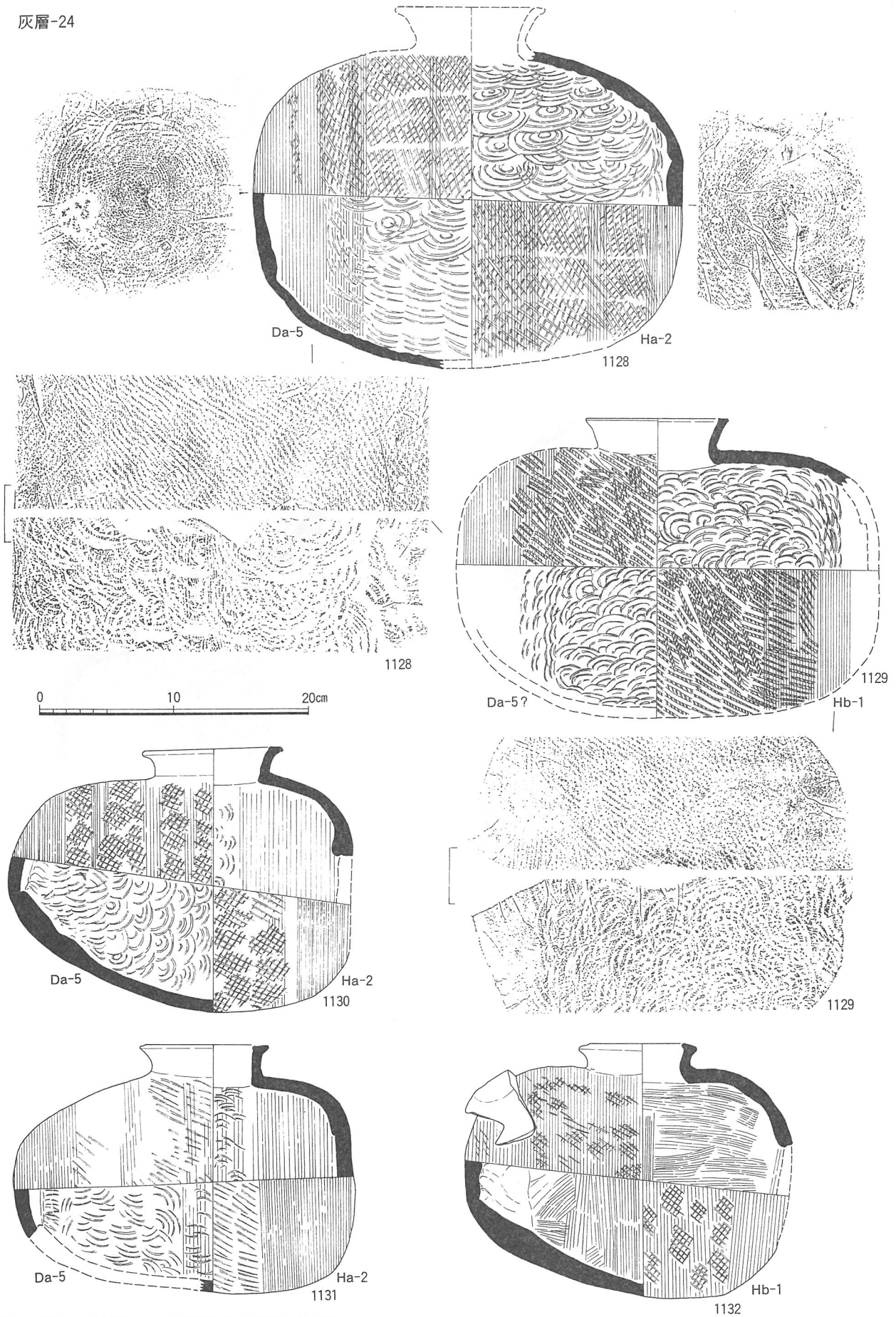


第110图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)

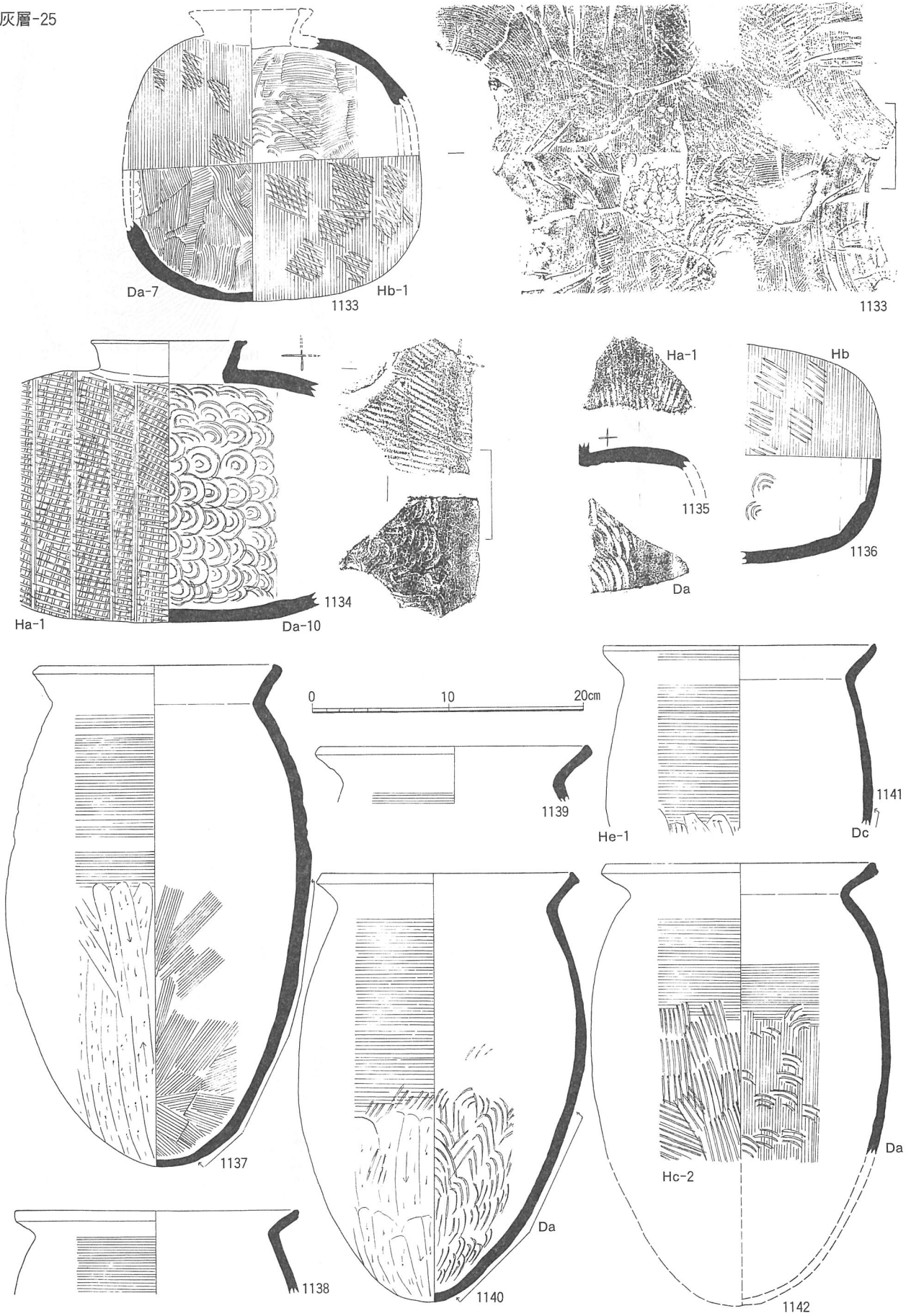


0 10 20cm

第111图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)

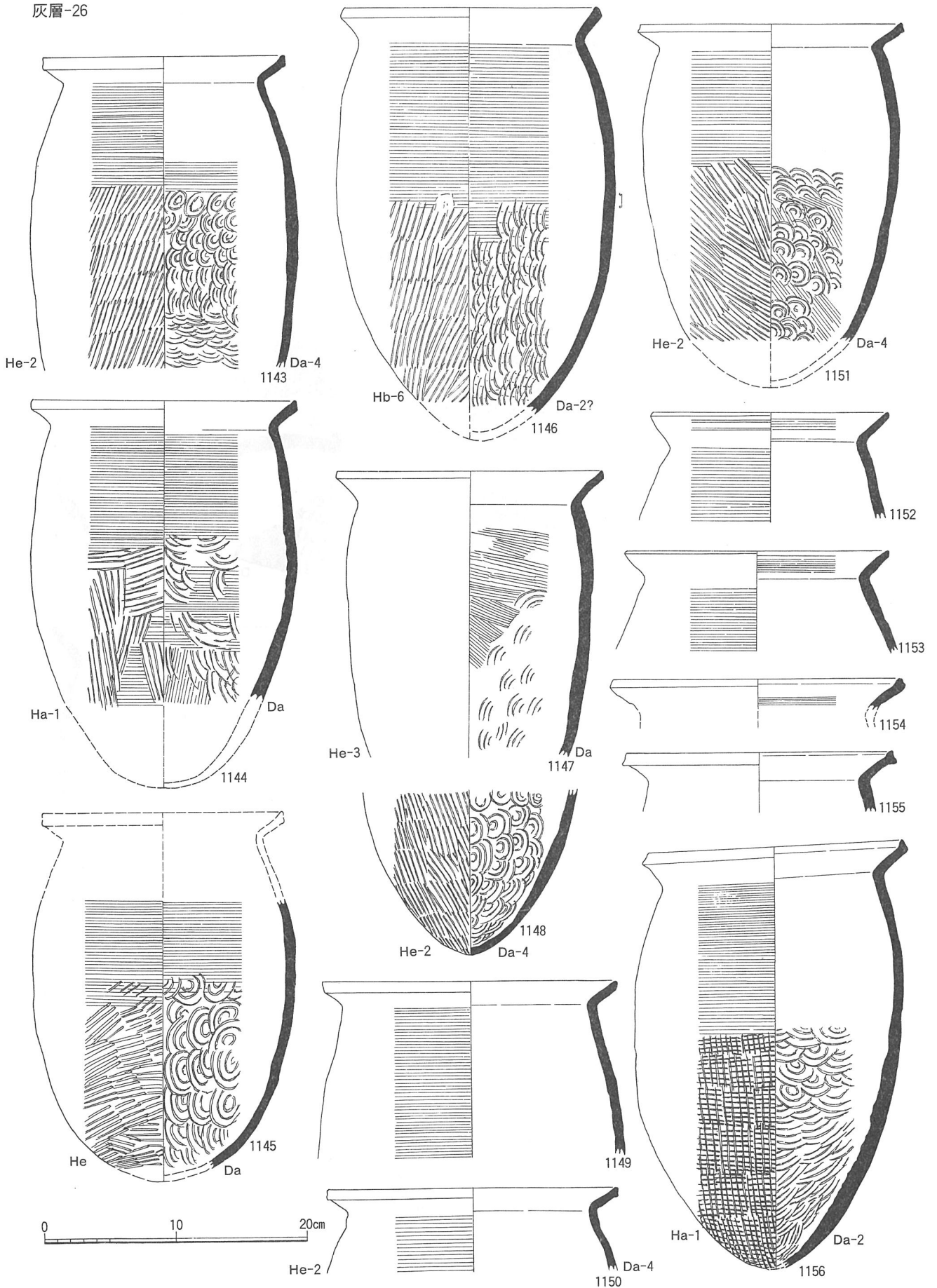


第112图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)



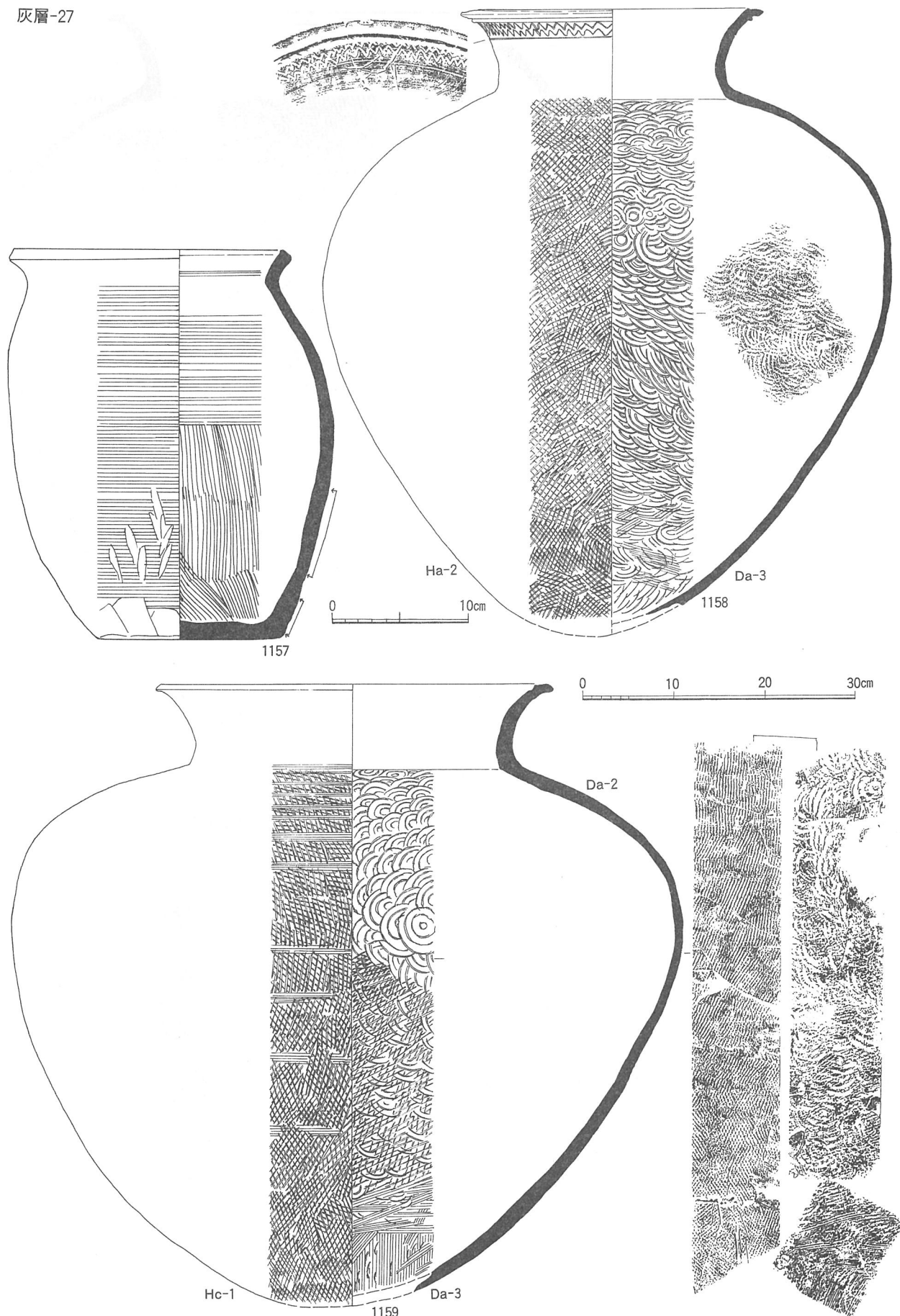
第113图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)

灰層-26



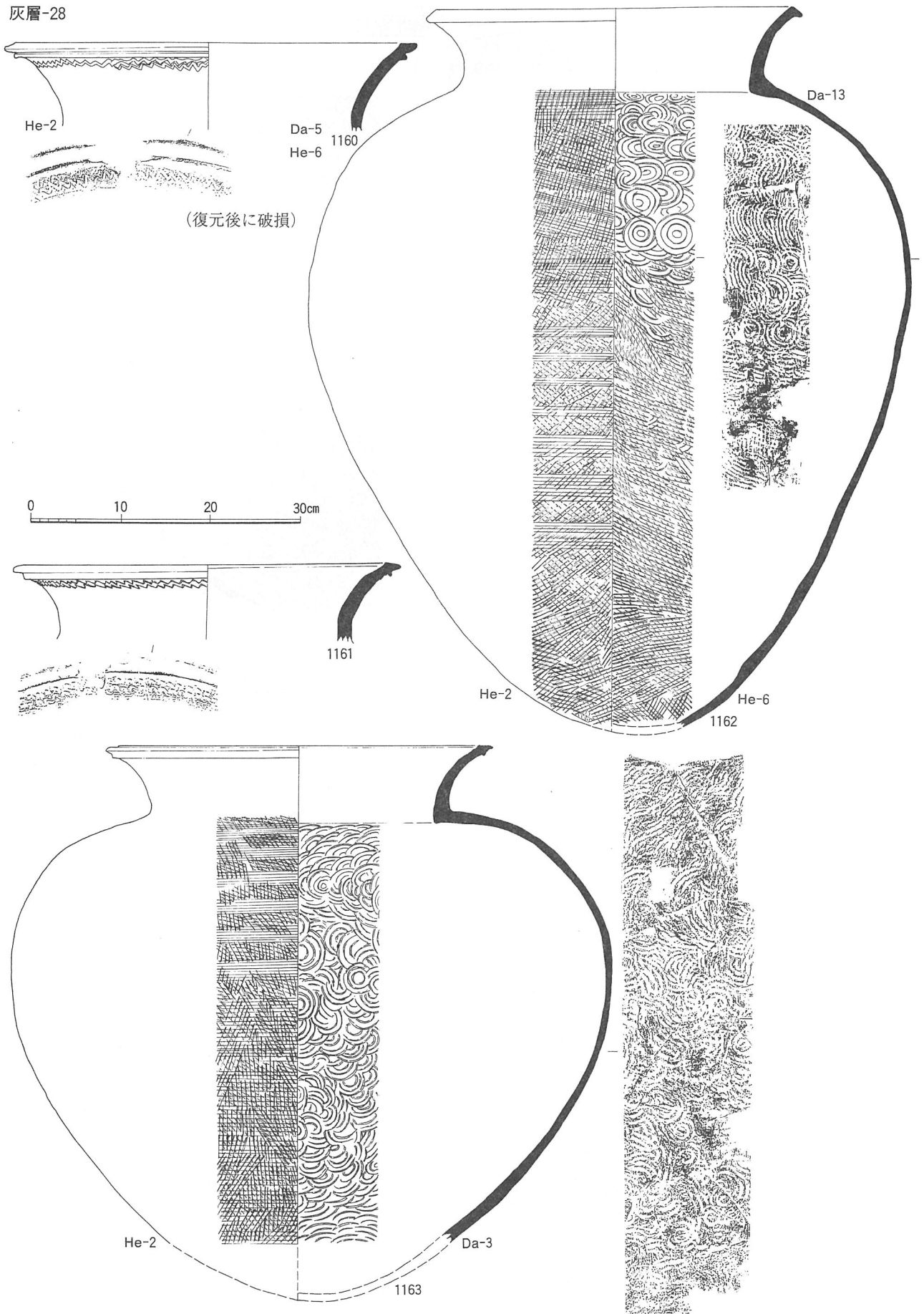
第114图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)



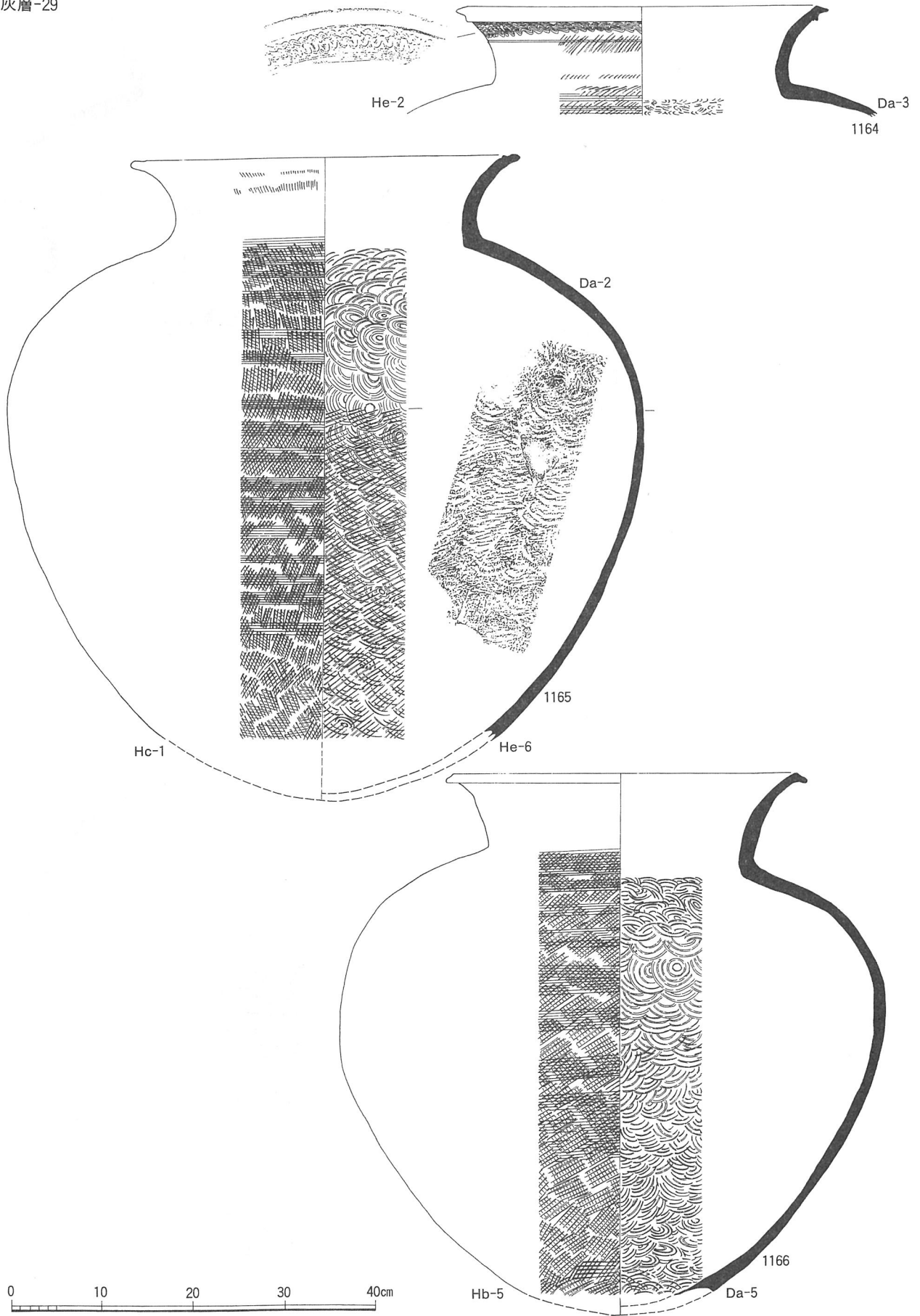


第115图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/6, 1157 : 1/4)

灰層-28

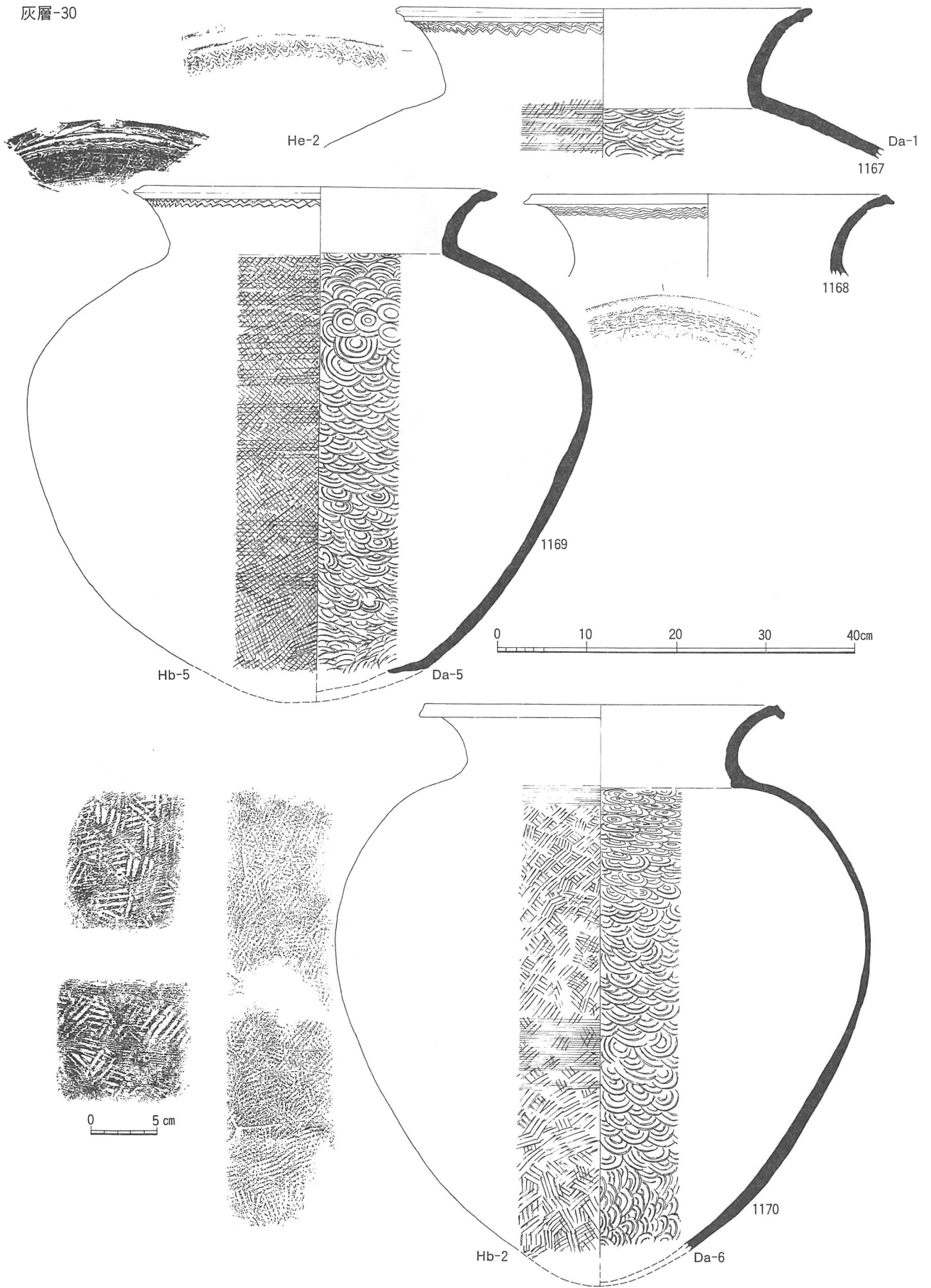


第116図 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/6)



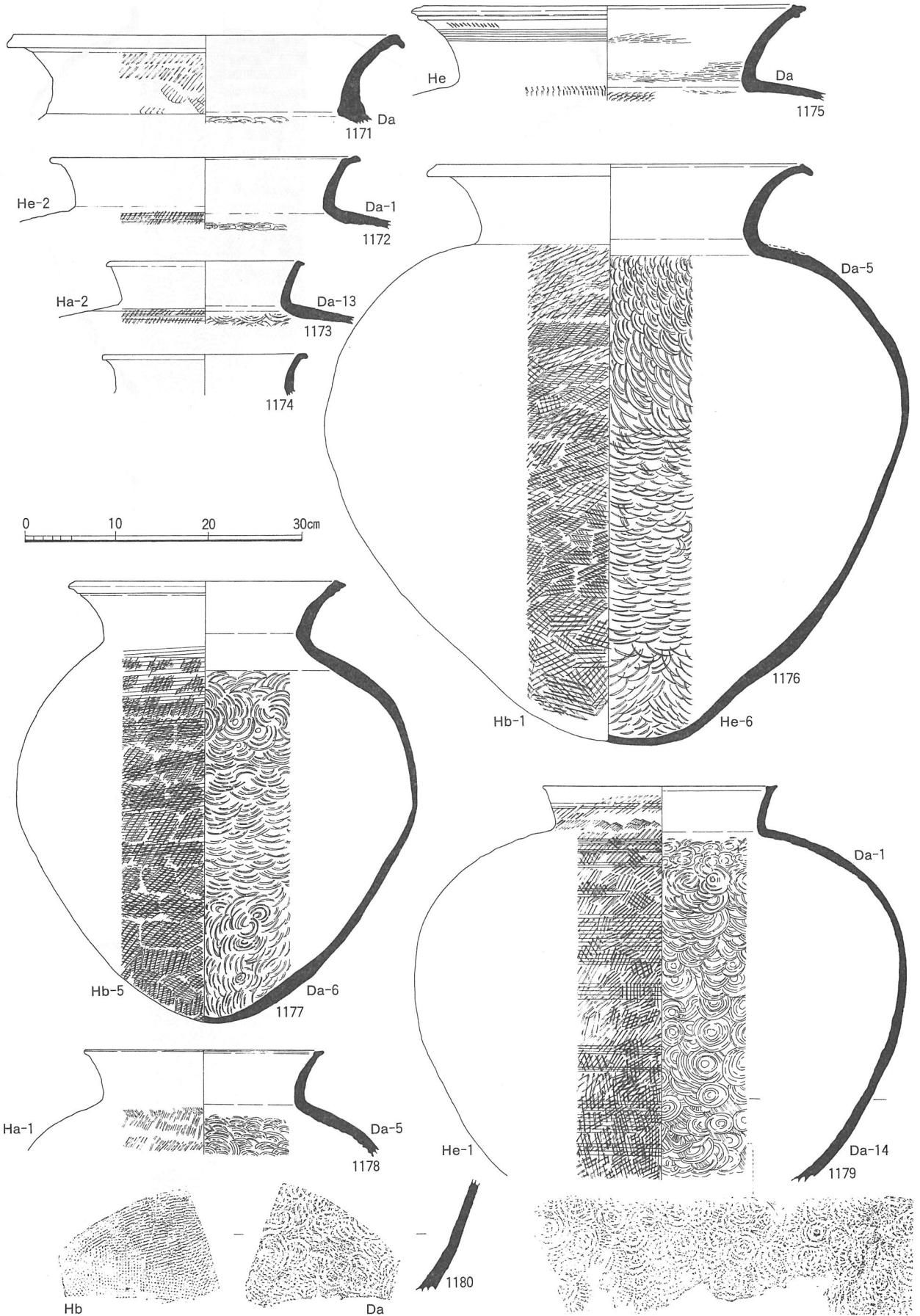
第117图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/6)

灰層-30

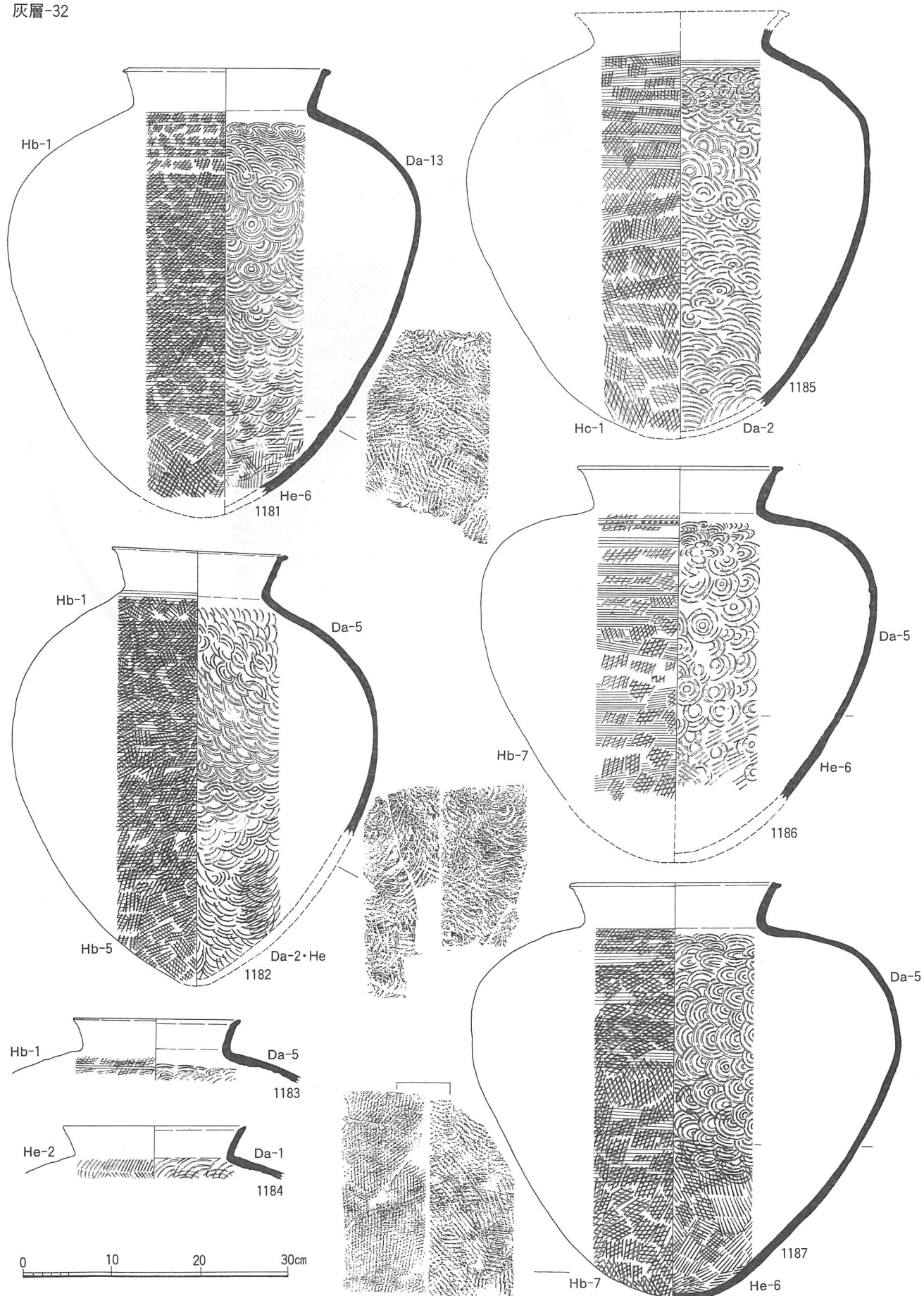


第118图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/6, 拓本: 1/4)

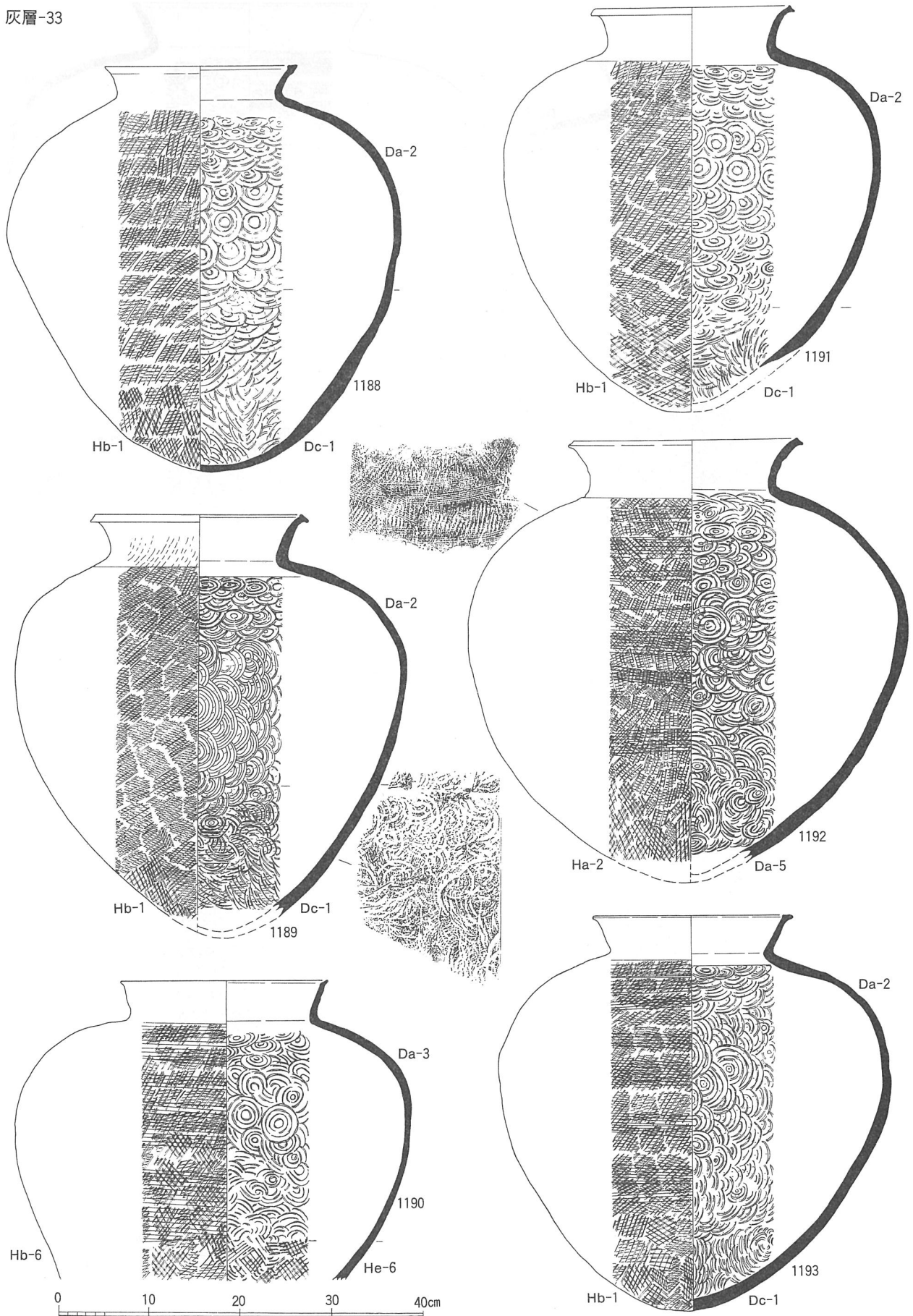
灰層-31



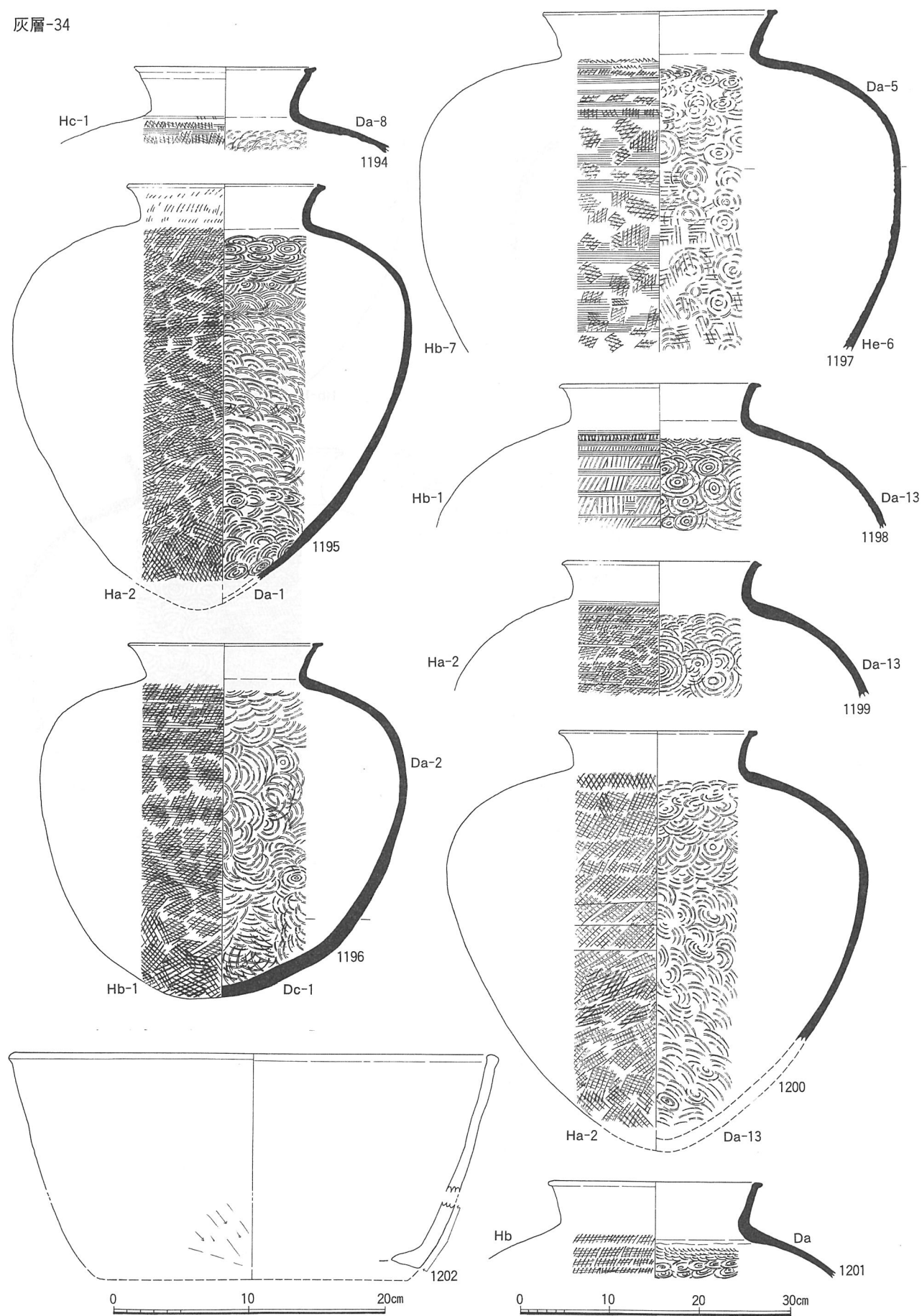
第119图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/6)



第120图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/6)

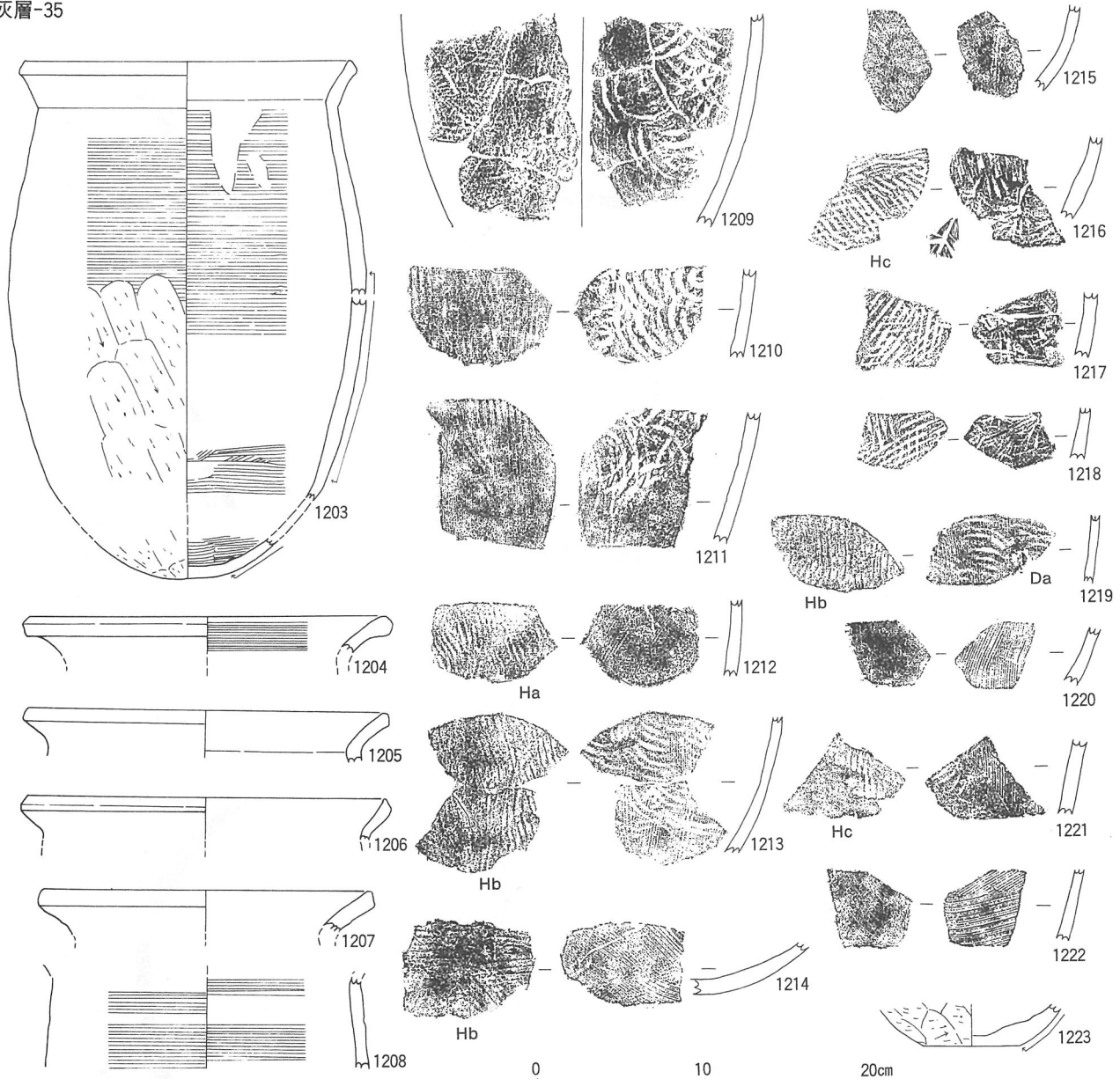


第121图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/6)



第122图 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/6, 1202:1/4)





第123図 I地区 S-01灰層出土遺物 (1/4)

表37 I地区 須恵器の重さ

(壺・甕の容量は頸部以下を計算)

No	器種	口径cm	器高cm	重量	残存	No	器種	口径cm	器高cm	重量	残存	容量cc	No	器種	口径cm	器高cm	重量	残存	容量cc
773	杯 A	12.0	3.5	184g	完形	1004	高杯	21.8	11.1	974g	○		1140	長甕	18.2	31.6	2.1kg	◎	5,651
903		12.2	3.3	155g	完形	1006		22.8	12.3	958g	○		1191	甕 B	21.0	44.3	9.1kg	◎	29,892
938		11.7	3.5	197g	完形	1050	長頸壺	10.0	19.8	1.4kg	◎	865	1196		21.5	39.0	7.9kg	◎	26,913
165	杯B蓋Ⅰ	18.8	2.3	450g	完形	1056	細頸壺	8.1	20.3	1.5kg	◎	1,408	1193		21.5	43.3	8.5kg	◎	31,672
205		16.7	3.8	304g	完形	1054	広頸壺	16.5	19.2	1.9kg	◎	1,624	1182		19.3	49.2	8.9kg	△	32,668
300	杯B蓋Ⅱ	13.6	3.1	187g	完形	1074		14.2	21.2	1.8kg	◎		1189		22.5	(47.0)	6.6kg	○	(33,386)
318		13.5	2.0	188g	完形	45	壺蓋	11.4	3.8	185g	○		1188		21.0	44.7	9.0kg	◎	33,405
382		12.7	変形	161g	完形	1018		11.6	3.3	144g	○		1195		21.5	(49.6)	9.1kg	◎	36,491
430		12.0	2.3	129g	完形	1032	短頸壺	8.7	14.5	1.0kg	△	1,763	1185		(23.7)	(48.3)	9.2kg	△	(41,789)
478	杯 B I	16.8	6.7	567g	○	1037		8.0	13.9	830g	△	1,473	1181		21.7	(51.2)	9.8kg	△	(43,093)
485		16.1	7.0	577g	完形	1039		8.0	12.8	941g	△	1,462	1187		23.8	47.3	9.3kg	△	44,123
488		16.2	6.4	550g	○	1075	直口壺	12.2	29.4	2.1kg	○	6,954	1192		24.3	(49.4)	9.4kg	△	44,624
509		15.1	6.9	487g	◎	1079		9.2	25.0	2.2kg	◎	4,474	1177	甕 A V	27.6	48.1	11.3kg	△	33,934
519		16.0	6.1	422g	◎	1083		10.5	26.6	3.3kg	◎	5,886	1166	IV	37.0	(55.8)	17.8kg	△	(68,028)
530	杯 B II	13.3	3.9	242g	△	1084		11.3	26.1	3.2kg	◎	7,383	1170	IV	37.2	(61.4)	23.3kg	△	(76,359)
556		12.4	3.8	202g	○	1095		10.3	24.5	2,177g	◎	4,312	1169	III	37.8	(58.5)	23.0kg	△	(91,548)
631		10.8	3.8	160g	○	1112		9.4	(32.0)	2.3kg	◎	(8,285)	1176	III	40.0	62.0	18.3kg	△	99,422
666	稜椀Ⅰ	16.7	6.0	380g	○	1122	横瓶	17.3	26.3	1.9kg	◎	3,853	1158	III	30.0	(68.4)	19.8kg	◎	107,517
707	稜椀Ⅱ	11.3	4.1	193g	○	1123		17.1	25.0	1,944g	○	3,285	1163	III	40.3	(60.6)	19.7kg	◎	(116,625)
710		11.3	4.1	180g	○	1124		18.3	24.0	2.3kg	○	3,639	1165	II	38.5	(71.2)	26.4kg	△	(142,079)
711		11.2	4.1	168g	◎	1125		19.3	23.2	3.2kg	◎	3,698	1159	II	40.6	69.0	28.3kg	○	150,185
715		11.2	3.8	143g	○	1127		18.7	24.5	2.9kg	◎	3,669	1162	II	40.2	(79.5)	19.7kg	△	151,429
1003	高杯	22.8	12.3	832g	△	1130		17.6	26.4	2.0kg	○	3,379	1235	I	47.2	85.8	43.8kg	○	260,066

・横瓶の口径は体部の直径を、器高は長さを示す。◎はほぼ完形、石膏が少ない。○石膏がやや多い △石膏が多い

灰層-36



第124図 I地区 S-01灰層出土遺物 (1224~1228 : 1/4, 1229~1235 : 1/6)

#### 4 XV地区 出土遺物

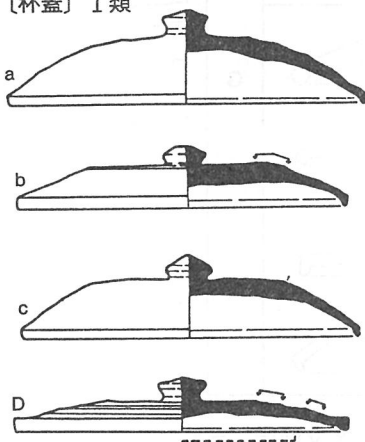
遺物は窯跡の操業に伴う須恵器が大部分を占めており、その器種には第125図のような各種の形態・法量がある。この他に製鉄炉の操業に伴う多くの鉄滓と若干の土師器があり、以下 第125図により形態分類を行い説明を行う。

##### (1) 杯類の形態分類

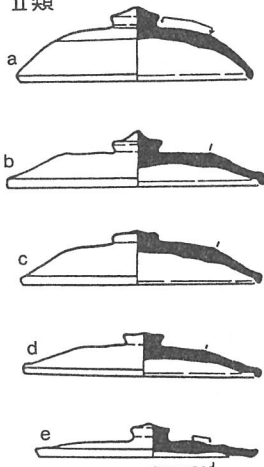
**杯蓋** 蓋は杯身の法量分布図から見ると次の二つになる。Ⅰ類は口径が19.0~14.6cmの大きさで、Ⅱ類は14.3~10.3cmのものである。これらの形態は便宜上5つの形態に分類できるが、分類の内容はⅠ地区のa~dと同様である。aは天井部の器高が高く笠形をなすもの。bは天井部を平坦に成形し、頂部から口縁部にかけての屈曲が角張るもの。cは天井部がほぼ平坦で頂部から口縁部にかけて緩やかに屈曲するもの。dは器高が低く全体に扁平な形態のもの。eは器高が低く円盤状をなし、口縁部が水平に近く横にのびて端部もわずかに肥厚させ面取りするもの。Ⅰ種の外面は切り離し後につまみを付け、ナデ及びロクロナデをしたものと二から三面のヘラ削りするものがあり、天井部内面にナデを加えている。

**杯B** Ⅰ類の法量は、口径18.8~13.6cmで器高が7.7~4.7cmである。Ⅰ類には体部中程に沈線を巡らすものと沈線を引かないものがある。形態ではa・b・cの三つに分類した。aは口縁部が大きく外反するもの。bは口縁部が少し外反するもの。cは口縁部がわずかに外傾するもの。Ⅰ種の器面調整は底面をヘラ切り後ナデを行い、更に入念にヘラ削りするものもある。体部はロクロナデを施して内底面の広い範囲をナデ調整している。

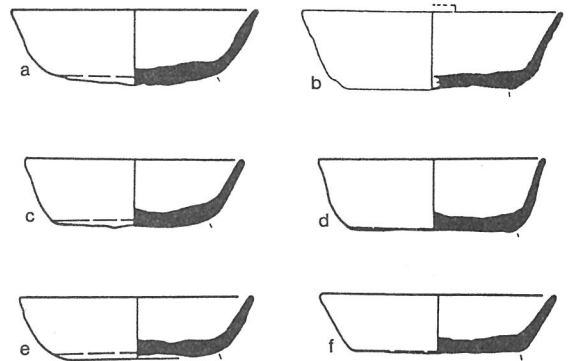
〔杯蓋〕Ⅰ類



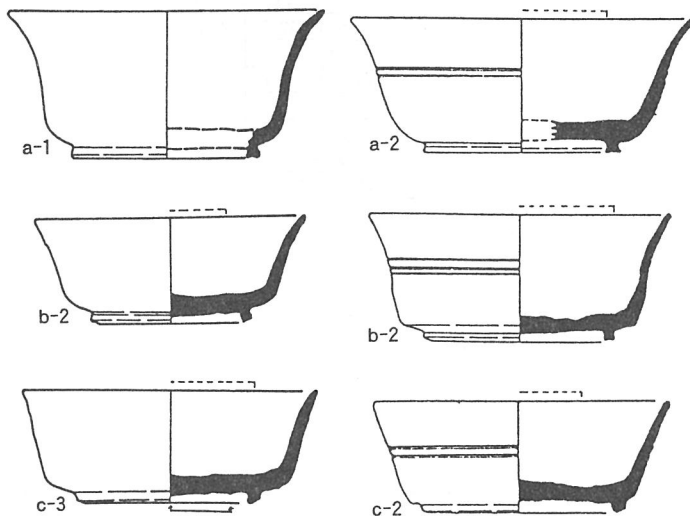
Ⅱ類



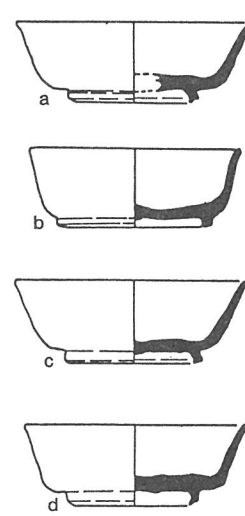
〔杯A〕



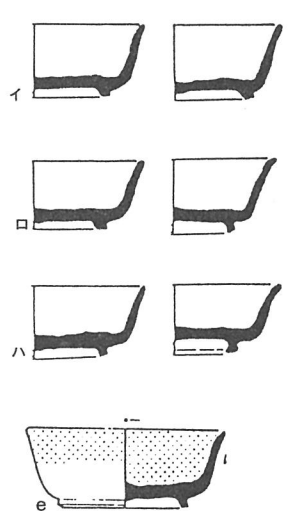
〔杯B〕Ⅰ類



Ⅱ類



高台の位置



第125図 XV地区出土の杯の形態分類 (1/4)

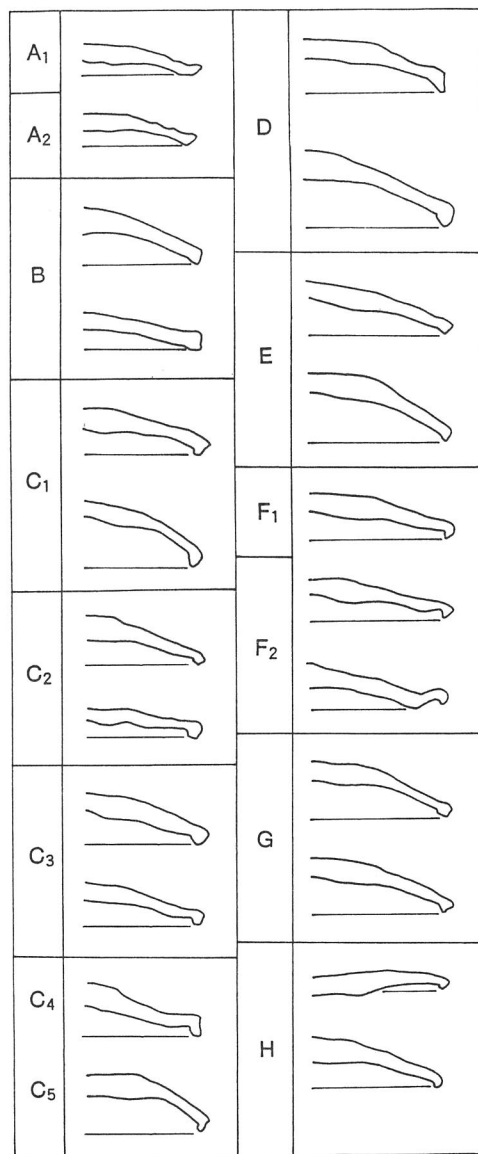
Ⅱ類の法量は、口径12.8～9.6cmで器高が4.3～3.2cmであり、形態はa～eの5つに分類した。aは口縁部が大きく外傾し口縁部近くが外反するもの。bは底部から直立気味に立ち上がるもの。cは底部からかなり外傾しながら立ち上がるもの。dは底部から口縁部にかけて角張りながら立ち上がるもの。eは高台が外側に位置し底部からの立ち上がりが直立気味に少し外傾し立ち上がるものである。外底面はヘラ切り後軽くロクロナデを加え中央にヘラ切り痕を残し、内底面も中央に一二回のナデを加えたものが多い。

また、底部の高台は張り付け位置により三分できる。イは底面から口縁部への立ち上がり屈曲部近くに高台を配するもの。ロは屈曲部から少し中に入り高台を配するもの。ハは屈曲部からかなり中に入り込んで高台を配するものである。なお底面から屈曲部が丸みをもって立ち上がるもの（図左側）、屈曲部が角張っているものがある（図右側）。

**杯A** 形態を6つのタイプに区分した。aは底部が少し尖り気味になるもの。bはほぼ平坦な底部から角張りながら立ち上がり口縁部が外傾するもの。cは底部からの立ち上がり部が丸味をもち屈曲するもの。dは平坦な底部から立ち上がる口縁部の角度が大きなもの。eは平坦に近い底部がc同様に立ち上がり部が丸味をもち口縁部にいたるもの。fは器高が低く底面からの立ち上がり部が角張り外傾し口縁部にいたるもの。

**杯蓋の口縁部形態区分**（第126図・表38）

以下の特徴から口縁端部の形態を8種に区分し、更に細部の形態の相違から細分した。Aは杯蓋形態のeに当たる口縁部である。器高が低く口縁部が横方向にのびた口縁端部が角張り少し肥厚するもの。Bは口縁端部が下方にわずかに肥厚し、内面にごく弱い稜線が入るもの。



第126図 XV地区 杯蓋の形態 (1/3)

表38 XV地区 杯蓋口縁部の形態比率

区分	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	C <sub>4</sub>	C <sub>5</sub>	D	E	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>	G	H	計	
小・Ⅱ種	／36	166.0	149.5	951.7	1,690.0	1,738.7	375.7	67.3	43.5	358.5	802.5	112.5	2,023.5	859.5	9,338.9
				4,823.4							915.0				
	÷36	4.6	4.2	26.4	46.9	48.3	10.4	1.9	1.2	10.0	22.3	3.1	56.2	23.9	259.4
	%	1.78	1.60	10.19	18.10	18.62	4.02	0.72	0.47	3.84	8.59	1.20	21.67	9.20	100.00
大・Ⅰ種	／36	—	102.5	1,060.5	239.0	242.0	89.0	—	163.5	82.0	603.5	196.5	637.5	60.0	3,476.0
				1,630.5							800.0				
	÷36	—	2.8	29.5	6.6	6.7	2.5	—	4.5	2.3	16.8	5.5	17.7	1.7	96.6
	%	—	2.95	30.51	6.88	6.96	2.56	—	4.70	2.36	17.36	5.65	18.34	1.73	100.00
全体	／36	166.0	252.0	2,012.2	1,929.0	1,980.7	464.7	67.3	207.0	440.5	1,406.0	309.0	2,661.0	919.5	12,814.9
				6,453.9							1,715.0				
	÷36	4.6	7.0	55.9	53.6	55.0	12.9	1.9	5.8	12.2	39.1	8.6	73.9	25.5	356.0
	%	1.29	1.97	15.70	15.05	15.46	3.63	0.53	1.62	3.44	10.97	2.41	20.76	7.18	100.00
			50.36							13.38					

Cは口縁端部が下方に伸びるもので、C<sub>1</sub>は下方に幅広く三角状に尖るもの。C<sub>2</sub>は口縁端部が下方に三角状に下がり、内面に強い稜線が入るもの。C<sub>3</sub>は幅が狭く下方に丸味をもって折れ強い稜線が入るもの。C<sub>4</sub>は口縁端部が中窪み状となり、断面がC字状に屈曲するもの。C<sub>5</sub>は口縁端部の下方への下がり幅が狭くて少なく断面が三角状になるもの。Dは口縁端部が下方に広く大きく折れ曲がるもの。Gは口縁端部が幅狭くわずかに肥厚し、内面に稜線が入るもの。Eは口縁端部がGより更に低く幅狭く肥厚したもの。Fは口縁部近くが外方に「く」の字状に折れるもので、F<sub>1</sub>が口縁端部の内面に折り返し稜線が入るもの。F<sub>2</sub>は口縁端部が三角状に下方へのび内面に稜線が入るもの。Hは口縁端部がGより更に細く下方に尖るものである。

表38は杯蓋口縁部の形態による比率である。左欄の法量大がI種を示し、小がII種を表している。比率は個体数ではなく遺跡全体出土の口縁部を36分割し集計したものの比率であり、例えばAのII類が図では743～749の7点を掲載しているが表では4.6点と少なくなっており、Aの実数は表38に示した数字から1.5倍程であることからもおおよその比率を表したものと理解したい。

I・II種を合わせた全体の比率では、Cが約50%を占めており次いでGが20.8%、Fが13%、Hが7%と少なくなり、更にE、B、D、Aが3～1%と比率が激減している。I種とII種の比較ではCが共に約50%と半数を占めているが、FではII種が9.8%に対しI種が23.0%と高く、HではII種が9.2%に対しI種が1.7%と低くI・II種の比率が逆転している。また、もともと比率が低いAやC<sub>5</sub>がI種では確認できない。

(2) 重ね焼き (第67図、表39・40)

杯・杯蓋に残る重ね焼きの痕跡から窯詰め状態にA・B・C種の三方法があることはI地区の項で説明した。(第67図)。XV地区の重ね焼きを図掲載分の杯蓋の観察から、窯跡の床面と灰層等に分けて表39に示した。また、表40は法量ごとにI・II種に分けて集計した内容であり、この割合は作業時におけるおおよその窯詰め傾向を反映しているものと見られる。

焼成方法は、灰層及び窯跡床面からの出土品とともにA種よりもB種が圧倒的に比率が高く、I種ではA種が24.7%でB種が75.3%であり、II種ではA種が12.8%でB種が87.2%である。全体ではA種が15.6%でB種が84.4%であり、I・II種ではA種とB種に10%程の格差がある。焼成方法のB I種では杯身を正位にして置き、蓋を逆位にして重ね積み上げるものであり、I-1が48.5%とI-2が18.9%の合わせて67.4%と高い比率を占める。B IIは身が正位で蓋の逆位を一単位として蓋と蓋を合わせ積み上げるもので、11.5%を占める。

表39 XV地区 杯の焼成法出土割合 (杯蓋)

焼成法 出土箇所	A						B					計	A	B
	I-1	I-2	I-3	II-1	II-2	不明	I-1	I-2	II-1	II-2	不明			
I種 S-03床面	2	—	—	—	—	4	5	—	5	—	3	19点	6点	13点
II種 S-03床面	2	—	—	—	—	2	7	6	4	—	4	25点	4点	21点
I種 灰層・他遺構	15	—	—	—	—	—	41	1	8	—	1	66点	15点	51点
II種 灰層・他遺構	19	10	—	—	1	1	121	61	22	2	12	249点	31点	218点
計	38	10			1	7	174	68	39	2	20	359点	56点	303点

表40 XV地区 杯の焼成法割合 (杯蓋)

焼成法 法量	A						B					計	A	B
	I-1	I-2	I-3	II-1	II-2	不明	I-1	I-2	II-1	II-2	不明			
I種 (14.6cm以上)	17	—	—	—	—	4	46	1	13	—	4	85点	21点	64点
	20.0					4.7	54.1	1.2	15.3		4.7	100.0%	24.7%	75.3%
II種 (14.5cm以下)	21	10	—	—	1	3	128	67	26	2	16	274点	35点	239点
	7.7	3.6			0.4	1.1	46.7	24.5	9.5	0.7	5.8	100.0%	12.8%	87.2%
I・II種	38	10	—	—	1	7	174	68	39	2	20	359点	56点	303点
計	10.6	2.8			0.3	1.9	48.5	18.9	10.9	0.6	5.5	100.0%	15.6%	84.4%

また、杯Bだけを積み重ねるCⅠ種は

口径10.8～9.8cm、器高4.2～3.5cmの大きさのものに限って釉跡が残り、約1/4にあたる11点が確認できる。

なお、杯AはいずれもCⅡ種で焼成されており、蓋のCⅢ種の焼成方法はみられない。

(3) S-03須恵器窯跡 (第147図1～第182図1166)

表41 杯蓋の形態割合 (図掲載分)

形態	Ⅰ種(14.6cm以上)					Ⅱ種(14.5cm以下)				
	a	b	c	d	計	a	b	c	d	計
出土地										
3次床面	1	1	—	5	7	2	—	4	8	14
2次床面	2	1	3	8	14	12	4	7	4	27
床面計	3	2	3	13	21	14	4	11	12	41
遺構・灰層	42	29	15	18	104	114	48	67	79	308
合計点数①	45	31	18	31	125	128	52	78	91	349
割合 (%)	36.0	24.8	14.4	24.8	100	36.7	14.9	22.3	26.1	100
ヘラ削り点数②	20	18	4	14	56	18	10	5	12	45
② / ① (%)	44.4	58.1	22.2	45.2	44.8	14.1	19.2	6.4	13.2	12.9

床面は三面を確認し、下層から順に第1・2・3次床面とした。

第3次床面 (第147図1～第150図165)

須恵器は勾配が緩くなった燃焼部に集中し重なりあって杯A・Bや杯蓋が多く出土した。

杯蓋 (1～21) Ⅰ種1～8の8点の形態はa・bが各1点であり、dが5点である。口縁部の形態はF<sub>1</sub>・F<sub>2</sub>が6点と多く、C<sub>1</sub>、Dが各1点と少ない。杯蓋の外面にはヘラ削り調整したものが8点中に7点と多くを数える。

Ⅱ種9～21の形態は、aが2点、Cが4点、dが8点である。口縁部の形態はGが2点、C<sub>2</sub>が3点、Fが7点でありⅠ種同様にFが多くを占める。この内外面をヘラ削りするものは、13点中で3点の23%と少なく、Ⅰ種のヘラ削りとは大差がある。

杯B (22～116) Ⅰ種22～52の30点の法量は、口径が16.7～14.3cm、器高が6.5～4.7cmの大きさがあり、中でも口径15.5～14.3cmに多く集中する。体部には沈線を引くものと沈線を引かないものが半数ずつある。(第127図、表42・43)。杯Bの形態は、Cが26点であり、bが3点、aが1点となっている。また、底部高台の位置は内側に入り込むハが26点と多く、中間的な位置の口が5点、外寄りに位置するイが3点と減少している。このことから体部の沈線有無には形態や高台位置等に特に異なった相違がみられない。

Ⅱ種53～113の法量は、口径が12.6～9.8cmで器高が4.3～3.2cmの大きさがあり、口径が13.0～12.0cm

に集中しており、セットとなる蓋の口径が11.5cm以上の大きさであることとも一致している (第127図)。

Ⅱ種の59点の形態は (表44)、dが33点の55.9%で最も多く、次いでbが11点

表44 杯BⅡ種の形態割合 (図掲載分)

形態	a	b	c	d	e	計
出土地						
3次床面	7	11	7	33	1	59
2次床面	1	—	1	11	2	15
1次床面	—	1	—	1	—	2
床面計	8	12	8	45	3	76
遺構・灰層	20	31	14	59	20	144
合計点数	28	43	22	104	23	220
割合 (%)	12.7	19.5	10.0	47.3	10.5	100

表42 杯BⅠ種の形態分類と体部沈線割合 (図掲載分)

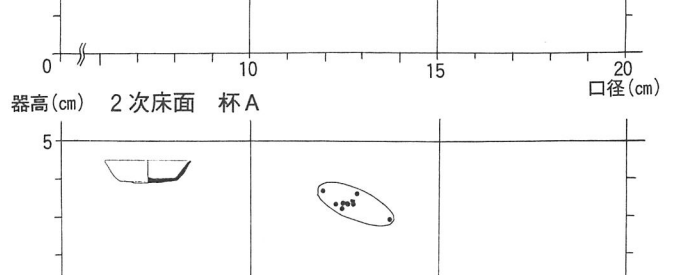
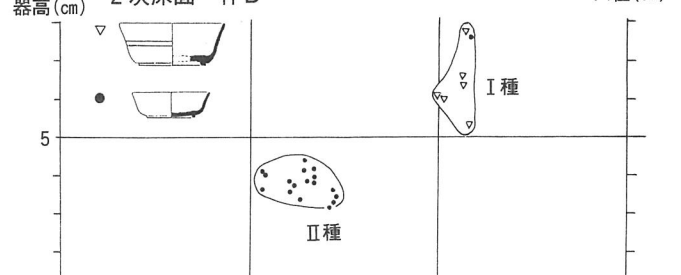
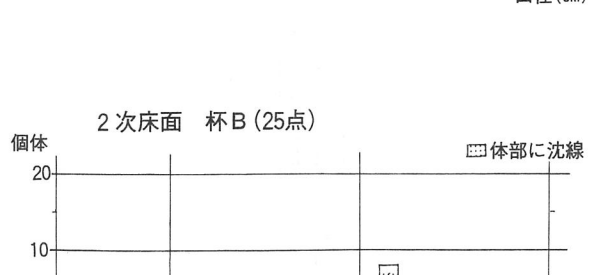
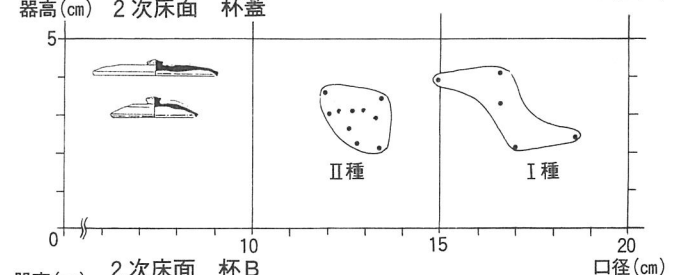
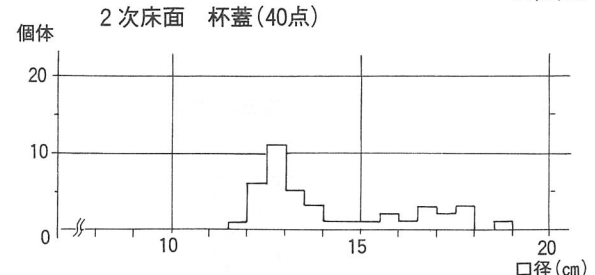
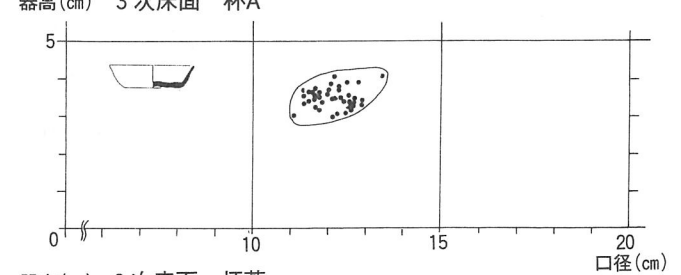
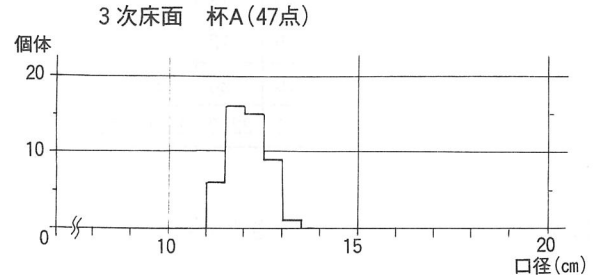
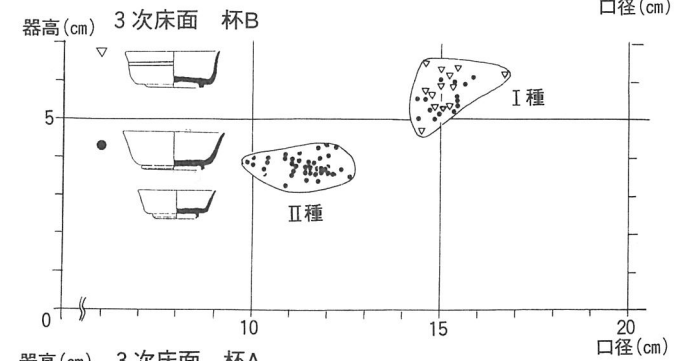
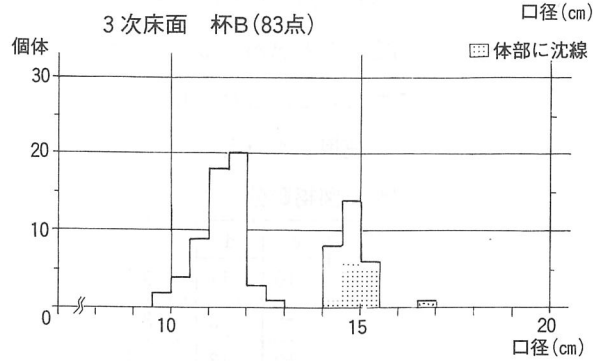
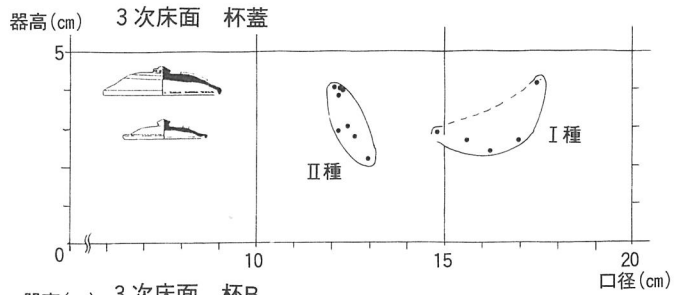
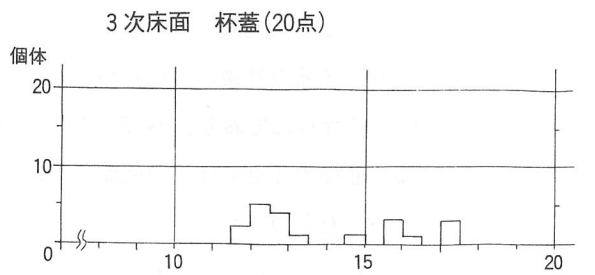
形態	体部沈線・無				体部沈線・有			
	a	b	c	計	a	b	c	計
出土地								
3次床面	1	1	13	15	—	2	13	15
2次床面	—	—	1	1	2	5	1	8
床面計	1	1	14	16	2	7	14	23
遺構・灰層	2	7	7	16	6	14	28	48
合計点数	3	8	21	32	8	21	42	71
割合 (%)	9.4	25.0	65.6	100	11.3	29.6	59.1	100

表43 杯BⅠ種の高台位置と体部沈線割合 (図掲載分)

形態	体部沈線・無				体部沈線・有			
	イ	ロ	ハ	計	イ	ロ	ハ	計
出土地								
3次床面	—	1	11	12	3	4	14	21
2次床面	—	1	—	1	1	5	2	8
床面計	—	2	11	13	4	9	16	29
遺構・灰層	—	12	4	16	4	22	18	44
合計点数	—	14	15	29	8	31	34	73
割合 (%)	—	48.3	51.7	100	11.0	42.5	46.5	100

表45 杯BⅡ種の高台位置

形態	イ	ロ	ハ	計
出土地				
3次床面	2	28	29	59
2次床面	2	6	7	15
1次床面	1	1	—	2
床面計	5	35	36	76
遺構・灰層	22	94	34	150
合計点数	27	129	70	226
割合 (%)	11.9	57.1	31.0	100
11.1cm以上	17	76	58	151
11.0cm以下	10	53	12	75



第127図 XV地区 S-03床面出土の杯・杯蓋法量図

の15.3%で、a・cが各7点の各11.9%であり、eの1点1.7%の順に少なくなる。高台の位置は(表45)、中間的なところに付けた口が28点で47.5%、底面の内にかなり入るハが29点の49.2%であり、底部の外側に付けるハが2点のわずかに3.4%である。器面調整はI種の内底面の広い範囲に多方向のナデが殆どに行われており、外底面では、約8割にヘラ切り後回転ナデが行われ、更に約2割に入念なヘラ削りを施している。II種の59点では、内底面中央にナデが入るものが1割弱と少なく、外底面はヘラ切り後軽くナデを行いヘラ削りを施したものが無い。

第3次床面からは、杯BにI・II種を焼台に再利用したものが含まれている。半分に割れたものや焼き損じた杯身を裏返し底部を水平に保つために窯壁の小さな窯滓や粘土を用いて焼台として固定したと思われる。I種では23・38の外面に窯滓が付着し、30・31は杯Bの二つに破損したものを利用し二次焼成されている。また、II種では57・66・72なども外面に滓が付き二次焼成を受けている。69・83・114～117も床面において使用した焼台である。

**杯A (118～163)** 法量は口径が13.4～11.1cmで、器高が4.1～3.0cmの大きさであるが、口径が11.5～12.0cmのものに集中している。形態ではc・d・e・fがそれぞれ20～24%ずつ存在し、残りa・bが6～9%と少ない。外底面の調整は、134・149の拓本のように渦巻き状のヘラ切り痕が残り、体部をロクロナデしたあと内面の中央を一回ナデたものがある。口縁部には重ね焼き(C<sub>2</sub>類)を示す淡灰色の自然釉がかかっている。

**表46 杯Aの形態割合 (図掲載分)**

出土地	形態	a	b	c	d	e	f	計
3次床面		4	3	10	11	9	9	46
2次床面		2	2	—	2	3	4	13
床面計		6	5	10	13	12	13	59
遺構・灰層		—	20	9	13	4	13	59
合計点数		6	25	19	26	16	26	118
割合(%)		5.1	21.2	16.1	22.0	13.6	22.0	100

**壺蓋 (164・165)** 壺蓋の形態は(第129図) dにあたり、口径が13.5cmと16.0cmの大きさをした短頸壺の蓋である。164の外表面天井部には二条の沈線が巡っている。

**第2次床面 (第150図166～第151図257・1104)**

床面からは焼成部中程から下方の焚口にかけて約230点の破片が出土し、器種には杯A・B、杯蓋、横瓶、甕がある。

**杯蓋 (166～206、249・250) 表47 杯蓋I種の口縁部形態割合 (図掲載分)**

I種166～179の法量は、口径が18.6～14.9cmで器高が4.1～2.2cmである。形態は扁平なdが8点と多く57.1%を占めており、次いでcが3点で21.4%、aが2点で14.3%、bが1点で7.1%の順に少なくなる。第3次床面ではdが7割であり、第2次床面でもdが約6割の高率をなしている。

出土地	形態	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	C <sub>4</sub>	D	E	F	G	H	計
3次床面		—	—	2	—	—	—	1	—	6	—	—	9点
2次床面		—	—	6	—	—	—	—	—	2	4	—	12点
1次床面		—	—	1	—	2	—	—	1	—	3	—	7点
3次床面		—	—	22.2	—	—	—	11.1	—	66.7	—	—	100%
2次床面		—	—	50.0	—	—	—	—	—	16.7	33.3	—	100%
1次床面		—	—	14.3	—	28.6	—	—	14.3	—	42.8	—	100%

**表48 杯蓋II種の口縁部形態割合 (図掲載分)**

II種180～206、249・250の法量は、口径が13.4～11.9cm、器高が3.6～2.1である。形態では

出土地	形態	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	C <sub>4</sub>	D	E	F	G	H	計
3次床面		—	—	1	2	—	—	—	—	8	2	—	13点
2次床面		—	1	2	1	8	1	—	2	2	10	1	28点
1次床面		—	—	1	1	2	—	—	—	—	1	—	5点
3次床面		—	—	7.7	15.4	—	—	—	—	61.5	15.4	—	100%
2次床面		—	3.6	7.1	3.6	28.6	3.6	—	7.1	7.1	35.7	3.6	100%
1次床面		—	—	20.0	20.0	40.0	—	—	—	—	20.0	—	100%

笠形をなすaが12点の44.4%と比率が高く、次いでcが25.9%、bとdが各4点の14.8%ずつである。第3次床面ではdが57.1%であり、cが28.6%で、aが12.3%である。第3・2次床面での相違はaとdの割合が大きく異なる。また、第2次床面の口縁部形態では、Gが10点で35.7%であり、C<sub>3</sub>が8点で28.6%、C<sub>1</sub>・E・Fが各2点ずつで合



わせて21.4%、B・C<sub>2</sub>・C<sub>4</sub>・Hが各1点である。第3次床面との比較ではFが61.5%、C<sub>2</sub>とGが各15.4%ずつとなり、I種ではFの割合が高く、第2次床面ではG・C<sub>3</sub>が主体となっている。

**杯B (207~234)** I種207~219の法量は、口径が15.8~15.0cm、器高が7.8~6.1cmであり、第3次床面に比べると口径の最大幅が2cm程小さくなり体部に沈線を引いたものが大部分である(第127図)。形態では口縁部が少し外反するbが多く、第3次床面では口縁部がわずかに外傾するCが主体を占めている(表42)。底部高台の位置も第2次床面では中間的な口が8点中に5点を占め62.5%と多い。高台直径は口が9.6cmが1点、10.2~10.7cmが5点で大きく、ハが9.0cmと9.2cmの2点である。高台も底面に水平なものが6点と主体をなし、他は外傾するもの2点、内傾するもの1点である。なお、第3次床面では高台位置が33点中のかかなり内側に取り付けるハが、26点の78.8%を占めており大きな違いをみせる(表42)。また、第3次床面の高台直径は、イが10.1~10.5cm 3点、口が9.2~9.8cmが3点、10.2cmが1点、ハが8.6~9.1cmが17点で多く、8.2~8.4cmが2点を数える。高台の幅は25点中に5~6mmのものが22点と高く、7~8mmが3点であった。更に27点の高台の形態は底面に水平なものが19点、外傾するもの8点であり、第2次床面と似て水平なものが一般的で高い比率を示している。

II種220~234の15点の法量は、口径が12.3~10.3cm、器高が4.4~3.3cmの大きさである。形態ではdが11点の73.3%と多く、他にeが2点、a・cが各1点と減少している(表44)。また高台の位置では内側にかかなり入るハが7点で、中間的な位置の口が6点でイ・口を合わせると86.6%の高率となり(表45)、第3次床面と同様にイ・口が主体をなしている。

焼台として利用された破片には、杯蓋で187が内外面に泥滓が付き、199・201の内面に砂質土が付着したものである。杯Bでは、1/2から1/3の大きさの破片をした230の内面に泥滓が付き、229・231は外面に泥滓が見られる。

**杯A (235~248、251~253)** 法量は口径が12.8~11.9cmで器高が3.7~3.2cmの大きさで、235は1/6の破片で口径が少し大きくなる。形態にはfが4点、eが3点、a・b・dが各2点でありCが含まれていない。

**壺蓋 (254・255)** 短頸壺の蓋254・255は、口径が11.6cmと11.1cmであり、天井部外面の屈曲面よりをへら削りしている。形態は(第129図)、254がb、255がeにあたる。256は短頸壺や長頸壺の底部高台の破片である。

**筒状品 (257)** 257は8点からなる破片で内1点が第2次床面から出土し、他は灰層から出ている。上部と下部は接合しないが淡赤灰色をした還元焼成品で、胎土や色調等から同一個体として扱った。上部は長さが9.4cmで先端部直径が3.6cmである。内傾した幅8mmの口縁部は肥厚し、先端から3cmが内外面に回転ナデが施され厚さ7mmを測る。下半は斜め方向にナデ調整されている。下部片は1/3が残り直径が8.4cmで厚さが8mmある。用途は明らかでない。

**横瓶 (1104)** 横瓶は体部を横に半裁した状態で残存する。側面を上にして床面から出土し二次焼成を受けていた。

#### 第1次床面 (第152図258~271)

第2次床面と重複しているため、第1次床面の遺物は燃焼部寄りの舟底ピット内から出土した約30点余りである。器種には杯蓋・杯Bの破片があり、窯の操業に伴う当初の段階に相当する遺物である。

**杯蓋 (258~269)** I種258~264・266の法量は、口径が17.6~14.7cmで器高が4.4~2.9cmである。形態の明確なものは数少ないが、笠形のaが2点、b・cが各1点ずつである。口縁部の形態はGが3点、C<sub>3</sub>が2点、C<sub>1</sub>・Eが各1点の割合である。II種265・267~269の法量は口径14.4~12.5cmで器高が3.6cmと3.0cmである。形態はA・Cの各1点が全形を残している。口縁部の形態はC<sub>3</sub>が2点、C<sub>2</sub>・C<sub>1</sub>が各1点ずつであるが、いずれもCの形態に入る。268はボタン状のつまみをもち、258・269は扁平な宝珠状つまみが付く。

**杯B (270・271)** 口径が10.8cmと10.7cmで器高が3.9cmの大きさである。形態はbとdが1点ずつで、高台の位置は外側に付くイと中間的な口が各1点である。

**S-03覆土 (第152図272~275)** 窯体の覆土中からは、274の杯Aと272・273・275の杯Bが出土している。杯Bは

口径が12.0～11.8cmで器高が4.1～3.8cmの大きさで、高台位置が内側に入り似た形態をする。

**S-03付近** (第152図276～283) 窯跡近辺の遺構確認面から出土したものである。277は杯蓋Ⅰ種、278・279はb形態の蓋Ⅱ種である。280～283は杯BⅡ種であり、口径が11.4～10.0cmの大きさで、281・282は外面に窯滓が付き、焼台に利用されている。276は口径15.2cmの大きさであり、e形態をした大形の短頸壺の蓋である。

#### (4) その他遺構

##### **S-01炭焼窯** (第152図284～297)

287・289・292・294は横口式炭焼窯の前庭部覆土から出土した。他の土器は横口部の作業場下部にあたる浅黄色土の整地面内から出ている。前庭部の287・289の杯蓋には小さなつまみを付ける。294の杯Bは口縁部が直立気味に立ち上がる。整地面内の土器は須恵器窯跡の操業に関連すると見られ、286・293は灰層の須恵器と接合する。

284～286は杯蓋のⅠ種で288はⅡ種である。291は小形の土師器の体部片で外面をヘラ削りしている。295は杯A、296は長頸壺体部の形態をとるが口頸部の接合痕跡がなく、口径3.6cmの有段の口縁部には自然釉が厚くかかり無頸壺の形態をなしている。297は灰層出土の1057のような壺の底部片である。

##### **S-02炭焼窯** (第152図298～302)

298の横瓶は焚口から2～3m入った炭焼窯南側面の遺構確認面から検出されたもので、1～2mの狭い範囲に1個分が散在していた。横瓶は全体の3/4が残り体部直径が23.5cmで、体部の長さが35cm程の大形品である。カキ目を施した体部外面には3箇所布目痕が認められる。299から302は前庭部の覆土からの出土で炭焼窯の操業に関連する土器である。299は須恵器杯蓋で300～302は土師器である。300はロクロナデした小形の甕であり、301は甕の底部で、302は糸切り痕を留めた底部である。

##### **S-06製鉄炉** (第153図303～360)

303～360は廃絶された炉の上方に設けられた作業場内(ファイゴ座)から出土したもので、窯跡灰層の遺物である。

**杯蓋** (303～337) Ⅰ種303～309の法量は17.2～15.4cm、器高が4.7～2.0cmと幅がある。形態では304～306の笠形をしたa、303のb、308のC、扁平な307・309のdと各種類がある。口縁部の形態ではFが3点、C<sub>1</sub>が2点、D・Gが各1点でありFの存在が目立つ。Ⅱ種311～337の法量は14.0～12.1cm、器高が4.0～1.5cmである。形態ではaが14点、bが4点、Cが5点、Dが5点と笠形のaの割合が多い。口縁部の形態はCが17点で70.8%と比率が高い。内訳はC<sub>2</sub>が8点、C<sub>1</sub>が5点、C<sub>3</sub>が4点であり、他にGが3点、D・E・Fが各1点と少ない。蓋のつまみの形態は扁平な宝珠形や円錐台のもの、ボタン状のものなど各種が見られるが、直径2.7から2.0cmと概して小さなものが多い。

このようにⅡ種の口縁部の形態は、Cが高比率を示す傾向があり、第2次床面のCの割合が高い構成と類似している。当遺構の遺物が第2次床面の操業時のものである公算が強い。

**杯B** (338～356) Ⅰ種338～344の法量は、18.8～14.0cmで器高が8.0～6.2cmの大きさがある。体部に沈線を引いたものが多く、口縁部の形態は339が大きく外反するa、340・342が少し外反するbで、他に少し外傾するCが5点ある。高台位置はイ・ハが各1点、ロが4点と多くて第2次床面のロが多く存在する傾向(表42)と似る。Ⅱ種345～356は口径が12.3～10.4cm、器高が4.1～3.3cmである。形態はd形態が7点、Cが2点、b・eが各1点の割合である。また高台の位置は中間的なロが8点と最も多く、ハが2点、イが1点と数少ない。底部の調整はヘラ切り痕を中央に残して高台の内側を回転ナデしているものが一般的であり、354では同心円状をした回転ナデが数条巡る。

**杯A** (357) b形態の底部外面には、直線的に引いたヘラ記号の「一」が記されている。

**壺蓋** (358・359) 358は形態がeで口径が14.9cmのものである。359は形態がbで口径が11.5cmである。

**土師器** (360) 360は土師器の長甕で口縁部の細片が2点である。還元焼成された長甕の口縁部の形態では(第136図)口縁端部を肥厚させないb<sub>1</sub>にあたる。

この他に361～363は製鉄炉のまわりの遺構確認面から検出した杯蓋、壺蓋である。

SK08 (第154図364～366) 採土穴の上層からの出土品で、杯蓋と杯Bが出ている。

SK10 (第154図367～373) 炭焼窯の作業場整地面下の土坑から出土した。367～369は杯蓋、370は杯B、371は杯Aである。372・373の杯蓋破片は二次焼成を受けており、器面に窯滓が付着し反対側を上にして焼台として利用されている。この他に1107の鉢把手部もいっしょに出ている。

SK11 (第154図374) 土坑内から10点程の須恵器片が出ている。374は杯蓋の口縁部片である。

SK12 (第154図375～392) 焼壁穴の土坑内底面近くから生焼けの須恵器20点余りが出土した。杯蓋Ⅱ種の375～381の法量は口径が13.6～12.4cm、器高が2.8～2.2cmであり、形態はCが3点、bが2点、dが1点である。口縁部の形態はB・C<sub>1</sub>・E・F<sub>1</sub>・Gが各1点とバラツキがある。杯BⅠ種の382・383の形態はbである。Ⅱ種の384～389は口径が12.2～11.5cmで、器高が4.1～3.8cmの大きさで法量差が少ない。形態ではb・Cが各2点、Cが1点であり、高台の位置は中間的な口が3点、内側に入るハが2点である。390～392の杯Aの形態はeが2点、Cが1点である。

(5) S-03須恵器窯跡灰層 (第155図393～第182図1166)

灰層は窯跡の焚口から下方斜面及び谷部にかけて広がり、遺物は層位によらず取り上げたために一括して取り扱った。

杯蓋 (第155図393～第160図750)

杯蓋全体の掲載数量は表41のとおり、口径19.4～14.6cm、器高4.9～1.5cmのⅠ種が125点であり、口径が14.4～10.3cm、器高が4.8～1.5cmのⅡ種が349点である。Ⅰ種はⅡ種の2.79倍であり、表38の杯蓋の口縁部集計でもⅠ種の2.73倍であり実数は不明であるがⅠ・Ⅱ種の比率は共に近い数字である。第128図の法量図からⅠ種の口径は、16.0～18.0cmに多く中でも16.5～17.0cmに集中している。またⅡ種の口径は、11.5～14.0cmに多く、中でも12.5～13.5cmに集中する。遺構及び灰層の形態では、Ⅰ種のaが42点で40.4%、bが29点で27.9%、dが18点で17.3%、Cが15点で14.4%の割合である。また、Ⅱ種ではaが114点で37.0%、dが79点で25.6%、Cが67点で21.8%、bが48点で15.6%である。Ⅰ・Ⅱ種共にaが主体をなし、b・C・dは27～15%の中に収まる。dの中には743～749の円盤状の粘土板につまみを付けた形状の蓋があり(口縁部形態のAに相当)、口径は13.1cmと11.7～10.4cmの大きさがあり、中央の天井部が盛り上がる743・744と円板状の745二形態がみられ、これらの割合は低く特異な存在である。

遺構及び灰層出土の口縁部の形態は、Ⅰ種94点ではCが47.8%と約半分を占め、Fが22.4%、Gが17.0%で、B・Dが5～4%と少なく、E・Hが2～1%とわずかな比率となっている。Cの内訳は、C<sub>1</sub>が31.9%で、C<sub>2</sub>が7.4%、C<sub>3</sub>が6.4%である(表49)。

表49 杯蓋Ⅰ種の口縁部形態割合(図掲載分)

出土箇所	形態	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	C <sub>4</sub>	D	E	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>	G	H	計
床面計		—	—	9	—	2	—	1	1	6	2	7	—	28点
遺構・灰層		—	5	30	7	6	2	4	2	17	4	16	1	94点
合計		—	5	39	7	8	2	5	3	23	6	23	1	122点
床面計		—	—	32.2	—	7.1	—	3.6	3.6	21.4	7.1	25.0	—	100%
遺構・灰層		—	5.3	31.9	7.4	6.4	2.1	4.3	2.1	18.1	4.3	17.0	1.1	100%
合計		—	4.1	32.0	5.7	6.6	1.6	4.1	2.4	18.9	4.9	18.9	0.8	100%

同様にⅡ種311点では、Cが54.4%と半数を越え、Gが19.9%、Fが8.7%、Hが6.1%と少なく、A・B・Eが2～3%と僅少である。Cの中ではC<sub>2</sub>が20.9%、C<sub>3</sub>が16.1%、C<sub>1</sub>が15.1%と似かよった比率であるが、C<sub>4</sub>が4.5%とわずかである。

杯蓋天井部のヘラ削りの方向は(表41)、全て逆時

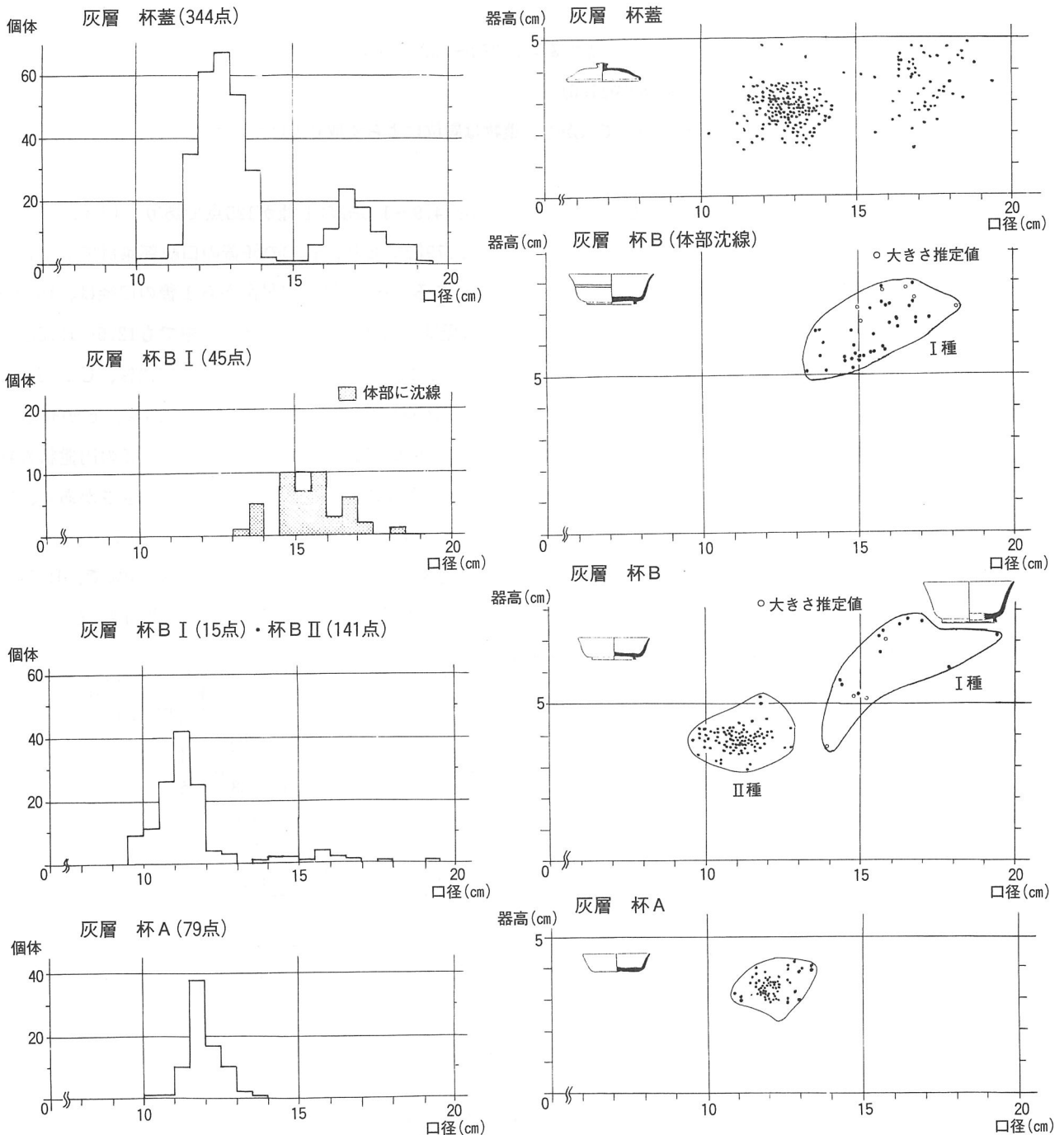
表50 杯蓋Ⅱ種の口縁部形態割合(図掲載分)

出土箇所	形態	A	B	C <sub>1</sub>	C <sub>2</sub>	C <sub>3</sub>	C <sub>4</sub>	D	E	F <sub>1</sub>	F <sub>2</sub>	G	H	計
床面計		—	1	4	4	10	1	—	2	8	2	13	1	46点
遺構・灰層		7	9	47	65	50	14	2	9	20	7	62	19	311点
合計		7	10	51	69	60	15	2	11	28	9	75	20	357点
床面計		—	2.2	8.7	8.7	21.7	2.2	—	4.3	17.4	4.3	28.3	2.2	100%
遺構・灰層		2.3	2.9	15.1	20.9	16.1	4.5	0.6	2.9	6.4	2.3	19.9	6.1	100%
合計		2.0	2.8	14.3	19.3	16.8	4.2	0.6	3.1	7.8	2.5	21.0	5.6	100%

計回りの左回りである。I種の125点では56点が確認され、全体平均では47.5%に施されている。形態別ではbが64.3%と高く、逆にCが28.6%と低く、a・dが平均値に近い数字である。II種のヘラ削りは249点の内、45点に施され全体平均では12.9%に削りが行われている。形態別ではCが6.5%と少ないが、bが19.2%と平均よりも少し高く、a・dは平均値を若干上回る数字である。

また、表69・70 (177p) は、杯蓋器面に残る内外面の釉跡（重ね焼きB種第68図）から焼成時の杯法量を求めたものである。蓋I種では、身の口径が0.4~2.6cmと蓋の口径よりも小さく、中でも両者の口径差が0.7~1.4cmのものが多い。蓋II種では、身の口径が0~2.4cmと蓋よりも小さく、蓋と身の口径差が0.6~1.4cmのものが多くを占めている。

なお、表35はXV地区全体から出土した杯蓋の口縁部を形態別に残存率を（1/36単位）求めて集計したものを更に個体数に換算し、それぞれの区分を比較した。この表35と表46・47図掲載分の集計を比較すると比率では、I種がC



第128図 XV地区 S-03灰層出土の杯・杯蓋法量図

で最大差が7%であるが、c以外の個々の細別では最大差が4%と少なくて大局的な大差がみられない。また、Ⅱ種では更に1%前後と差が少なくなっている。表38は遺跡全体の杯蓋の口縁部を集計したものであるが、表46・47の掲載図の合計よりも実数がかかなり上まわっている。先述したように比較が容易なAでは、掲載図7点が集計では4.6点であり、Bでの実測数15点が集計では10.2点であり、約1.5倍程となるが実数はおそらく2倍以上と推測される。

#### 杯B (第161図807～第165図989)

法量はⅠ種が口径17.8～13.6cmで、器高が7.7～3.6cmの大きさであり、Ⅱ種は口径が12.8～9.6cmで器高が5.2～2.9cmである。掲載図の点数はⅠ種が60点とⅡ種が120点である。遺構出土を含めた形態分類の内容は表42・44に示してあるが、Ⅰ種の口径は14.5～17.0cmに集中していて、器高が5.0～8.0cmにほぼ収まっている。体部には沈線を巡らすものが45点を数えⅠ種の75%に当たり、沈線を有しないものが15点と少なく25%の割合である。また、掲載した内訳は、床面・遺構・灰層の全体を含めると口径・形態の不明分等全てを数えるとⅠ種が113点で、沈線を有するものが79点で69.9%と多くあり、沈線の有しないものが34点で30.1%と少ない。このように床面出土及び灰層等では両者に大きな相違が見られない。灰層出土のⅠ種の沈線を有しない形態分類では、aが12.4%、bとCが各43.8%の割合であり、沈線を有する杯の形態ではaが12.5%、bが29.2%、Cが58.3%である。高台の位置では表43のように高台が内側に入るハと中間的な位置のロが約半分程で、高台を外側に張り付けるイはわずかな量である。

Ⅱ種の口径では10.5～12.0cmに集中していて、第128図では杯蓋の口径が11.5～14.0cmに集中している。杯蓋の口径は杯身よりも通常1.0cm前後大きく作られることから、身と蓋の口径がほぼ一致している。

Ⅱ種の形態では(表44)、扁平なdが41.0%、aが14.0%、eが13.9%、Cが9.7%の割合であり、床面との比較ではdが10%弱と低く、eが10%程高い比率である。Ⅱ種の高台位置は(表45)、中間的なロが62.7%、内側に入り込むハが22.7%、外側に配する14.7%である。全体の割合を見ると11.1cm以上では、中間的なロが50.7%、内側に位置するハが38.4%、外側のハが11.3%である。11.0cm以下では、ロが70.7%、ハが16.0%、イが13.3%となり、口径11.1cm以上と11.0cm以下を比較すると、ロとハにそれぞれ20%程の違いが存在している。

杯Bの重ね焼き痕跡は、杯身Ⅰ・Ⅱ種の口縁部から底部高台にかけての体部外面に自然釉がかかっていることから確認できるが、杯Ⅱ種の口径が10.8～9.8cmのものには杯身のみを積み重ねるCⅠ類(第67図)が11点を数える。掲載図でのCⅠ類の割合は、口径が11.0cm以下のもので二次焼成品を除くと43点があり、その比率は25.6%にあたる。

#### 杯A (第160図751～161図805)

灰層出土の79点の法量は(第128図)、口径が10.9～13.4cmで器高が4.2～2.3cmである。口径は11.5～12.0cmに48.0%が集中しており、これを除いた11.0～13.0cmの範囲内に46%が収まり、残りの5%が前者の範囲外の口径である。

器高も3.8～3.0cmに78.7%が集中している。表46による遺構・灰層出土の59点の形態は、bが33.9%、f・dが各22.0%、Cが15.3%、eが6.8%の割合となっている。最終の第3次床面ではC・d・e・fが各20～24%程で、a・bが6～7%の割合であり、床面と灰層を比較すると、灰層ではbが10%程高く、eが13%程低いことやaの形態が存在しないこと等に相違点がみられる。一方、底面の調整はヘラ切り後に軽くナデるものが多いが、中には751・768・771等のようにヘラ切りのままで未調整のものや、804のように渦巻き状のヘラ切り痕を留めるもの、或いは790のように成形後に短い線条の圧痕を残すものも少数であるが存在している。

#### 壺蓋 (第165図990～第166図1024)

短頸壺の蓋は42点が出土しており、法量は口径が10.2～16.0cmで器高が5.0～2.6cmである。口径では12.0cm以下のものが28点あり全体の66.7%を占めており、中でも口径が11.0～12.0cmの大きさのものに集中している。その他のものは口径が12.6～13.0cmと13.1～13.5cmと14.1～14.5cmに小さなまとまりがみられる(第130図)。

蓋はいずれも天井部が平坦であるが、形態及び口縁部の形態の違いからa～fの6種に分類した(第129図)。

表51 短頸壺蓋の口径分布 (図掲載分)

出土箇所	形態	a	b	c	d	e	f	不明	計
床	面	—	1	1	—	2	—	—	4点
遺構	・灰層	2	9	3	5	4	13	2	38点
合	計	2	10	4	5	6	13	2	42点
割	合 (%)	4.8	23.8	9.5	11.9	14.3	30.9	4.8	100

表52 短頸壺蓋の形態別焼成方法 (第130図参考)

焼成	形態	a	b	c	d	e	f	不明	計	割合%
焼成 A 類		1	6	2	—	2	—	1	12	34.3
焼成 B 類		1	3	1	5	4	9	—	23	65.7
合	計	2	9	3	5	6	9	1	35	100.0

表53 短頸壺の口径と蓋口径 (焼成B) 単位: cm

No	蓋口径	釉直径	口径差	No	蓋口径	釉直径	口径差
164	16.0	11.5	4.5	1003	12.0	10.0	2.0
1022	14.4	12.5	1.9	1008	11.6	10.2	1.4
994	14.2	10.4	3.8	1004	11.4	11.0	0.4
992	13.8	11.2	2.6	1011	11.4	9.0	2.4
165	13.5	11.5	2.0	1006	11.3	11.0	0.3
1007	12.8	10.0	2.8	1024	10.2	9.2	1.0
1002	12.0	10.0	2.0				

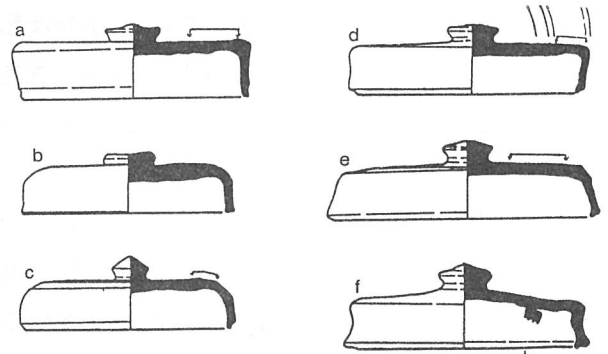
a は蓋の断面形態が長方形をなし、口縁端部が先細るもの。  
 b は天井部から口縁部にかけての屈曲部が丸くなるもので、口縁端部が角張るもの。c は形態が b と同様な形態であるが、口縁端部が内面側に先細るもの。d は蓋の断面形態が長方形をなし、口縁端部が内面側に先細るもの。e は蓋の断面形態が台形状をなし、口縁端部が内側に先細るもの。f は蓋の断面形態が長形状をなすが側面の中程が少しくびれて、口縁端部が内側に先細るもの。

蓋の形態割合は (表51)、f が30.9%と最も高く、b が23.8%で、e・d・c が10~14%、a が5%と少なくなる。

短頸壺と蓋は組み合わせてセットで焼成しているが、釉痕の状態を観察すると蓋のつまみを上向けしたA類と、蓋を裏返しに被せた状態にしたB類に二分できる。ただBでは釉跡が三日月状に片側に寄って残り、同心円状の痕跡が見られない。焼成方法はAが12点で、Bが23点、不明が7点であり、形態ではd・f がBのみであり、a・b・c・e にはA・Bの両者が存在している。

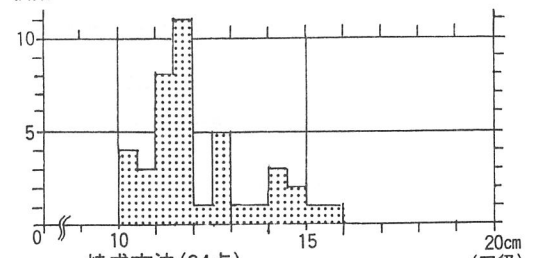
また、口径の大きさ分布をみると (第130図)、口径が10.1~12.0cmまでの蓋では、A・Bの両者があり、口径が12.1~15.0cmの蓋は裏返しにしたBで、口径が15.1~16.0cmの2点は上向けにしたAの焼成方法である。なお、1006はBの焼成で蓋の天井部の外面に直径11.0cmの釉跡が片側に沿って残り、内面には直径6.0cmの高台の先端1/3程が接合している。高台上は (図の点線内側)、無釉の状態であり、その外側には全体に釉がかかっている。この個体では、高台の付いた壺類を上置いて窯詰していたことがうかがえる。また、1046の短頸壺では釉跡の痕跡から、蓋を斜めにした状態のAによる焼成方法を行っているが、大半の壺は口縁部に沿って頸部近くに釉の痕跡が認められる。

表50は、Bの天井部外面に残る釉跡の直径であり、組み合わせていた短頸壺の口径を示している。両者の口径差は0.3~4.5cmと蓋の口径と大きさにかかなりの幅がみられる。口径差が1.6~2.0cmのものが4点で最も多く、次に口径差が2.6~3.0cmと0.3~0.5cmのものが各2点ずつであり、他の5点は5mm間隔で区分すると各1点ずつの分布となっている。

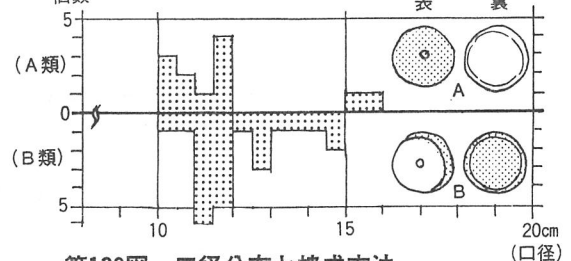


第129図 壺蓋の形態

個数 壺蓋の口径分布 (42点)



個数 焼成方法 (34点)

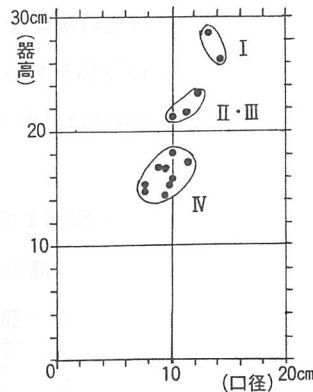


第130図 口径分布と焼成方法

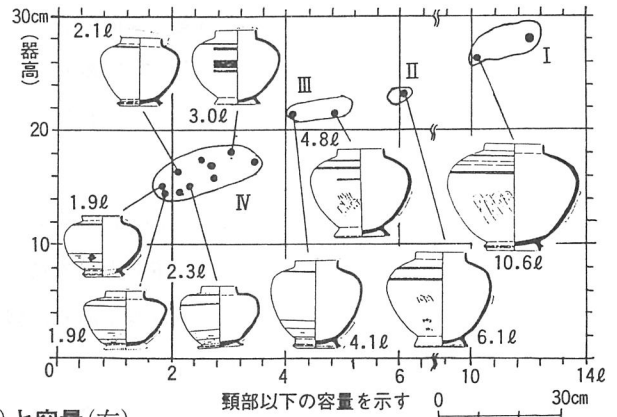
短頸壺 (第166図1025～第168図1053)

短頸壺は体部と口縁部数から33点が出土しており、その大きさは容量から次の4種に区分した(第131図)。I種は1025～1027の口径が16.6～14.2cmであり、器高は1027が26.3cmで焼き歪んだ1026が28.9cmである。体部の最大径は

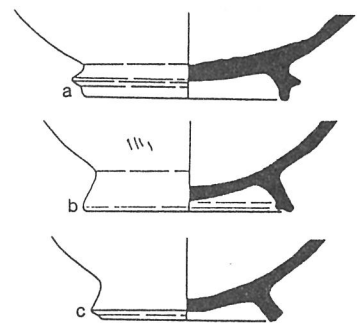
35.0～32.8cmある。容量は1026が変形しているが、実測図による計算では約12.7ℓであり、1027が約10.6ℓである。重さは1026がかなり石膏による復元をしているが約5.1kgであり、1027が約4.4kgである。II種の容量は1029が約6.1ℓで口径が12.2cm、器高が23.3cmであり、



第131図 短頸壺の法量(左)と容量(右)



体部最大径が26.7cmである。重さは約2.6kgである。1028・1030は口径が13.3cmと12.5cm、体部最大径が28.4cmと27.6cmであり、容量は6ℓ代に近い大きさであろう。III種は1035が約4.8ℓ、1031が約4.1ℓである。この法量は口径が11.5cmと10.2cmであり、器高が21.8cmと21.4cmであり、体部最大径が25.0cmと21.4cmである。重さは1035が約2.3kg、1031が約2.0kgである。1032・1033は口径や体部最大径の大きさからIII種に含まれる。IV種には1036～1040、1042～1052があり、容量が約3.4～1.9ℓである。法量は口径が11.7～8.7cmで、器高が18.2～15.0cmで、体部最大径が21.7～19.2cmの大きさである。重さは1037が約1.4kg、1045が約1.3kgである。



第132図 壺類の高台形態

口径と器高の割合を比較するとI種では口径が器高の2.2倍と1.85倍であり、II種が1.9倍、III種が2.1～1.9倍、IV種が1.9～1.45倍であり、IV種では少し丈の低い形態のものが含まれる。また、口径と体部最大径との比較では、I種が体部最大径が口径の2.3倍と2.7倍であり、II種が1.9倍、III種が2.2倍、IV種が2.3～1.6倍でかなり幅がある。

高台の端部形態では、1027のように下方に向けて嘴状に先細るaと、1029のように端部が平面近くに接し端部が肥厚するb、1031のように端部が外方に向けて少し肥厚するcがある。図の掲載分15点では、aはI種の1点のみであり、bの6点ではI・II種が各1点とIII種が4点である。cの8点ではIII種が2点とIV種が6点であり、b・cが主体を占めている。器面調整は1029・1030・1035・1041・1045の5点にタタキ目が一部残り、体部下半を水平方向に二から三面をヘラ削りしているものが多く、一部にカキ目を施している。体部の上面には二本組の沈線を巡らしている。また、多くのものは有蓋で焼成しているが、内底面に釉が残る1031・1043・1048・1051・1052は、焼成時に無蓋の状態であり自然釉がかかっている。

獣足 (第168図1054～1056)

壺に付く獣足は3点が出土し、いずれも表面が暗灰色の色調で、中心が淡赤褐色をなしている。脚部は、表面を指先で調整しており、脚部の長さが4～5cmと短く直径が3.2cm程の太さである。先端部には1054に4箇所、1055・1056には各5箇所の幅2mm程の浅い切り込みを入れ指を表示している。なお、1054は接合面で剝離し壺の平行タタキ痕が残る。

細頸壺A (第169図1057～1059)

底部を含め3点が出土している。1057は口径が7.7cm、器高が16.7cmで体部最大径が19.2cmである。容量は約780ccである。1059は口径が10.0cm、高台を欠くが器高が20.5cm程とみられ、体部最大径が17.8cmである。細く絞り込んだ

頸部と体部の接合は内面が少し肥厚している。1058は1057の底部と大きさや形態がほぼ同様である。

**細頸壺 B** (第169図1060・1061)

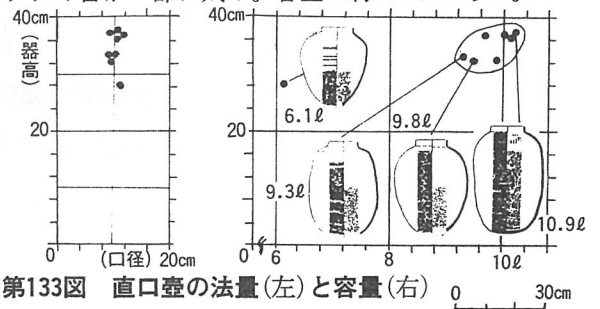
壺2点の口径は、1060が8.7cm、1061が8.8cmであり、口縁端部が共に三角状に先細る。両壺の細い口頸部中程には二本組の沈線を巡らし、1060の頸部境には低い有段部をもつ。1061には有段部がないが、共に内面には接合したつなぎ目が二箇所に残る。1060の体部上半には二本組の沈線を配し、球形の体部をもち内外面をロクロナデ調整する。この壺の推定器高を28.5cm程と見込むと図上の容量は約3.9ℓとなる。1061には外面をカキ目調整している。

**広口壺** (第169図1062)

壺は1点のみであり、法量は口径が16.2cm、器高が18.6cm、口縁部から頸部までの高さが7.0cmの大きさである。体部は半球状をなし、鋭角に屈曲する体部の最大径が21.7cmの大きさである。高台の形態は端部が下方に尖るaであり、内面には高台に沿って接合時の指頭痕があり、体部下半はHcのタタキ目が一部に残る。容量は約1.5ℓである。

**直口壺** (第169図1063～第170図1071)

直口壺は9点を数える。体部形態は細長いまゆをしたaと、体部上半が大きく下半が少し小さくなる卵形のbがある。aには1063～1066と1068・1069がある。1063～1066は色調がいずれも赤褐色をした生焼けの状態、法量は口径が11.2～11.8cm、器高が36.8～37.5cm、体部最大径が24.3～25.4cmの大きさである。更に内外面に同種類のタタキ文が用いられ、体部のカキ目及び外底面の同心円状カキ目等に共通点が多く見られる。この4点の壺は同一工人が製作にたずさわって、窯で同時に焼成したものの失敗品を廃棄した可能性が高い。4点の容量は約9.7～10.9ℓで、重さが約3.7～3.9kgである。



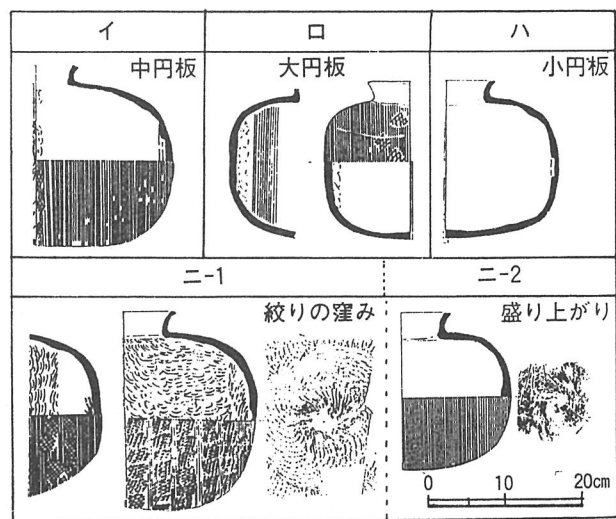
第133図 直口壺の法量(左)と容量(右)

1069は体部が全体にフットボール状に丸みがあり、器高が約32.5cm、容量が約9.8ℓである。1068は体部上半が少し角張り、器高が約33.4cm、容量が9.3ℓである。また1067は1/6程度の小さな破片で傾きに少し正確さを欠いている。これら3点は細部形態に若干の相違があるが、内外面に同種類のタタキ文を使用している。1070の形態はbであり、器高が28.0cmと前者より小さく、容量も約6.1ℓと少なくなっている。1071は大きく焼き歪み形態が不明確であるが、内外面に1070と同種類のタタキ文が施され、体部上半のカキ目調整も似ている。

**横瓶** (第171図1072～第176図1104)

横瓶の体部形態は、殆どが細長いまゆ形を基本としており、側面的一方をわずかに扁平にし、反対の側面を丸く球形にする傾向がある。器面の調整方法には大きくa・bの二種があり、aは内外面にタタキ文を残すもので、bは外面にカキ目調整し、内面をロクロナデするものである。

横瓶の両側面の閉塞には次の四手法が用いられており、各々の組み合わせが存在する。イ手法は、直径4.5～8.0cmの大きさをした薄い円盤を当てたるもので、内面の接合部周辺を主にロクロナデしている。ロ手法は、側面を直径8.5～10.0cmの円形状に塞ぎ、体部と側面の接合面の回りを指先で押さえ、内面の周辺はナデやロクロナデを加えているもの。ハ手法は、側面を中央に直径1.3～2.5cmのごく小さな円形の浅い窪みを残したもので、内面の側面周辺はロクロナデを加えているもの。ニ手法は、タタキ



第134図 横瓶側面の閉塞手法



表54 側面閉塞法の割合 (図掲載分)

閉塞法	イ	ロ	ハ	ニ	計
a調整	17	3	2	3	25点
b調整	7	9	5	2	23点
合計	24	12	7	5	48点
割合(%)	50.0	25.0	14.6	10.4	100

文やロクロナデした側面の中心に絞り目(左回り)があり、中央に小さな窪みや、盛り上がり部がある。

横瓶の側面閉塞の手法は、図掲載分の片側を1点として数えると表54のと通りの割合となる。手法別ではイが最も多く50.0%を占め、ロが25.0%となり、ハが14.6%、ニが10.4%と順次少なくなる。器面調整のタタキ文を残すaとカキ目を残すbを比較すると、aではイが68%と高く、ロ・ハ・ニがそれぞれ8~12%と低い。bではロ・イが30~39%で、ハが22%、ニが9%となっていて、aではイが68%と割合が高いが、bでは30%と低く、bではロやハがaの二倍近い高い比率を示し、器面調整による相違が見られる。

側面の閉塞手法の組み合わせは、復元できた個体21点をもとに、器面調整と法量に区分し結果を表55に示した。法量が多いI・II種では、両側面を円盤で閉塞するイ・イの個体がaに多く、逆にbには確認されない。しかし、片側を円盤で塞ぎ、反対の側面を大きな円形状のもので塞ぐイ・ロや、ロとニの組み合わせは、aにはなく逆にbに存在している。更にロとハの組み合わせもbに多く、aに少なくなっており対照的である。確認できた個体は多くないが、閉塞手法の組み合わせは、器面調整や法量と関係しているようである。

横瓶の法量は(第135図)、まゆ形をした体部の長さや体部の最大径により大きく異なる。

口径は9.2~12.0cmと大差がなく、体部の最大径は23.0~16.4cmと幅がある。I種は体部の長さが36.8~33.7cm、体部最大径が23.1~21.4cmで、容量が約9.0~約7.3ℓで器面調整はaが7点とbが2点である。

II種は体部の長さが30.3~28.3cm、体部の最大径が19.6~19.1cmで、容量が約5.9~約4.8ℓである。器面調整ではa・bが半々の割合である。

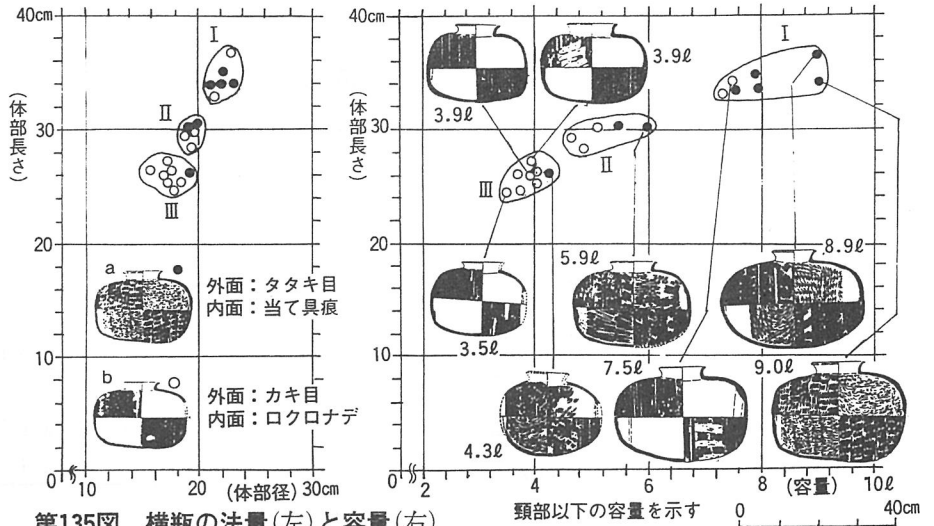
III種は体部の長さが27.3~24.6cm、体部最大径が18.8~16.4cmで、容量が約4.3~約3.5ℓであり、器面調整ではaが1点と少なく、bは7点と多くなっている。復元品の容量ではI・III種が各約4割とII種が2割程度の比率である。

鉢 (第176図1105・1107)

鉢は2個体が出土した。1105は、口径が22.4cm、器高が14.2cmでわずかに口縁部の一部を欠く以外は残存状態が良い。体部下半は斜め方向のヘラ削りを行い、体部をカキ目調整する。体部の両側に三角形をした角状の把手が付く。内底面には同心円の当て具痕(Da-8)を全体に残し、外面はナデによりタタキ目を留めない。1107は口径が40.0cm、器高が24.0cmの大きさで、口縁端部を内面に少し肥厚させ、体部から底部にかけてタタキ調整を行い、上半にカキ目を加える。体部の中程に幅約9cmで高さ3cm程、中央穴が2.3cmの環状をした把手を器面上に張り付ける。容量及び

表55 横瓶の側面閉塞方法の組合せ (図番号)

		イ	イ	イ	ロ	イ	ハ	イ	ニ	ロ	ハ	ロ	ニ	ハ	ニ	計	
a調整	I	1077	1079			1075	1080								1072	8点	
	II	1082	1088			1085											
	III	1104														1点	
b調整	I			1086	1089					1076							4点
	II			1090													
	III			1095					1092	1093	1091	1092				7点	
計				5		4		2	1		4		3		1	20点	



第135図 横瓶の法量(左)と容量(右)

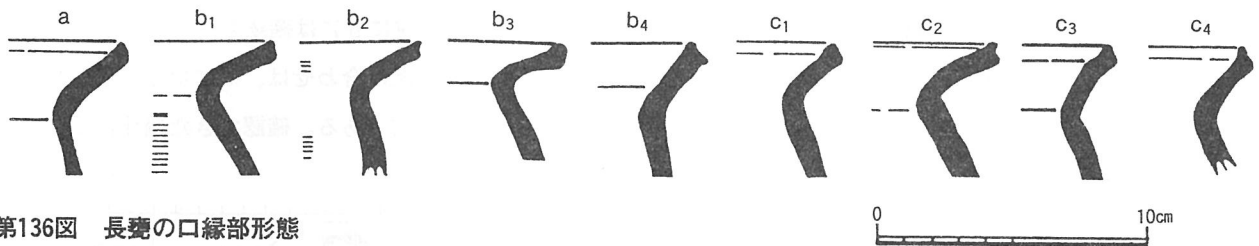
重さは1105が約3.1ℓで約1.4kgであり、1107は約17.1ℓで約6.3kgと重い。

なお、第180図1141・1142の把手は、長さが15.4cmと16.0cmの弓状をし、最大幅が2.6～2.4cm、最大厚さが2.6～2.4cmの表面を指頭でなでたもので、剝離面にはタタキ目のHc痕が残る。出土品では接合する個体が確認されない。

**長甕** (第176図1106、第177図1108～第180図1140)

長甕は口縁部のみのもを含め36点が出土している。法量は口径が17.5～21.8cmと幅があるが、口径が19.2～20.3cmの大きさのものが69%を占めている。器高は殆どが30.0～33.6cmのもので、1点だけが35.0cmの高さである。容量は15点を図上から求めると、1111の約5.1ℓを最少にして、1117の約7.2ℓを最大としている。この中でも5.6～6.8ℓに10点が含まれており、更に4点が6.0ℓに集中している。他は5.1ℓ、5.3ℓ、7.2ℓが各1点の割合である。

口縁部の形態は、I地区同様に基本的に三種類がある(第136図)。aは口縁端部を丸くするもの。bは口縁端部を斜め上方に面取りするもので、b<sub>1</sub>は面取り部が平坦面をなすもの。b<sub>2</sub>は面取り部が少し中窪みになるもの。b<sub>3</sub>は面取り部が少し丸みを帯びるもの。b<sub>4</sub>は面取り部が角張り肥厚するものである。cは口縁端部が上方に少し引き上げるもので、c<sub>1</sub>は内面の口縁端部より幅1cm程を全体に少し肥厚させ稜線が入るもの。c<sub>2</sub>は口縁部を少し引き上げ内面に弱い稜線が入るもの。c<sub>3</sub>は口縁端部を上方に引き上げ内面が少し湾曲するもの。c<sub>4</sub>は口縁端部が先細るものである。図掲載分31点の口縁部形態(表56)は、aが1点で3.2%、bが13点41.9%、cが17点54.9%の割合で主体を



第136図 長甕の口縁部形態

なしている。中でも多い形態は、b<sub>1</sub>が7点の22.6%、c<sub>1</sub>が10点の32.3%であり、合わせて半数余りを占めている。他の形態は1～3点と数少ない。また、タタキ文の種類と口縁部形態の関係をみると(第137図)、外面には四種類のタタキ文が施されており、Ha-2は8点で内面に二種類が用いられ、口縁部の形態は五種類と多い。外面Hb-1は1点のみである。Hc-1は6点を数え内面に二種類見られ、口縁部形態が二種類である。Hc-2には内面に三種類があり、口縁部形態が四種類と多い。口縁部形態のb<sub>1</sub>は外面の四種類に共通し、c<sub>1</sub>はHb-1を除くもの三種類に存在する。更にc<sub>2</sub>・c<sub>3</sub>・c<sub>4</sub>はHa-2とHc-2のタタキ目の口縁部に存在する内面Da-8では、口縁部形態のc<sub>1</sub>のものが6点と多いことが目立つが、他に厳密な使い分けが明確に把握できず、かなり多用な様相をなしている。

表56 長甕の口縁部形態と叩き文

形態	点数	タタキ文の種類	外面	内面
a	1	Hc-2·Da-1	1	1
b <sub>1</sub>	7	Ha-2·Da-2, Da-6, Hb-1·Da-7, Hc-1·Da-8	3	4
b <sub>2</sub>	3	(口縁部のみ)	—	—
b <sub>3</sub>	1	Ha-2·Da-?	1	1
b <sub>4</sub>	2	Hc-?·Da	1	1
c <sub>1</sub>	10	Ha-2·Da-1, Da-4, Da-6, Hc-2·Da-1, Da-8	2	4
c <sub>2</sub>	2	Ha-2·Da-4	1	1
c <sub>3</sub>	2	Ha-2·Da-6, Hc-2·Da-1	2	2
c <sub>4</sub>	3	Ha-2·Da-6, Hc-2·Da-6	2	1

口縁	b <sub>1</sub> ·c <sub>1</sub> ·c <sub>2</sub> ·c <sub>3</sub> ·c <sub>4</sub>	b <sub>1</sub>	b <sub>1</sub> ·c <sub>1</sub>	a·c <sub>1</sub> ·c <sub>3</sub> ·c <sub>4</sub>
外面	Ha-2	Hb-1	Hc-1	Hc-2
内面	Da-4·5·6	Da-7	Da-2·8	Da-1·2?

形態・調整方法				
	外:ケズリ 内:カキ文 内外面:タタキ文	外:ケズリ 内:カキ文 内外面:タタキ文	外:ケズリ 内:ハケ目 内外面:タタキ文	外:ケズリ 内:カキ文 内外面:タタキ文

第137図 長甕の器面調整

器面の調整はI地区の分類では、体部外面の下半をヘラ削りするa手法と、タタキ調整のみを行うb手法がある。体部内面の上半はロクロナデとカキ目を加えたものがある。内面の下半はハケ目のみの1手法と内面タタキ文の上にハケ目を重ねた2手法、当て具痕を残す3手法に三分される。

当地区の長甕は、外面下半をヘラ削りし更にタタキ目を加えたa・bの両手法を併用したものと、b手法のみのものがほぼ半分ずつある。また、内面上半をロクロナデしたものでは1手法はなく、2手法では外面がHa-2のタタキ目をもつ4点の内面当て具痕がDa-4・6であり、底面にハケ目を入れている。外面がHc-2のタタキ目4点には2手法を用いており、内面がDa-1・2のみである。3手法は外面がHa-2・Hb-1・Hc-1のタタキ文をもつものに(1128・1117・1132)各1点が見られる。体部内面上半にカキ目を入れたものでは、Hb-1以外の3種の外面タタキ文が施され、下半内面にはDa-6・8を残した3手法となっていて、特定のタタキ文の種類と器面調整には少なからず関連性が存在している。

**甕A** (第180図1145～第182図1157・1159・1160)

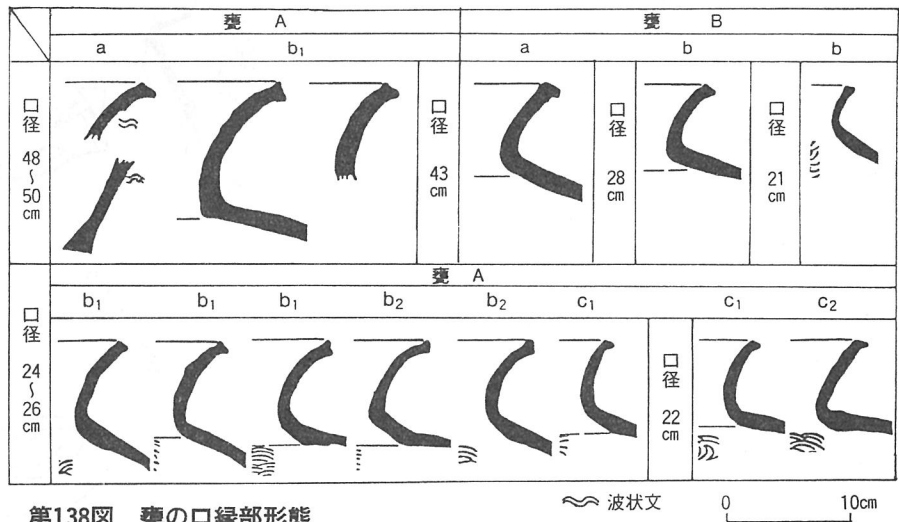
甕A・Bは、頸部以下の容量によりI～IV種に区分した。甕Aは長い頸部が外反して立ち上がるもので、口縁部の形態により細分できる。aは口縁端部を外方に引き出したもので、I種の1147と1148が同一個体の可能性が高い。口径は48～50cmの大きさに頸部に波状文を巡らせる。

b<sub>1</sub>は口縁端部を両側に若干広げるものであり、口径は1149が49cmで、1145が45cmである。Ⅲ種の口径の大きさは、図掲載分では26.2～24.0cmのものが8点と、21.8～21.4cmのものが2点あって、合わせると10点と数多く甕の主体を占めている。口縁部の形態ではb<sub>1</sub>が5点であり、b<sub>2</sub>の口縁端部を上方に引き出したものが2点である。Cは口縁端部を下方に向けて肥厚したもので3点を数える。

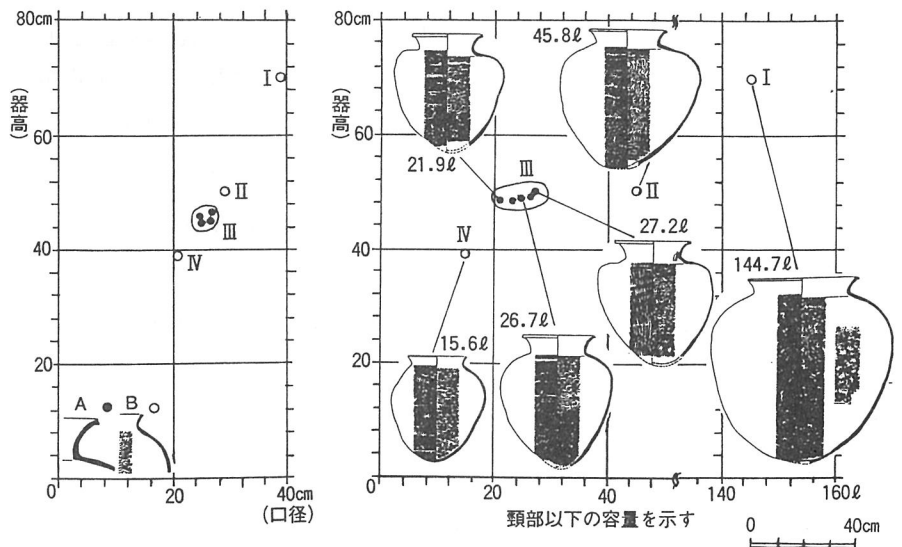
甕A I種には、復元可能な個体がないが、口径の大きさから甕B

表57 長甕の器面調整 (点数)

手法 タタキ	外面		内面・ロクロナデ			カキ目
	a・b	b	1	2底	3	
Ha-2	6	5	5	4		3
Hb-1		1			1	
Hc-1	3	3	2			3
Hc-2	2	3	1		4	1
外計	11	12	8	4	5	7
Da-1	1	3			3	
Da-2	1	1	1		1	
Da-4	1	2		2		
Da-6	4	1	2	1		2
Da-7		1	1			
Da-8	3	2	2	3	4	4
内計	10	10	6	6	8	6



第138図 甕の口縁部形態



第139図 甕の法量(左)と容量(右)

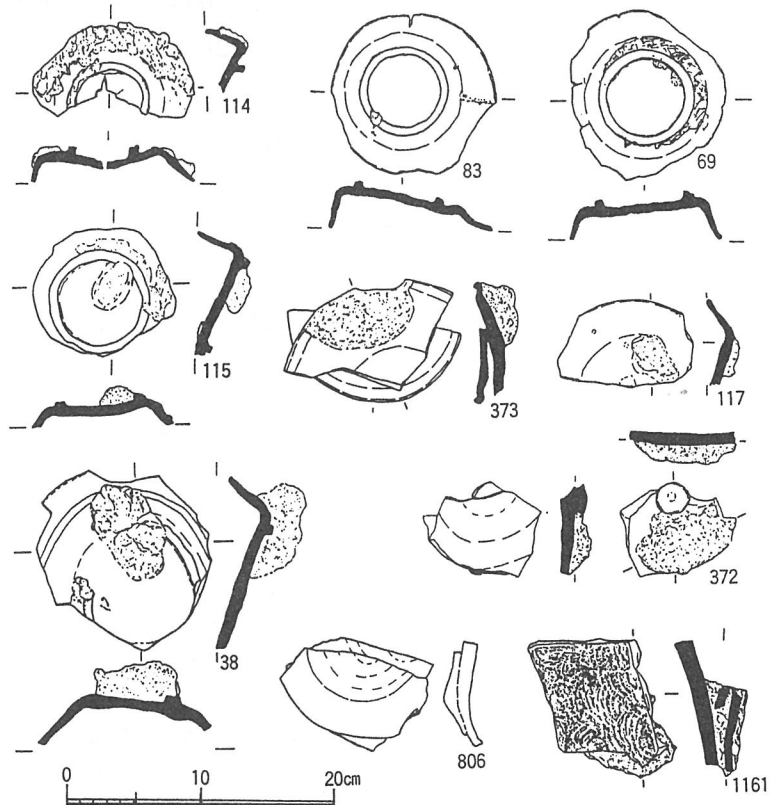
の1143に相当する以上の容量が推測できる。Ⅲ種では器高が約49.2~44.2cmのものが5点あり、容量は約27.2~約21.9ℓと変動の幅が少ない。重さは1560が約7.6kg、1150が約6.2kg、1157が約5.6kgであり、似かよった容量でも器面の厚さによって約3割に近い2kg程の差を生じている。

**甕B** (第180図1143・1144、第182図1158)

甕Bは口縁部の長さが5~6cmと短く外反するもので、わずかに3点の出土である。Ⅰ種の1143はほぼ全形が完存しており、口径が39.0cmで器高が69.0cmである。容量は約144.7ℓで重さが約30.8kgである。Ⅱ種の1144は口径が28.0cmあり器高が約51.0cmである。口縁部から5.1cm下がった頸部内面の位置には、幅0.6cm、長さ1cm程の小さな範囲に布目痕が残っている。容量は約45.8ℓで、体部器面の厚さは全体にやや薄く重さが12.3kgである。Ⅳ種の1158は口径が20.8cmで器高が39.5cmあり、底部外面はタタキ目調整後にカキ目を加えていて、底部の中央は横瓶の側面調整のように同心円をなしており(第145図拓本)、中心から幅1.3cmの中に十数本の条線が左回り方向に抜けている。容量は15.6ℓで重さが約5.0kgである。

**焼台** (第182図1161・1162)

灰層出土の焼台には、杯A・Bや甕片等の破片が利用されている。1161は甕の体部破片にスサ入り粘土が一面に付いている。1162は口径が21.8cmの高杯であり、1/12の破片でスサ入り粘土を用いている。また、焼台には先述した第3次床面の杯Bでも破損した破片を再利用している。杯A・Bでは多くが外底面を上向きにし、杯蓋では内面を上にした状態で二次焼成を受けている。これらの破損した転用品にはスサ入り粘土を補助的に用い、焼台として床面との安定や焼成品の水平位置の確保を図ったとみられる(第140図)。



第140図 焼台 (1161は1/8.6)

**硯** (第182図1166)

1166は上端の直径が8.8cm、下端の直径が9.8cmで高さ2.9cmの大きさをした小形の円面硯である。硯面として使用する上面の直径が

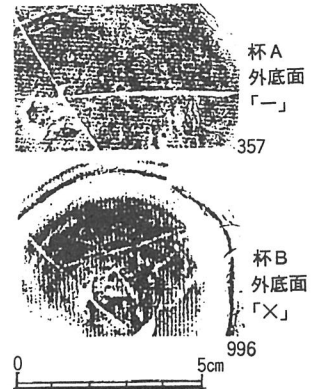
6.1cm程でほぼ平面をなしている。脚部には高さが0.6cmで横幅が3.3cmと4.3cm程の四角い透かしを交互に四箇所に入れている。この透かしと透かしの間には沈線による鋸歯状文を描いている。また、硯の裏面中央にはヘラ書き沈線による文字状の記号が書き込まれている。

**土師器** (第182図1163~1165)

灰層出土の土師器には、1163のロクロ成形の小形甕と、1165の外面をヘラ削りし底面に荒い糸切り痕をもつ甕がある。1164は外底面に細かい回転糸切り痕をもち、内面に煤状炭化物が全面に付くことから椀の底部と見られる。

**ヘラ記号** (第141図)

記号はわずかに2点の出土である。357の杯Aは口径が12.2cmで器高が3.3cmの外底面であり、996の杯Bは口径が11.2cmで器高が4.0cmで、胎土に砂粒を少し多く含む。



第141図 ヘラ記号 (1/2)

(6) XV地区の叩き文様について (第142~144図)

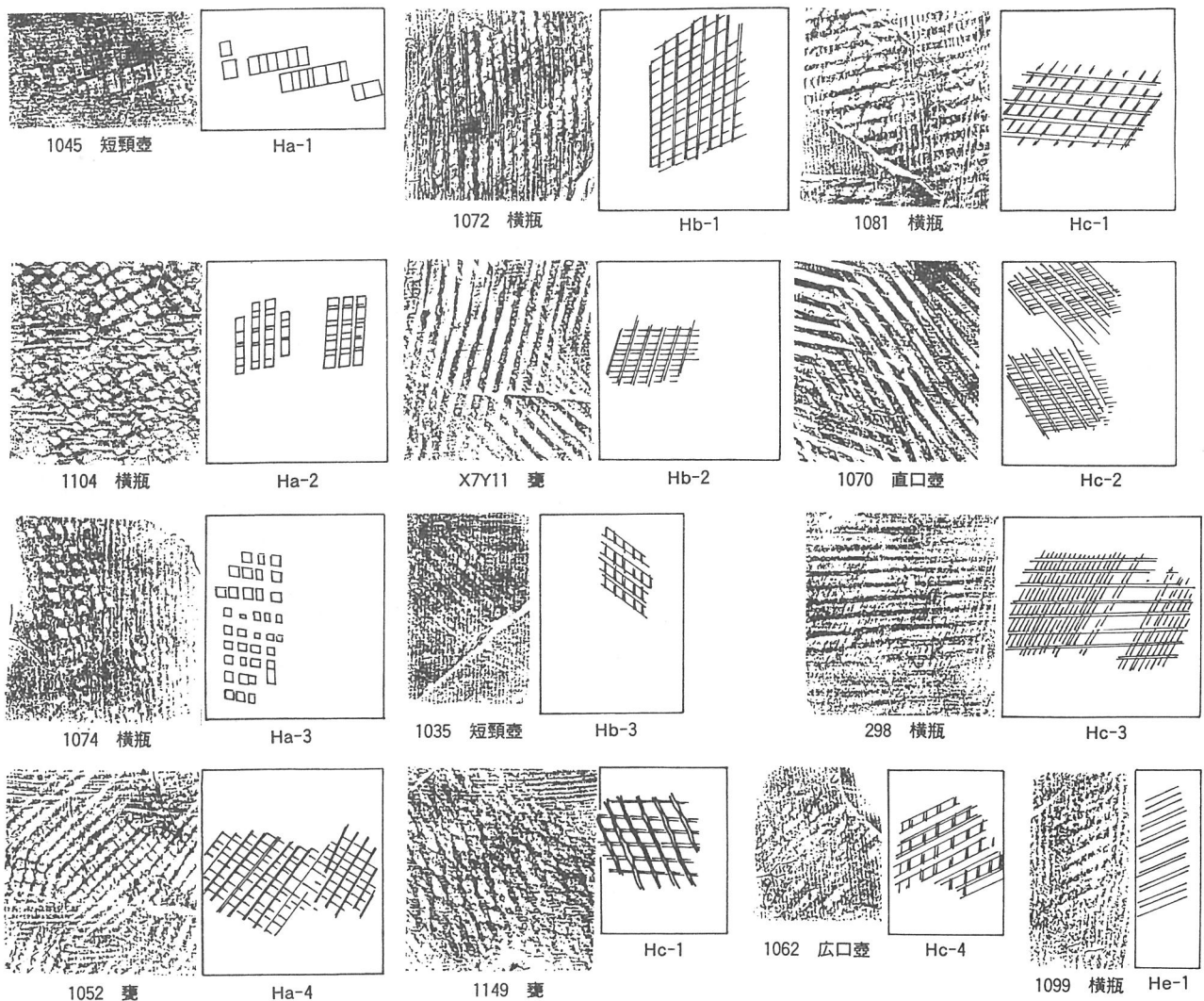
XV地区出土の須恵器成形時に使用されたタタキ文様は、I地区の分類に準じて示すと次の種類がある。

外面のタタキ目文には、平行線文の彫り込みが木目に平行するHaが4種類、木目に右上がりに斜行するHbが3種類、木目に左上がりに斜行するHcが3種類、彫り込みに木目が見られないHeが1種類である。

内面のタタキ目文には、同心円文に木目が見られないDaが9種類と、Hbの原体に格子や平行線等を彫り込んだ特殊文が2種類、彫り込みに木目が見られないHeが1種類である。

外面の叩き目文 (第142図)

Ha-1類は条線の彫り込み幅が5~6mmで浅く、条線の幅が1.5mm程あり木目間隔が4mm程をした格子状の荒いもの。Ha-2類は条線の彫り込み幅が3mmで深く、条線の幅が1mm程で木目間隔が3mm程の格子状のもの。Ha-3類は条線の彫り込みの幅が2~3mm、条線の幅が1.5mm程で木目間隔が3mm程の細かいもの。Ha-4類は条線の彫り込みの幅が3mm、条線の幅が0.5mm程で木目がはっきりしており木目間隔が2mm程の更に細かいもの。Hb-1類は条線の彫り込みが浅く幅が3mm、条線の幅が1mm程で木目間隔が3mm程の細かく浅いもの。Hb-2類は条線の彫り込みが深く幅が3mmで、角張る条線の幅が2mm程で木目がはっきりしており、木目間隔が1cmの間に7本程入る細かく浅いもの。Hb-3類は条線の彫り込みが浅く2~2.5mm、条線の幅が2mm程で木目間隔が2mm程のもの。Hc-1類は条線の彫り込みが深く幅が3mm程、条線の幅が1.5mm程で木目間隔が1cmの間に3本程入る荒いもの。Hc-2類は条線の彫り込み

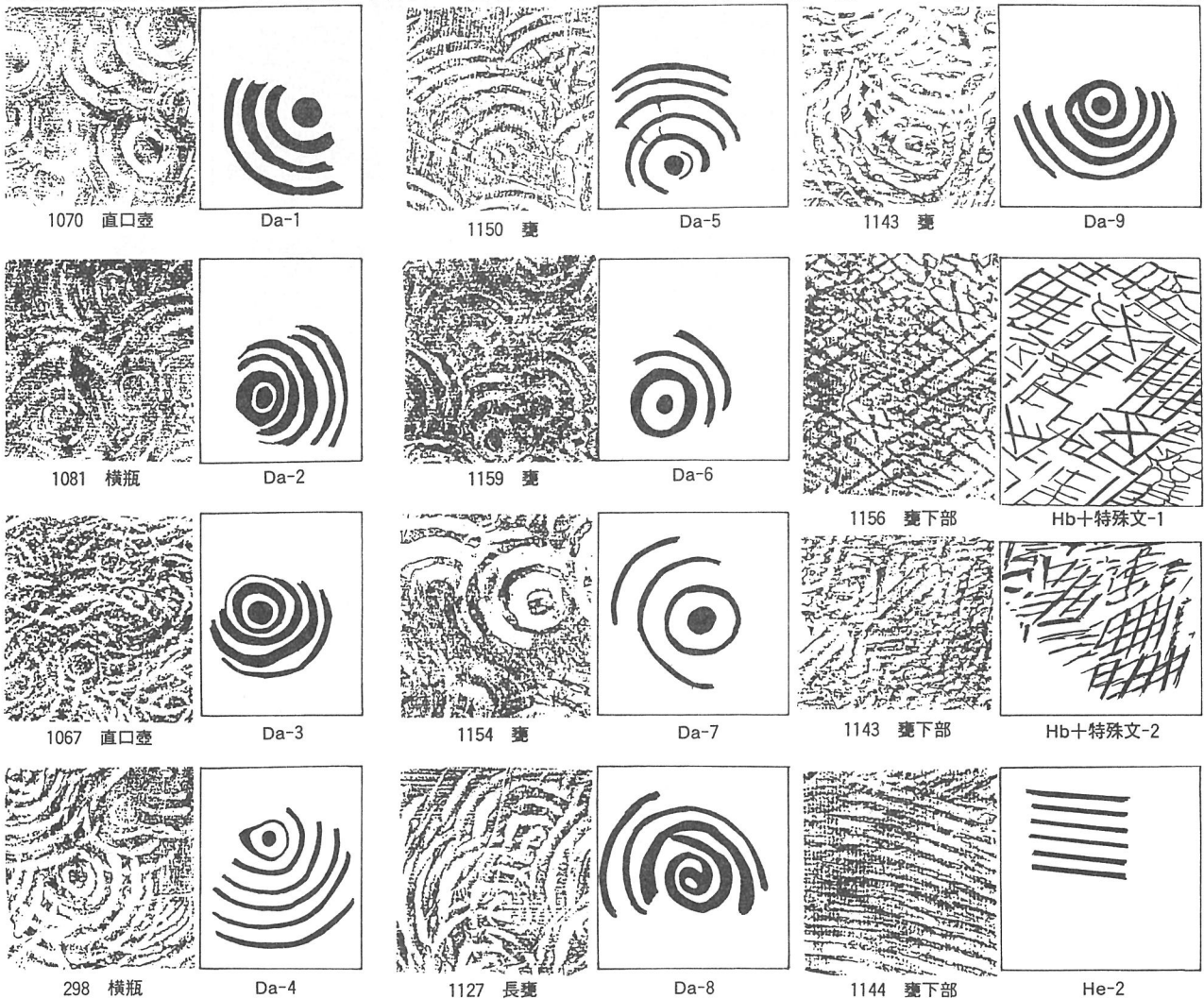


第142図 XV地区 外面叩き具の分類 (1/2)

が深く角張り幅が3mm程、条線の幅が2mm程で木目間隔が1cmの間に浅く8本程が入るもの。Hc-3類は条線の彫り込みがやや深く幅が3mm程、条線の幅が1.5mm程で木目間隔が1cmの間にごく浅く8本程が入るもの。Hc-4類は条線の彫り込みが浅く幅2.5mm程、条線の幅が2mm程で木目間隔が1.1cmの間に浅く4本程入るもの。Hc-5類は条線の彫り込みの幅が3mm、条線の幅が1mm程であるが木目部で少し太くなり、条線が波打って見え木目間隔が3mm程のもの。He-1類は条線の彫り込みが浅く幅3mm程、条線の幅が1.0~1.3mm程である。

内面叩き文 (第143図)

同心円文の分類は、それぞれの円の直径や年輪状の深さと幅等の違いから区分した。Da-1類は中心円形が9mmの大きさで同心円の彫り込みが深く角張り間隔が3.5mm程で、三重目の外側での直径が2.5cmであり、円形の線部の幅が3mm程である。Da-2類は中心円形が6mmの大きさで同心円の彫り込み間隔が1.3mm程と細かく、三重目の外側での長径が2.3cm、短径2.1cmであり、円形の線部の幅が三重目まで3~4mmと変化がある。Da-3類は中心円形が5mmの大きさで同心円の彫り込みが狭く沈線状をした間隔が1.5mm程と細かく、三重目の外側での直径が2.3cmである。円形の線部の幅2mm程である。Da-4類は中心円形が5mmの大きさで同心円の彫り込みが深く角張り間隔が3.0mm程で、三重目の外側での直径が2.1cmであり、円形の線部の幅2mm程である。Da-5類は中心円形が5mmの大きさで同心円の彫り込みが深く角張り間隔が4.0mm程で、三重目の外側での直径が2.8cmであり、円形の線部の幅2mm程である。二~四重目にかけて2箇所亀裂による短い線が入っている。Da-6類は中心円形が6mmの大きさで同心円の彫り込みが深く角張り間隔が3.0mm程で、三重目の外側での直径が3.0cmであり、円形の線部の幅2~3mm程である。Da-7類は中心



第143図 XV地区 内面叩き具の分類 (1/2)

円形が7mmの大きさと同心円の彫り込みが深く角張り間隔が5.0~7.0mmと広く、三重目の外側での直径が3.6cmであり、円形の線部の幅が3mm程と狭い。Da-8類は中心円形が7mmの大きさと二重目にかけて左回りの渦巻き状にめぐらる。同心円の彫り込みが深く間隔は3.0mm程で、三重目の外側での直径が3.3cmであり、円形の線部の幅が1.5~3.0cm程である。Da-9類は中心円形が5mmの大きさと同心円の彫り込みが深く角張り間隔が3.0mm程で、三重目の外側での直径が2.3cmであり、円形の線部の幅が3mm程である。特殊文1はHbの原体を用いたもので、条線の彫り込み幅が4mm、条線の幅が1.5mmで木目間隔が1cmの間に5本が入っている。更に原体に5mm幅の斜格子や長さ1.5cm程の「×」印を配したものである。特殊文2はHbの原体を用いたもので、条線の彫り込み幅が5mm程、条線の幅が2mm程で木目間隔が1cmの間に5本入る。それに長さ3.5cm程の中程で角度が150~160度に折れた条線を4本程入れており、条線の彫り込み幅が3.5cmと広く条線幅が2mm程である。

#### 各器種ごとの叩き文について（第144・145図）

上記のタタキ文の分類をもとに各器種ごとに外面と内面に使用した原体の種類を第144・145図や表55~57に示した。短頸壺では内外の器面をロクロナデ調整するためにタタキ文が殆ど残らないが、わずかに体部下半の一部にHa-1、Hb-1・3、Hc-1の4種の原体を確認している（表68）。組み合わせた内面の原体は明らかでない。広口壺の外面体部下半ではHc-4の1種類のみである。鉢2個は、内面に共通した原体Da-7が用いられ、大形の鉢1個の外面にHb-1を使用している。

直口壺9点（表65）では、外面にHb-1の原体を7個体に多用し、内面の組み合わせにDa-3・7とがセットで使用されている。残る2個体は、外面にHc-1とHc-2を用いているが、内面の原体はDa-1のみであり、使用される内外面原体が3種類と少ない。また、内外面に使用される同一原体の壺は、器面調整に施される外面底部及び体部上半のカキ目の器面調整方法に外面原体の種類によって共通性が見られる。

タタキ文を有する横瓶30点（表67）では、外面に8種類、内面に6種類と多くの原体が使用されている。外面ではHcが16点56.7%と最も多く、Ha・Hbが各6点ずつで各20.0%である。この中でもHc-1が13点の43.3%と高い割合であるが、Hb-1が5点の16.7%で半減し、更にHa-3が4点の13.3%で、Hc-2が3点等と少なくなる。内面ではDa-2・7が各7点でそれぞれに23.3%と高く、次いでDa-7が5点で16.7%であり、Da-3が4点の3.3%で、Da-1・3・6が各2点ずつである。内外面にセットで使用する原体の組み合わせでは、Hc-1とDa-2が7点で23.7%と最も多く次いでHb-1とDa-7が4点、Hc-1とDa-3が3点、Ha-3とDa-6及びHc-2とDa-1が各2点の順に少なく、他は5点が各1例のみである。原体の組み合わせによる成形方法の共通点を見ると、Hc-1とDa-2のタタキ文では、体部両側面1088・1079の2例と閉塞と片側4例に円盤状粘土板を当てている（第134図イ手法）。また、Hc-2とDa-2の1077の1例でも両側面がイ手法である。Hb-1とDa-7のタタキ文では、1072・1085の体部側面2例に円盤を当て（イ手法）ともう片方の内側面中央が絞り目をもつ小さな窪みで塞いでおり（ニ手法）、Ha-2とDa-6の1080やHa-2と内面にカキ目調整した1075でも側面の閉塞は前者同様にイ・ニ手法を組み合わせ用いている。

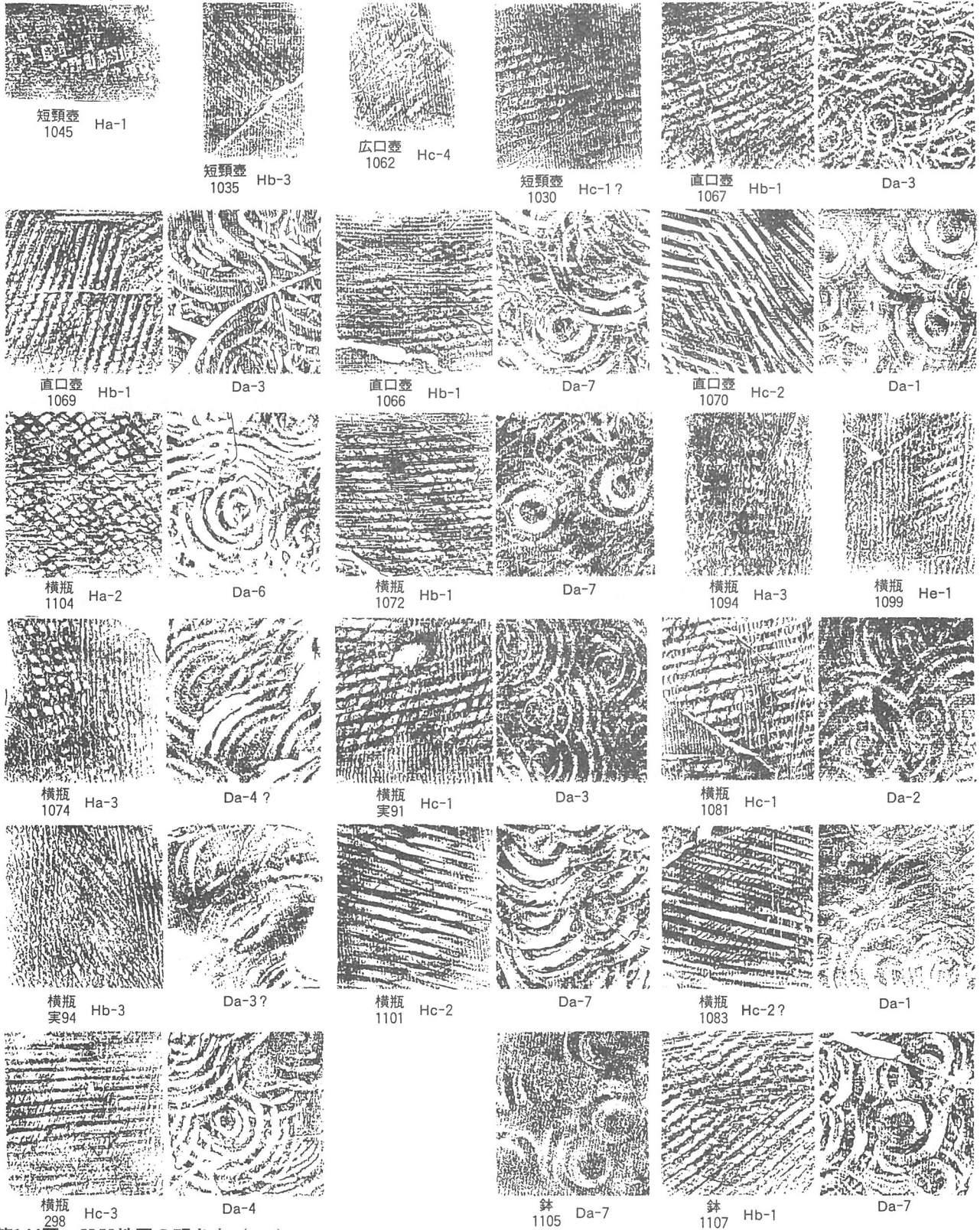
甕B3点の原体は、外面にHa・Hb・Hcが各1点で、内面にDa-7が1点でDa-9が2点である。

甕A12点（表63）では、外面に5種類、内面上半に3種類と内面下半に2種類の原体が用いられている。外面ではHb-1が6点の50.0%と最も多く、Haが2点を数えHcも2点である。原体の内外面の組み合わせでは、Hb-1とDa-7が6点と多く、その内底部まで復元した法量Ⅲの4点には、内面下半をHbの特殊文1が使用されていて、1158の甕Bの法量Ⅳの1点が上部から下部まで同一当て具痕が残るものである。また、法量ⅢにはHa-4とDa-6の組み合わせが3点あり、体部下半を失っているが、下部調整がわかる1159の1点には先のHbの特殊文1が使われている。法量Ⅲでは1150の1点のみが外面にHc-2?と内面にDa-5の原体をセットにしており、体部下半にHe-1を用いている。また、法量Ⅱは1144の1点しかないが、Ha-2とDa-9の組み合わせで内部底面近くにHe-1を使用する。法量Ⅰでは1143・

1149の外表面がHc-1であるが、1149の内面がDa-6であり、完形の1143の上半には法量Ⅱの内面と同じDa-9を用いて、下半にHbの特殊文2の当て具痕が残る。このように甕A・Bでは法量差によって内外表面原体の組み合わせの一つか二つの原体が共通している事例が確認できる。

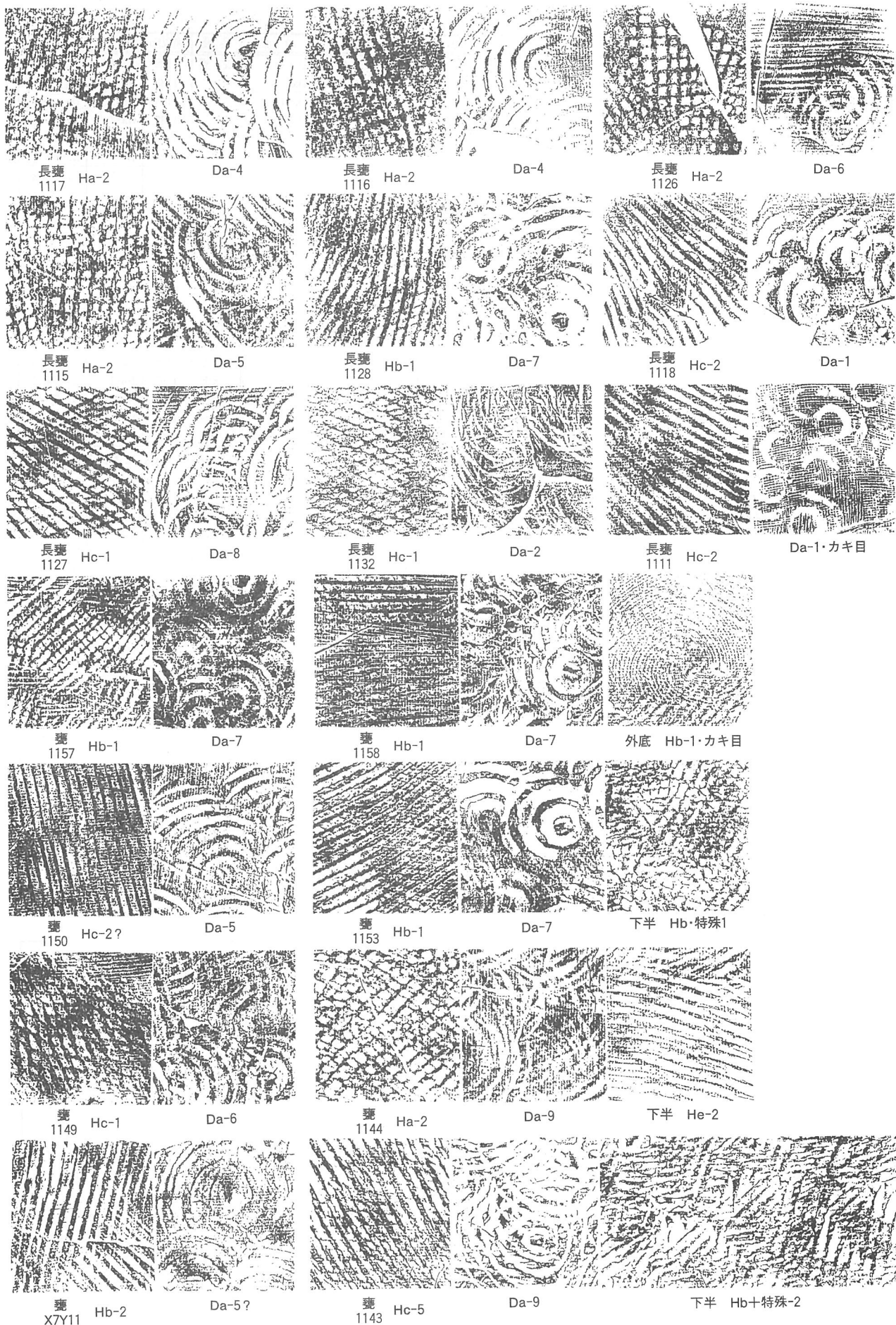
叩き文原体ごとの使用器種について（表59～63）

外面タタキ文85点の内訳はHaの4種が20点で23.5%であり、Hbの3種が26点で30.6%であり、Hcの5種が36点で



第144図 XV地区の叩き文 (1/2)





第145図 XV地区の叩き文(1/2)





42.3%であり、Heが1種1点で1.2%である。以下、それぞれの原体の種類ごとに使用する器種をみる（表61~65）。

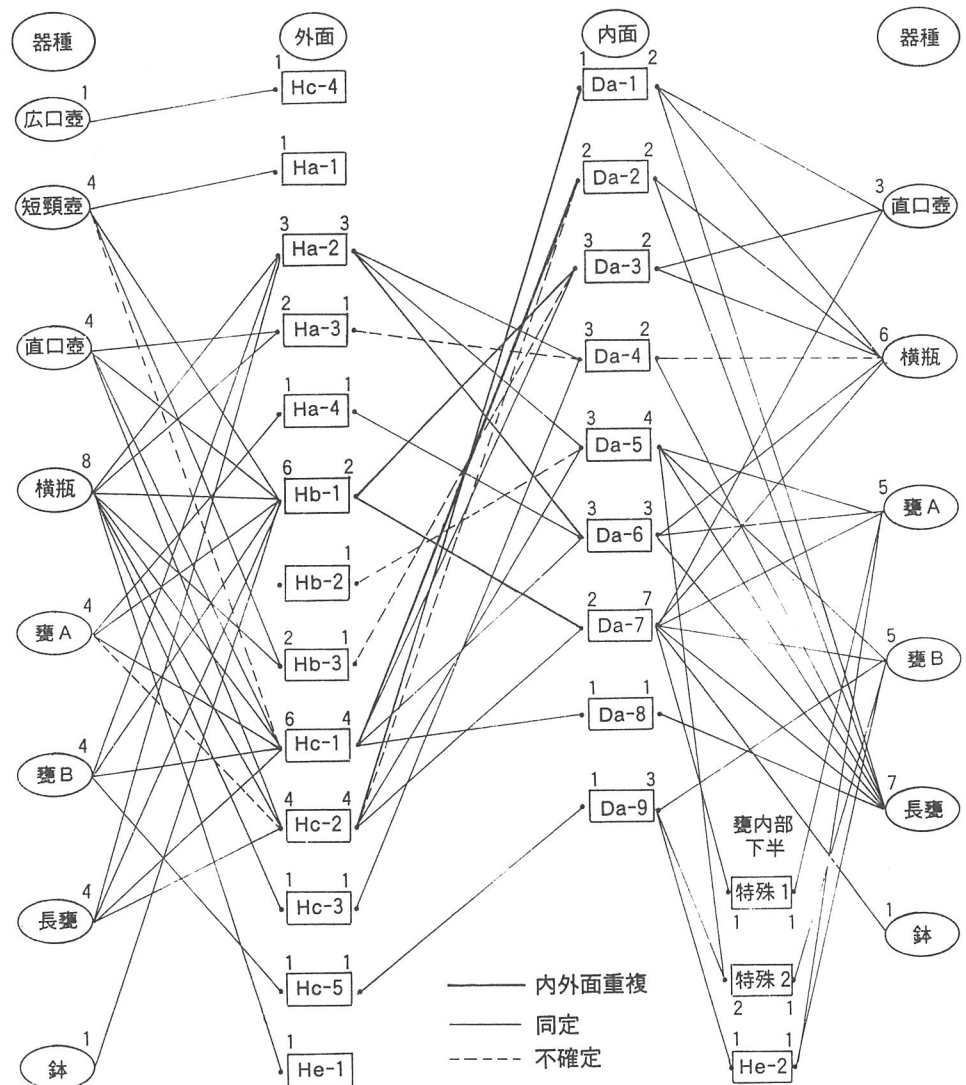
外面タタキ文ではHb-1が広口壺と長甕を除く6器種に22点が使用され、中でも直口壺に7点、横瓶と甕Aに各5点と多い。次に5器種に21点を使用したHc-1は、横瓶に13点と多く、短頸壺・直口壺・甕Aに各1点ずつである。4器種に12点を使用したHc-2は、長甕に7点と多く、横瓶に3点、直口壺・甕Aに各1点である。3器種に11点を使用したHa-2は、長甕に8点と多く、横瓶に2点、甕Bに1点である。2器種に使用したHa-4、Hb-2・3の3種の原体であり、Ha-4は甕Aと長甕に各2点であり、Hb-2は甕Aと長甕に各1点である。この他1器種のみを使用した5種の原体の状況は、Ha-1の短頸壺の1点やHa-4の甕Aの4点があり、Hc-3の横瓶、Hc-4の広口壺、Hc-5の甕B、Heの横瓶も各1点ずつが存在している。

内面タタキ文の種類がわかる72点の内訳は表61に示してある。最も多器種の使用は、Da-7の短頸壺と広口壺を除く6器種に用いたもので19点を数える。Da-7は甕Aに6点、横瓶に5点、直口壺に4点、鉢に2点、甕B・長甕の各1点である。次に多い3器種の使用はDa-6・1の原体であり、Da-6の11点の使用は、長甕に5点、横瓶・甕Aに各3点である。Da-1の10点の使用は長甕に6点、直口壺・横瓶に各2点である。2器種の使用はDa-2・3・4・5の4原体がある。Da-2の8点の使用は横瓶に7点、長甕に1点である。Da-3の7点の使用は横瓶に4点、直口壺に3点である。Da-4の5点の使用は長甕に3点、横瓶に2点である。Da-5の3点の使用は甕Aに2点、長甕に1点である。1器種の使用はDa-8は長甕の6点とDa-9は甕Bの2点である。

各器種とタタキ原体ごとの使用状況及び種類は、第146図に示したとおりである。

表69 内外面同一の叩き具

組	器種	図版No	外面	内面	
①	横瓶	1080	Ha-2・3	Da-6	
		1104	Ha-2	Da-6	
	長甕	1121	Ha-2	Da-6	
		1126	Ha-2	Da-6	
		1135	Ha-2	Da-6?	
②	直口壺	1069	Hb-1	Da-3	
	横瓶	実 94	Hb-1	Da-3?	
③	直口壺	1064	Hb-1	Da-7	
	横瓶	1066	Hb-1	Da-7	
		実 96	Hb-1	Da-7?	
		1078	Hb-1	Da-7	
		1085	Hb-1	Da-7	
	鉢	1107	Hb-1	Da-7	
	長甕	1128	Hb-1	Da-7	
	甕A III	1153	Hb-1	Da-7・特殊1	
	A III	1154	Hb-1	Da-7・特殊1	
	A III	1155	Hb-1	Da-7	
	A III	1156	Hb-1	Da-7・特殊1	
	A III	1157	Hb-1	Da-7・特殊1	
	B IV	1158	Hb-1	Da-7・同一	
	④	横瓶	1077	Hc-1	Da-2
1079			Hc-1	Da-2	
1081			Hc-1	Da-2	
1082			Hc-1	Da-2	
1084			Hc-1	Da-2	
1087			Hc-1	Da-2	
1088			Hc-1	Da-2	
1103			Hc-1	Da-2	
1132			Hc-1	Da-2	
長甕			1070	Hc-2	Da-1
⑤			直口壺	(1071)	Hc-2
	横瓶	1083	Hc-2	Da-1	
		1111	Hc-2	Da-1	
		1112	Hc-2	Da-1	
		1112	Hc-2	Da-1	



第146図 XV地区 器種ごとの叩き具（数字は原体数を表わす）

この中で、器種が異なる器面の内外面に同一タタキ文を組み合わせて使用したものが5組存在する(表69)。一部不確  
定な原体も含んでいるが、個体数が多く多器種に及ぶ組み合わせは、③のHb-1とDa-7をセットとし6器種にわたる。  
次いで多い使用器種は、⑤のHc-2とDa-1をセットにしたもので3器種におよぶ。その他、①②④が2器種にセット  
で使用されている。この中で外面のHb-1のみが内面にDa-1とDa-3を共通していて、複数の器種に共有した原体のあ  
り方は4組となる。この内外面に共通した原体使用のあり方は、須恵器生産体制を示唆するものである。4組の原体  
が生産に従事した4人の工人を示すのか、或いは工人集団が管理する原体が時間的な差で別々の工人が使用した結果  
なのかは、各器種と原体ごとの工人の癖や技法的な共通性や相違がないかをI地区の事例と合わせ検討を加えていき  
たい。

表70 XV地区 貯蔵具の容量

器種	図版No	容量 cc	石・升	器種	図版No	容量 cc	石・升	器種	図版No	容量 cc	石・升
短頸壺	1026	11,757	1斗3升8合832	直口壺	1069	9,770	1斗1升5合368	鉢	1107	17,075	2斗0升1合629
	1027	10,608	1斗2升5合262		1070	6,123	7升2合303		1109	5,833	6升8合878
	1029	6,056	7升1合125	横瓶	1072	8,951	1斗0升5合697		1110	6,050	7升1合441
	1031	4,125	4升8合709		1075	5,949	7升0合248		1111	5,145	6升0合754
	1035	4,804	5升6合727		1076	7,470	8升8合209		1113	6,059	7升1合547
	1036	3,437	4升0合585		1077	7,985	9升4合290		1114	6,755	7升9合766
	1037	4,804	5升6合727		1079	7,911	9升3合416		1116	6,630	7升8合290
	1043	2,739	3升2合343		1080	8,897	1斗0升5合059		1117	7,279	8升5合953
	1044	2,581	3升0合477		1082	7,546	8升9合109		1119	6,661	7升8合656
	1045	1,923	2升2合707		1086	7,293	8升6合119		1121	5,948	7升0合236
	1046	2,131	2升5合163	1088	5,490	6升4合828	1123		6,467	7升6合365	
	1077	2,628	3升1合832	1089	4,834	5升7合082	1126		6,400	7升5合574	
	1048	1,920	2升2合672	1090	5,178	6升1合144	1128		(5,569)	(6升5合761)	
	1051	2,119	2升5合022	1091	4,013	4升7合387	1136		5,312	6升2合726	
	1052	2,268	2升6合781	1092	3,941	4升6合537	1143		144,686	1石7斗0升8合579	
長頸壺	1057	778	9合186	1093	4,649	5升4合897	中	1144	45,824	5斗4升1合111	
	1059	1,459	1升7合228	1094	3,777	4升4合600		1150	(27,233)	3斗2升1合579	
	1062	1,547	1升8合267	1095	4,077	4升8合143		1153	26,652	3斗1升4合719	
直口壺	1063	10,296	1斗2升1合579	1096	3,678	4升3合431	1154	24,078	2斗8升4合324		
	1064	9,746	1斗1升5合085	1097	3,515	4升1合506	1156	27,611	3斗2升6合043		
	1065	10,907	1斗2升8合794	1099	3,923	4升6合324	1157	21,947	2斗5升9合160		
	1066	10,849	1斗2升8合110	1104	4,291	5升0合670	1158	15,609	1斗8升4合318		
	1068	9,301	1斗0升9合830	鉢	1105	3,079	3升6合358				

(容量は頸部以下を図上で計算、1升=846.85ccとして計算)

表71 XV地区 須恵器の重さ

No	器種	口径cm	器高cm	重量	残存	No	器種	口径cm	器高cm	重量	残存	容量cc	No	器種	口径cm	器高cm	重量	残存	容量cc
152	杯 A	11.7	3.8	167 g	完形	1057	長頸壺	7.7	16.7	701 g	完形	778	1068	直口壺	9.6	(33.4)	3.3kg	△	9,301
163		11.3	3.7	164 g	完形	1059		10.0	(20.5)	968 g	△	1,451	1069		10.5	(32.5)	3.1kg	△	9,770
760		11.5	3.7	166 g	完形	1062	広頸壺	16.2	18.6	1,630 g	△	1,546	1080	横瓶	23.0	36.8	3.5kg	△	8,897
789		12.3	3.3	196 g	完形	164		壺 蓋	16.0	4.5	370 g	◎			1086	21.4	33.0	4.1kg	○
198	杯B蓋 I	12.8	3.2	138 g	完形	990			15.2	5.0	342 g	○			1090	19.6	30.2	2,633 g	○
404		17.2	3.4	374 g	完形	994	14.2	4.3	327 g	△		1099	17.8	26.0	2,274 g	◎	3,923		
434		16.8	4.2	350 g	完形	1011	11.4	3.6	226 g	完形		1111	19.2	(31.4)	1,826 g	△	5,145		
470	16.9	2.1	313 g	完形	1024	10.2	3.6	194 g	完形		1117	20.3	35.0	2,540 g	○	7,279			
726	杯B蓋 II	13.3	変形	171 g	完形	1026	短頸壺	13.1	28.9	5.1kg	△	12,756	1119	20.7	32.6	2,631 g	△	6,662	
733		12.3	3.5	160 g	完形	1027		14.2	26.3	4.4kg	○	10,607	1105	22.4	14.2	1,400 g	◎	3,079	
734		12.0	3.2	141 g	完形	1029		12.2	23.3	2,598 g	○	6,055	1107	40.0	24.0	6.3kg	◎	17,071	
43	杯B I	15.0	6.0	373 g	完形	1035		11.5	21.8	2,265 g	○	4,805	1158	壺B III	20.8	39.5	5.0kg	△	15,609
44		15.0	5.8	363 g	完形	1031		10.2	21.4	1,971 g	○	4,125	1144		II	28.0	51.0	12.3kg	○
48		14.4	5.0	355 g	完形	1037	10.0	18.2	1,441 g	○	3,006	1143	I		39.0	69.0	30.8kg	○	144,686
913	杯B II	11.1	3.9	168 g	◎	1045	10.0	15.0	1,305 g	○	1,923	1157	壺A	25.5	(44.2)	5.6kg	△	21,947	
928		11.3	3.9	161 g	◎	1064	直口壺	11.8	37.1	3.9kg	◎	9,746		1150	26.2	(47.0)	6.2kg	△	(27,233)
942		10.9	3.5	168 g	◎	1066		11.7	36.8	3.7kg	○	10,849		1156	24.0	(49.2)	7.6kg	△	27,611

・横瓶の口径は体部の直径を、器高は長さを示す ◎ほぼ完形、石膏が少ない ○石膏がやや多い △石膏が多い